



うつせみのあなたに  
2022年9-10月

星野廉





# 目次

09/01 音と声と流れになって移ってくる時 * . . . . .	3
09/02 プライベートな場所、プライベートな部分 * . . . . .	19
09/03 思いが重みとなって移ってくる * . . . . .	31
09/03 似ている、そっくり、同じ、同一 * . . . . .	37
09/04 影に先立つ【引用の織物】 * . . . . .	53
09/06 「この詩は、まちがっています」 * . . . . .	73
09/08 名前のない世界、動きだけの世界 * . . . . .	83
09/09 他人の家に入る * . . . . .	101
09/10 「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる * . . . . .	113
09/11 名詞的なもの、動詞的なもの * . . . . .	119
09/12 レッテルたちと戦いながら生きていく、たったひとつの名前 * . . . . .	129
09/14 one way or another * . . . . .	137
09/14 動くものを手なずける	

* .....	147
09/15 「AとB」での主役は「と」なのです	
* .....	161
09/15 レトリックだけでなりたっているような文章	
* .....	167
09/16 「似ている」の魅惑	
* .....	187
09/17 言葉と現実のあいだを行き来する	
* .....	201
09/19 伝わるもの、伝わらないもの	
* .....	213
09/22 ツイート集・2022/09/15-22	
* .....	221
09/23 2022/09/23	
* .....	237
09/25 すくえないことで、すくわれる	
* .....	241
09/26 抽象を体感する、体感を抽象する	
* .....	251
10/01 ネット上で「書く」	
* .....	275
10/01 【小説】顔	
* .....	289
10/02 おまかせします。	
* .....	299
10/04 空っぽ	
* .....	313

09/01 音と声と流れになって移ってくるとき



＊

音と声と流れになって移ってくるとき

星野廉

2022年9月1日 07:58

この記事は、拙文「音と声があるだけ、流れがあるだけ」に加筆した文章と、思い出の楽曲の動画を織りまぜながら、再構成していきます。

目次

意味の分からない言葉、意味を知らない言葉

まなまな

けせらせら

まじなう

ぶるどっぐ

いえろーさぶまりん

はっばふみふみ

ふにくら

すきやき&ぷらすちっく

意味があるよりも意味がないほうが自然で、おそらく正しい

意味の分からない言葉、意味を知らない言葉

うさぎおいしかのやま

こぶなつりしかのかわ

ゆめはいまもめぐりて

わすれがたきふるさと

ひらがなで入っているような歌詞があります。ふいにあれよあれよと出てくるのです。声に出して歌っても、心か頭の中に浮かぶだけでも、漢字をまじえた文字として意識することはありません。

強いて言えば、丸っこい字面のひらがなで入っていて、ひらがなとして出てくる感じなのですが、たぶんそのひらがなという文字さえない気がします。

音だけ。きっと聴いて覚えたのでしょう。譜面や歌詞カードを見ながら覚えたのではありません。文字と意味は後付けなのです。

もともと言葉は無文字だったはずですね。個人としての人にとっても、種としてのヒトにとっても、初めはそうであったはずです。

いま思えば、日本語であったり、外国語であったりしますが、旋律に乗って口をついて出てくるその言葉は、遠い昔に入ってきたときの名残をとどめています。つまり、意味の分からない言葉、意味を知らない言葉という様相を帯びているのです。

引用したのは、唱歌「故郷（ふるさと）」、作詞は高野辰之、作曲は岡野貞です。

＊

それにしても見事です。文字数がぴったり合うではありませんか。十文字。こんなことは聞いているだけでは分かりません。

うさぎおいしかのやま  
こぶなつりしかのかわ  
ゆめはいまもめぐりて  
わすれがたきふるさと

さらに、意味の区切りが揃っていることにも驚かされます。六文字・四文字。この調子で三番まで続くのです。これは、おそらく見て分かるのです。なかには聞いただけで分かる非凡な才能に恵まれた人もいるでしょうが、凡人である私はこうやって文字にして、あらためて驚くだけです。不思議でなりません。

うさぎおいし かのやま



こぶなつりし かのかわ  
ゆめはいまも めぐりて  
わすれがたき ふるさと

こんな素晴らしいものが自分の中に入っていたのですね。そしてふいに、あれよあれよと出てくるのですね。

この歌詞を漢字をまじえて書くこともできますが、あえてしません。いままで育んできた夢が壊れそうな予感がするからです。作詞の高野辰之さん、作曲の岡野貞さん、ごめんなさい。

\*

とういんこー、とういんこー、りーろすたー。

これは、保育園児のときに、市内のアメリカ人宣教師が教えてくれたものです。ふいに、あれよあれよと出てきます。

Twinkle, twinkle, little star,  
How I wonder what you are!  
Up above the world so high,  
Like a diamond in the sky.

綺麗に韻を踏んでいます。こうやって文字にすると驚きますが、同時に軽い失望感も覚えます。文字として知らなかったときの、多幸感に似たときめきが失われていく気がするからでしょうか。

## まなまな

外国語の歌で覚えているものはありませんか？ 意味はよく分からないのだけど歌える、そんな歌がないのでしょうか？ 全部じゃなくて、ほんの一部だけでもいいです。

おまじないのように聞いていた歌があります。幼かったころから、少年時代、青年時代、中年時代、そして老年期という流れの中で、つねにありましたし、いまもあります。

生まれつきぼーっとしている性格なので、意味が分からずに聞いていて、その意味を積極的に知ろうともしないで生きてきました。

マナマナ

いまでも、ときどき頭（あるいは耳）の中で鳴ることがあります。子どものころに聞いた記憶があるのですが、それは以下の曲だったようです。

(動画省略)

Mah Nà Mah Nà 1969

意味がないものとして耳に入ってきた。とにかく聞こえた。とにかく耳に入ってきた。そんなふうにして覚えてしまったのではないのでしょうか？

音だけで覚えている、外国語だったと思われる言葉。音だけ。意味不明。たぶん意味は後で分かる。あとになっても意味が分からないものもあるにちがいません。

以下の動画は記憶があります。セサミストリートで見たものです。

(動画省略)

マナマナ (Mahna Mahna)

久しぶりに、この動画を見ました。当分の間、このマナマナが頭の中で鳴ると思います。うれしいような、うざいような、こわいような……。

けせらせら

ケセラセラ……

これは英語でも日本語のカバーでも何度も聞いてきました。子どものころには意味は分かりませんでした。本や雑誌や新聞なんかを読んでいるうちに、「人生、そんなものよ」とか「仕方ない」みたいな意味じゃないかと思いはじめました。

カバーではその意味がちゃんと歌われているのに、気にも留めませんでした。そのうち、正確な意味を知りました。いつ、どうやって知ったのかは覚えていません。

こういうものは、ふいに出てきます。自分の中にあるかどうかは、ふだんは気づかないのです。ふいに出てきて、ああ、こんなものが自分の中にあっただと気づくのです。

久しぶりに、とうとつに出てくる。しかも、あれよあれよと口をついて出てくる。こうなると、まるで他人事のようにながめているしかありません。自分から出てくるのだとは頭で分かっているのですが、とまどっている自分がいます。

自分から出てきたとはいえ、自分の一部だとは思えません。それなのに、なぜか、出てくるのです。

あらためて聞くといい曲ですね。歌詞もなかなかいい。人生について諭された気分になります。

(動画省略)

ケ・セラ・セラ ペギー葉山 1956

英語の歌詞も語呂がよくて、発音および発声練習になりそうです。ペギー葉山さんといい、ドリス・デイといい、歌がうまくて声がじつによく出ますね。この二人がますます好きになりました。

(動画省略)

Que Sera, Sera (Whatever Will Be, Will Be) Doris Day 1956

**まじなう**

マナマナといい、ケ・セラ・セラといい、南欧の言語、つまりもともとラテン語から来た言葉であったり、おまじないであったりするようです。その特徴として、子音と母

音が交替で並ぶので語呂がいいですね。英語の中に混じるとまた独特の響きを放ちます。

「あいうえお表」を見ると一目瞭然ですが、日本語でも子音と母音でセットになった音が大半を占めます。その日本語にマナマナとかケセラセラというような意味不明の子音と母音の連なりが混じると、呪術効果が増すように感じられます。

おまじない・お呪い、まじなう・呪う、のろう・呪う、のろい・呪い・いわう・祝う、いわい・祝い——。こう並べると、尋常ではない雰囲気を感じます。はっきり言って、怖いのです。

のりと・祝詞とか経文をとなえる・唱える行為には何かがありそうです。言霊が怖いので、これ以上は深入りしません。

呪術、呪い・まじない、魔術・マジック・magic、マジ・magie（フランス語です、マジな話が）、まじもの・蠱物。

この符合（※ふごう）、符号（※ふごう）、付合（※つけあい）は、只事ではない。「まじ」めな話が.....。

\*

音楽には疎くて蘊蓄が似合わないので、曲についての背景や解説はしませんが、今回は文章が長くなる予感があります。

うざいなあとお思いの方は、どうか文章を読むのは省略して、曲の動画だけを視聴してください。また、中途難聴者なので字幕のある動画を選びますが、ご了承ください。

ここに集めた曲を楽しんでいただくことが、最大の目的なのです。

ぶるとっぐ

おまじないのように聞こえた歌は、日本語の歌でもあります。私が大学生の時に聞いた曲で、ぶったまげた歌詞が出てくるのがこれです。

ニッチもサッチも……

ここだけのインパクトが強すぎて、他の部分はぜんぜん頭に入って来ないのです。今回あらためて歌詞を見て、そういう内容だったのかと謎が解けましたが、謎や不思議をそのままにしておきたい私は、ブルブルっと頭を振って記憶を追い出しました。

以下の動画ですが、あのゴムベルトをおもむろに用意する辺りから、目が釘付けになります。何という振りなのでしょう。

とっても不可解でシュールです。なんで？ なんでなの？ という気持ちを抑えるのに苦勞します。これだけ印象に残っているのですから、文句なしに名曲だと思います。

(動画省略)

ブルドッグ フォーリーブス 1977 作詞・伊藤アキラ 作曲・都倉俊一

\*

音、音楽、旋律のように聞こえる言葉。

歌を歌う時に、人は意味が分からなくなっていることはよくありますね。カラオケなんかで、あるいは合唱なんかで、意味が不明になっている状態を経験したことはありませんか。

聞こえているけど理解して聴いていない。音だけの言葉。音に節をつけたように聞こえる言葉。旋律や流れだけのような、意味が飛んでしまっている言葉。とくにサビの部分が、そうではないでしょうか。

いえろーさぶまりん

## イエローサブマリン、イエローサブマリン

英語を習う前だった私には、「おまじない」の不思議な言葉以外のなにものでもありませんでした。誰かに黄色い潜水艦という意味だと教えてもらいました。でも、黄色い潜水艦って何だろう？ 謎でした。

この曲は、小学生から中学生のころにさかんに聞きました。ビートルズがナンセンス好きなのは薄々知っていたので、おふざけなんだなあとは思いましたが、聞くたびに頭の中で荒唐無稽な映像が浮かんで、うなされました。

英国でナンセンスと言えば、「マザー・グーズ」ですね。英国および米国では、童謡として親しまれているそうですから、ビートルズのメンバーたちの体にもその詩やメロディーが染みこんでいるのではないのでしょうか。

あらためていま聞くと単調な旋律の繰り返し、呪術的效果を盛り上げている気がします。

この「イエローサブマリン」という曲は、メロディーが何だか変わっているというか妙なノリですね。英語の歌なのに、英語っぽくなくて、日本語の演歌とか民謡っぽくこぶしみたいなどころがあると感じていたのです。

盆踊りみたいな振りで踊ったら合うのではないか……。後に「イエロー・サブマリン音頭」が出て、ああ、これだと納得しました。やっぱり、このメロディーは民謡にすれば日本語の歌詞にぴったり合うなあ、と。

たしか、ビートルズのアニメ映画を映画館へ見に行ったような気がするのですが、よくは覚えていません。

歌詞を見てみましょう。人を食った感じですね。

(動画省略)

イエロー・サブマリン (Yellow Submarine) 1966 The Beatles

## はっばふみふみ

(動画省略)

## はっばふみふみ

大橋巨泉さん出演のCMです。1969年。中学生から高校生にかけての時期でした。まわりの生徒たちが盛んに真似ていました。私は見ていただけです。恥ずかしかったのですが、たぶん反抗期だったのでしょう。

これは、意味不明なままに、ずっと引きずってきましたが、最近になってネット検索をしたり、YouTubeで動画を見て、「おまじない」度が減少するかに思えたのですが、相変わらず、「おまじない」のままなので、うれしいです。めちゃくちゃ好きです、こういうナンセンス。

検索中に、この「おまじない」の意味を解説（種明かし）しているサイトを見つけましたが、見なかったことにします。

## ふにくら

フニクリ フニクラ

これはよく聞きました。いろんなところで。運動会でもかかっていた記憶があります。テレビのCMでも、何種類か聞きました。みんなの歌でも聞いたような。

これ、何ですか？ どういう意味なのか、さっぱり分からないまま、歳を取りました。ウィキペディアの解説を読みましたが、いまひとつ分からないので、ほっとしています。これは謎のまま、おまじないのまま、墓場に持って行けそうです。楽しみが増えました。

(動画省略)

フニクリ・フニクラ

すごく声量のあるお兄さんが歌い上げている動画を選びました。イタリアのものらしい原曲は割愛します。

### すきやき&ぷらすちっく

うえをむふいて あるこおほほ ん、なみだが.....

大好きです。永六輔さんの詩はいいですね。シンプルな言葉で素朴な感情をうたう。それがある意味深い。驚くのは、大和言葉（和語）しか使われていないことです。大和言葉大好き人間の私は感動してしまいます。

だいたいにおいて日本語の歌詞には大和言葉がきわめて多く使われています。歌謡曲には詳しくないので分かりませんが、そういうことになっているのでしょうか。作詞講座などでは、大和言葉をベースに作詞しなさいと教えているとしか思えません。

漢語系の言葉だと、同音異義語が多くて聞き間違いやすいし、頭で理解するようなどころがあって、大和言葉のようにお腹に来るといふか体に染み入る語感に乏しいのかなあと勝手に思っています。

「あの人が妊娠したんだって」とか「ご懐妊です」よりも、「あの人が赤ちゃんができたんだって」とか「おめでたです」のほうが、ぴんと来ます。前者だと「は？」と一瞬理解が遅れるのに対し、後者の大和言葉（和語）だとすっと入ってきます。まさに腑に落ちるという感じ。個人の感想ですけど。

あと日本語の歌詞には英語や英語もどきも多いですね。これは漢語系の言葉と違って、同音異義語の心配は要らないし、洒落た感じを醸しだすのに便利なツールだという気がします。だから、使うのでしょうね。たぶん、ですけど。

\*

話を戻します。



うえをむふいて あるこおほほ ん、なみだが.....

どうしてこれがおまじないかと言いますと、この日本語のまま、ヨーロッパ、英米だけでなく、世界中で聞かれ親しまれたからなのです。日本語を知らない人たちの間で聞かれたということですね。中には何度も聞いているうちに部分的にでも口ずさんだ人がいるにちがひありません。

まさにおまじないです。意味が分からないままに聞かれたのです。極端に言うと、マナマナと同じ。すごくありません？

二つの動画を紹介しますが、できれば YouTube に入ってコメントを読んでみてください。かつて耳にした Sukiyaki を懐かしむ海外の人たちの言葉が心に染み入ってきます。

いまは竹内まりあさんの Plastic Love が、日本語のまま（つまり、私の言う「おまじない」として）世界各地で親しまれたり歌われていると聞きます。素晴らしいですね。

(動画省略)

上を向いて歩こう 坂本九 作詞・永六輔 作曲・中村八大

以下の動画は海外で撮影されたものらしいのですが、歌う表情や仕草がその土地のショーに馴染みすぎてすごく「バタ臭い」感じがします。一方で作られた日本人ぽさも感じます。

(動画省略)

それにしても堂に入っていてまさにエンターテイナーしていますね。動画を見ながら聞くと日本語に聞こえないです。私は暗示にかかりやすいみたい。

\*

さて、今度は竹内まりあさんの歌です。

試しに字幕のローマ字を見つめて視聴してみてください。異化が働いて、海外の人た

ちがこの歌を聞いて味わう「おまじない」感とは違った「おまじない」感を味わえると思います。

(動画省略)

Plastic Love Mariya Takeuchi

### 意味があるよりも意味がないほうが自然で、おそらく正しい

ただ歌っているだけ。あるいは唱えているだけ。でもちゃんと間違えないで歌っているし、すらすら口から出てくる。そんな歌やそこそこの長さの言葉があるって幸せではないでしょうか。

苦しい時にも、悲しい時にも、うれしい時にも、口から出てくる歌やフレーズがある幸せ。覚えている言葉がある幸せ。

母語か外国語かは関係ありません。言葉であること、とりわけ音声であることが大切なのです。話され、放たれた言葉には節（ふし）があります。この節を動きや波と取ってもいいのではないのでしょうか。

動きや波はおそらく移ってくるのです。映るでも、写るでもなく、移る。伝わるであっても、通じるではない気がします。意味やメッセージが意識されないという意味です。それでいて言葉なのです。

(外から移ってくる動きや波を、人の中の何かが迎えて意味が「生じる」のではないかという気がします。中で起きることについては確認しようがありません。)

言葉であって意味やメッセージが意識されない。これは言葉においては矛盾ではなく、誰もが日常生活で頻繁に経験することなのです。

\*

死ぬ間際でも、口ずさむことができる歌や文句があります。死に際には、眉根を寄せて意味を考える余裕はないと想像します。

言葉は音。言葉は声。言葉は音声。言葉は意味を失う。もともと音や声に意味などない。文字と意味は後付けなのです。

意味は消えても音だけが残っている。まず音があった。意味は後付け。意味があるより、意味がないほうが自然であり、おそらく正しい。

赤ちゃんを思いうかべてみてください。音だけがあり、意味なんて知らないのです。ましてや文字なんて習ってもいないのです。音とその音が乗っている、高低と強弱のある口調や節まわしやメロディーがあるだけ。

\*

寝入り際に、よく口をついて出てくる歌やフレーズがいくつかあります。頭の中でそれが鳴っているのですが、自分が歌ったり唱えているのか、誰かが耳もとでささやいているのか、記憶が再生されているのか不明になります。

頭の中で鳴っているその歌や声には意味がない気がします。意味を考える余裕がないというか、意味を意識するには力が要るからです。

意味があるより、意味がないほうが自然であり、おそらく正しい。ヒトとしてではなく、生き物として正しい。そう気づくことは、恥ずべきことでも、野蛮なことでも、下等あるいは劣等ないとなみでもない。

体はそのことを知っているのかもしれませんが。そして、人が無防備になったとき——ぼーっとしているとき、寝覚めや寝入る前の夢うつつ、あと、たぶん臨終のとき——、体がそっと教えてくれる。音と声と流れになって移ってくる。そんな気がします。

# 音楽 # 洋楽 # 邦楽 # 言葉 # 歌詞 # 歌 # 日本語 # 声 # 文字 # 外国語 # おまじない



09/02 プライベートな場所、プライベートな部分



＊

## プライベートな場所、プライベートな部分

星野廉

2022年9月2日 07:49

他人の家に入るとわくわくするとか、ドキドキすることがありませんか？ よその家に足を踏み入れた瞬間に、その家独特の匂いがしたり、自分の住まいとは違う湿度を感じたり、何か見てはいけないものと出会う予感がしてどぎまぎすることがないでしょうか。

私の場合には、思わず身構えている自分がいます。緊張するのです。なぜか、後ろめたい気もします。

店や公共の施設に入るのとは違った気持ちがするとすれば、それは私たちの遠い祖先が感じていたであろう、他人のテリトリーを侵犯する際のスリルに似た感覚が呼び覚まされ、刺激されるからではないでしょうか。こうなるとスリルというよりも、恐れや警戒心と言うほうが適切かもしれません。

もちろん、人それぞれですから、いまお話ししているのはあくまでも私個人の意見です。

恐れや警戒心というのは、まず皮膚的な感覚として生じる気がします。気配というやつです。さきほど侵犯という言葉を使いましたが、侵も犯も「おかす」という大和言葉に当てた漢字です。「おかす」は「侵す、犯す、冒す」と書き分けることができます。

大陸から渡ってきた、あるいは持ってきた中国語の文字を使うことで、「おかす」という大和言葉が分かる、つまりその意味が分かれるというのは、興味深い現象ですね。分ける、そして分かれることで分かる。狐につままれたような気がします。不思議です。

＊

わかる、分かる、判る、解る、別る。

わかるが漢字に変わると分かる。

かわる、変わる、換わる、代わる、替わる。

かわるが漢字に変わると分かる。

わかるとかわるという似た字面の言葉の意味がシンクロしているかのように見える瞬間。これが変換ですね。パソコンやスマホの文字入力以前に、日本語をつかう人がずっと頭の中でやってきたことです。

不思議と言えば不思議ですが、ふだん誰もがやっています。この時点でもやっていますね。こういうことに深入りすると収拾がつかなくなり、「おかす・おかされる」ことになるので、今回は深入りするのはやめておきます。

＊

ここでは文学作品を例に取って、他人の家に入る行為がどんなことなのかを考えてみましょう。他人の家に入る場面のある小説なんて、それこそ掃いて捨てるほどあると思われるかもしれません。今回は他人の家に入ってわくわくしたり、ぞくぞくしたりする場面が出てくる作品に的を絞って考えてみます。

そんな作品はあるのかと疑問に思われる方は多いのではないのでしょうか。一つ例を挙げると、レイモンド・カーヴァーの『隣人』（村上春樹訳）という掌編が、それに当たります。

アパートかマンションに住んでいる夫婦の話——。廊下を隔てた隣人である別の夫婦が長期の旅行に出ることになり、その留守中にペットと室内の植木の世話を頼まれる。鍵を預かり数部屋から成る住まいに入って、言われた通りに猫に餌をやり植木に水をやる。



それだけならいいのですが、それだけでは済まないのです。妙な心理におちいります。魔が差したという感じなのです。おそらくふだんは自覚していなかった深層の心理が、旅行に出かけた隣人夫婦の住まいの管理を頼まれたことをきっかけに突如として出てくるのですが、不気味で読んでいてわくわくします。

どこにでもいるような登場人物と、ありがちな設定を用いて人間の心理の不可解さに迫るといふ小説作りがカーヴァーはうまいと思います。

\*

何が妙なのかというと、隣人夫婦から留守番を頼まれたこの夫婦ときたら、やたらと性的な興奮を覚えるようになる、つまり催すのです。お隣の夫婦の住まいですよ。変といえば変、分かるような気がするといえば分かるような気がするのですが、いずれにせよ妙な話であることは変わりません。

こんな夫婦に留守宅を任せたくありませんよね。留守番を頼んだ隣人夫婦は、まさに知らぬが仏でしょう。いや、この掌編の劇的な結末からすると、知らないままには済みそうもないのですが、ネタバレになるのでこれ以上立ち入ることができないのが残念です。

ネタバレにならないように気をつけながら、二人の奇妙な行動を追ってみましょう。

\*

隣人のストーン夫妻が車で旅立つのを手を振って見送った後、妻のアイリーンは自分たちも休暇を取りたいものと夫に漏らします。

”そして彼の腕をとって自分の腰に回し、アパートの入口の階段を登った。”  
(引用はすべて『頼むから静かにしてくれ (THE COMPLETE WORKS OF RAYMOND CARVER 1)』村上春樹訳 (中央公論社刊) による。)

この描写は、後の展開を知っていると象徴的な仕草に見えます。つまり、伏線とも取れるのです。

夕食を終えると夫のビルがストーン夫妻の住まいに入り、頼まれたとおりに猫に餌をやった後に、バスルームに入る。そして鏡に映った自分の顔を見る。ここまではいいのですが、次に薬品戸棚からハリエット・ストーンに処方されている薬の瓶を見つけて、それを何とポケットにつっこむのです。

この神経は尋常ではないにもかかわらず、抑制された文体で淡々と描写されているために、あれよあれよと読んでしまうとすれば、カーヴァーの術中におちいったことになるでしょう。さらにビルは、居間で植木に水をやったその手で酒の入ったキャビネットを開け、奥にあるウィスキーを取り出して、瓶からふたくち飲みます。

ビルがストーン夫妻の部屋から出るところを引用してみます。

”彼は明かりを消し、そっとドアを閉め、鍵のかかっていることを確認した。何か忘れものをしてきたような気がした。”

何気ない描写ですが、短編や掌編を書き続け、さらには何度も書き直したという職人のようなカーヴァーの作品を目前にしたときには、書かれている言葉を舐めて味わうようにして、ゆっくりと読み進めたいです。「何か忘れものをしてきたような気がした。」というセンテンスが気になります。意味不明というか不可解なので、不気味でもあります。

\*

他人の家でこういう行動をする心理をどうお思いになりますか。誰も見ていないのだから、自分もやっちゃうかも、なんて感想をいなく人がいても驚きません。

いまでこそ、お風呂とトイレの一緒になったバスルームは珍しくありませんが、たとえば両者が別個だった住まいで三十歳過ぎまで生活していた私にとっては、そうしたバスルームがあることは頭で分かっているにしても、感覚的にはやはりその二つは別物だという印象が強いです。

ここで、お風呂もトイレもプライベートな場であることに注目しましょう。ところで、英語で「プライベートパーツ (private parts)」というと、男性では生殖器と臀部、女性で

は性器と臀部に加えて胸部を指すそうです。だから複数形なのですね。

日本で「プライベートパーツ」というと、これに口が加わるそうです。妊娠、出産、性愛、生命にかかわる部分という説明がなされることが多いみたいです。確かに性的虐待の実態を考えると、この四か所の選択は妥当だと思います。

＊

家族って何でしょう？ 夫婦やパートナー同士の関係ってどんなものなのでしょう？

二人の人間が付き合う、そして結婚やそれに類似した形で結ばれる。その関係の基本的な部分ではトイレとお風呂の共有があり、身体的なまじわりがありますね。恋とか愛とかいう抽象的な次元ではなく具体的な行為として、身体の触れ合い、たとえばプライベートパーツの触れ合いがあります。その中で性器の接触があるわけですが、性器は排泄器官でもあります。

家族の中で赤の他人は夫婦だけ、また性愛関係が成立するのは夫婦間だけだといわれることがあります。家族といっても、血縁関係のない成員がいる場合もあれば（たとえば養子縁組や再婚の結果です）、育児期にある子どもがいるとしないとは、子どもや子ども以外の成員のプライベートパーツの扱いや接触は異なるにちがいません。

プライベートパーツをさらけ出す場所が、お風呂やトイレというプライベートな場であることは注目すべき現象だと思います。体を洗う場と体内に溜まったものを出す場で、性と排泄が関与するパーツや器官を露わにするわけです（当たり前のことなのでしょうが、こうして言葉にすると私なんかははっとします）。夫婦やパートナー同士や家族とは、そうした場を共有する人間だといえるでしょう。

＊

話をカーヴァーの掌編に戻します。

廊下を隔てた隣人の留守番を任されたとはいえ、ビル・ミラーのしている行動は一線を越えつつあるのではないのでしょうか。用を足すわけでもないのにストーン夫妻の住まいのバスルームに入った時に、ビルのスイッチが入ったように考えられます。

そもそもスイッチが入る素地は十分にあったようです。素地とは、自分たちよりも経済的かつ社会的に成功しているストーン夫妻への憧れです。自分たちが取って代わりたい存在、つまり憧れと言ってもいいでしょう。隣人夫婦に対して、入れ替わりたいという潜在的な願望があったともいえるかもしれません。

ストーン夫妻の住まいに入り猫に餌を与え植木に水をやったビルが、自分の家に戻った時の描写に注目しましょう。

”「ずいぶん時間がかかったじゃない」とアーリーンが言った。彼女は両脚を膝の下に折り畳むようにしてテレビを見ていた。  
「何でもないよ。キティーと遊んでいたのさ」と彼は言って体を寄せ、彼女の胸に手を触れた。  
「さあ、ベッドに行こうぜ」と彼は言った。”

何気ない夫婦の行動のようですが、これは文字数の少ない掌編小説なのです。しかも書き手は掌編や短編を書き慣れた巧者カーヴァーですから、普通の生活の普通の行為が淡々と描かれているというよりも、このごく短い作品の中で何らかの意味を持つ「選ばれた描写」であると考えられるのではないのでしょうか。

そうなのです。カーヴァーは意外とエロいのです。しかもほのめかしや匂わせの名人であると考えて読むと、この作品の面白さとエロさが堪能できると思います。

＊

翌日からのビルとアーリーンの行動が面白いです。ビルはいつもより早く帰宅し、自宅に入る前「向かいの部屋の扉に目をやった」後に、妻をベッドに誘います。「彼はズボンのベルトを外した」という一文まであります。

中華料理の出前をとって夕食を済ませたビルはそそくさと向かいの家に行き、猫に餌をやる。そして「戸棚を全部開けて」中を隅から隅まで点検し、冷蔵庫を開け、中にあったチーズを齧り、林檎を食べながらベッドルームに行く。「すごく大きく見えた」ベッドの脇にあるナイト・スタンドの引き出しを開け、そこにあった煙草の箱をポケットに入れる。呼び戻しに来たアーリーンから、もう一時間以上もいると言われるビル。

”「便所に行きたくなってさ」と彼は言った。  
「自分の家で入りゃいいでしょう」と彼女は言った。  
「我慢できなかったんだよ」  
その夜二人はもう一度セックスをした。”

＊

ビルが尿意あるいは便意と、性的な興奮とを同時に感じているのかどうかは明記されていませんが、性器と排泄器官とがほぼ一致した形で人間や多くの動物の身体に備わっていることからして、その両方の機能の間に連関があっても不自然ではないと思われます。

かつて私はミステリーや犯罪小説というジャンルで小説を書こうとしたことがあり、その種の文献を図書館で漁っていた時期がありました。小説だけでなく、法医学、刑法、警察組織、犯罪心理学、異常心理学、FBIの捜査官による手記という具合に広範囲にわたる資料に目を通し、勉強していたのです。

確か元警察官による実話集みたいなものにかかれていたのですが、犯罪現場に排泄物が残されているケースが多々あるのだそうです。ビルの行動を読んでいて、それを思い出しました。似た記述がFBI捜査官の手記にもあった記憶があります。

排泄物が残されていると言っても、トイレにその形跡、つまり飛沫などが壁や床に付着しているといった程度から、殺人現場や窃盗が起きた部屋に排泄物や体液が堂々と残されているといったいささか猟奇的、あるいはおどろおどろしい実話までありました。

緊張とかストレスによって尿意や便意を覚えることがありますが、それとも似ているのかなあ、なんて考えているのですが、どうなのでしょう。犯罪を犯すには体力も運動量も要るから発汗をはじめさまざまな生理現象が起こっても不自然ではないし、だいいち相当なストレスがかかりますよね。行為の途中で胃がぎりぎり痛む人もいないかと想像します。お腹の緩い人やおしっこが近い人なら、催すのではないのでしょうか。

ちなみに、ミステリーを書こうという企ては挫折しました。犯罪について勉強しているうちに精神的に参ってしまったのです。しばらくはミステリーは手に取らず、テレビ

06/02 クラウド・ノックアウト・ノックアウト

のミステリードラマさえも見る気がしませんでした。どうやら、私は感情移入が激しく同化しやすい性格みたいなのです。

＊

カーヴァーの短編や掌編では、住まいに他人がまるで「異物」のように入りこむ話が目立ちます。「異物」というのは、その住まいと住人（多くは夫婦なのですが）にとって不気味で異質な存在であり、何か不穏な事態を招く存在だという意味です。『隣人』では、留守中の猫と植木の世話を頼まれたとはいえ、ストーン夫妻の住まいに入りこんで物色したり私物をいじるビルとアーリーンは他人の住居に侵入する「異物」と見なしていいと思います。

他人のテリトリーを、おかす、侵す、犯す、冒す——というわけです。

『大聖堂』という短編では、「私」という語り手の妻の友人である「盲人」ロバートが家に泊まりに来ます。このロバートが語り手の心や感覚を揺さぶるのですが、その揺さぶり方が奇妙なのです。盲人に大聖堂がどんなものを言葉と絵で描写するという思いがけない展開に戸惑う読者が多いでしょう。しかもその記述がじつに触覚的で、読者はあれよあれよという間にカーヴァーの術中にはまるにちがいありません。

『ファインダー』は、「両手のない男がやって来て、私の家を写した写真を売りつけようとした」という具合に始まります。この一文だけでもカーヴァーはうまいと思います（持論なのですが、ほのめかしの多い淡々とした筆致のカーヴァーは、意外とサディスティックなのです）。男はトイレを使わせてくれと頼みます。トイレもカーヴァー特有の小道具です。語り手の「私」は、赤の他人であるこの男に自宅で、いわば「こき使われる」はめになります。

『ささやかだけど、役にたつこと』とそのショート・バージョンである『風呂』では、交通事故で意識不明になった息子の入院中に、何度も自宅にかかってくる電話が「異物」となります。ところで、それほど重要な要素だとは思えない風呂 (bath) がタイトルになっているのは興味深いうえに不可解で、何か読み落としたのかと気になるほどです。父親か母親のどちらか一方がいったん病院から帰宅して風呂に入っている間が、親子三人がばらばらになり、各人が一人になる時であるという意味で重要なのでしょうか。ここでは、風呂が基本的に一人になる場であると指摘するだけにとどめ、その象徴的な意味については別の機会に譲りたいと思います。

『ダンスしないか』においては、カーヴァー・ワールドで頻出する家具や生活用品が、ガレージセールという形で庭に出されます。庭がにわかに住まいの様相を呈するのです。売主である「彼」は結婚が破綻したらしい中年男で、その家の庭に結婚前の男女が現われるのですが、ここでは住まいがもはや住まいではなくなっています。庭に並べられた物たちが住まいを追い出された「主」で、中年男や若いカップルのほうが「異物」に見えるのです。カーヴァーによる自作の脱構築と評するのは、言い過ぎでしょうか。

こうして一連の短編や掌編を振り返ると、カーヴァーの作品がシットコム（シチュエーション・コメディ）のように思えてくるのは私だけでしょうか。あるちょっと変わった状況に置かれた人間の行動が描かれるのですが、引きこまれて読んだ後にひと息入れて思いかえすと、どこかおかしくて笑えてくるという意味です。

コントやギャグみたいに笑える。笑いが無い状況であるゆえに余計に滑稽に思われる。カーヴァーの作品についてよくいわれることですが、不条理なのです。アメリカ人のカーヴァーが喜んでテレビのシットコムを見ていたような気がしてなりません。

カーヴァーの掌編や短編のようにささやかだけど優れたものについて語る時には、語る内容やストーリーの解説は十分に気をつけなければなりません。つい詳しく語ってしまってネタバレになる恐れがあるからです。

話を戻します。

＊

掌編小説『隣人』では、さらにビルの行動はエスカレートしていきます。スイッチが入ってどうにもとまらなくなったようにも見えるほどです。

仕事を病欠までして隣人宅に入り、部屋から部屋へと移り、「目に触れるものひとつひとつを子細に検分し」、ついにベッドルームに入ります。カーヴァーらしいほのめかしの描写が続きます。ほのめかしというものは、それが目につくと扇情度はいや増すのですが、そう感じた時には既にカーヴァーの術にはまっているといわざるを得ません。

ほのめかしの箇所を列挙しようとしたのですが、あまりにもいやらしく思えてくるの

で割愛します。大切な部分だけを取り上げると、ビルはストーン夫妻の夫であるジムの衣服を着たり、靴を履いたり、何とジムの妻ハリエットの着やブラウスまで身につけるのです。

夫のビルの常軌を逸したそわそわが伝染したかのように（いや、伝染したのでしょうか）、妻のアーリーンもハリエット宅を物色し衣服を試着しているのを示唆する記述があり、引き出しの中にある写真を見つけたのよとビルに告げる場面もあります。困った夫婦ですね。

小説を書く習慣のある者から見ると、こういう夫婦の行動を子細につづる作者の心理のほうが気になって仕方ありません。ちょっと待ってよ、そこまで書くか、カーヴァーさん、という感じです。

もちろん明かすわけにはいきませんが、この掌編のラストには驚愕します。ざまあ見るとほくそ笑む人と、ああかわいそうにと声を漏らす人に二分される気がします。個人的には、深く同情してしまいました。たぶん、二人と同類だからでしょう。カーヴァーは意地が悪いと思いました。



『隣人』は『頼むから静かにしてくれ (THE COMPLETE WORKS OF RAYMOND CARVER)』と『頼むから静かにしてくれ <1> (村上春樹翻訳ライブラリー)』（ともに中央公論社刊）に入っています。

私は前者のシリーズを全巻揃えています。巻末にある各作品の村上春樹による解題が読みごたえがあり、そこだけを読んでいたことがありました。村上春樹の著作では『若い読者のための短編小説案内』がいちばん好きなのですが、カーヴァーの作品群を対象にして村上春樹の繊細で周到的な読みを味わえるのはうれしい限りです。

#読書 # 文学 # 小説 # 村上春樹 # レイモンド・カーヴァー



09/03 思いが重みとなって移ってくる



＊

**思いが重みとなって移ってくる**

**星野廉**

**2022年9月3日 07:50**

「慮る」は、「おもんばかり」と「おもんばかり」と読めて、「おもいはかる」から来たようです。「思いをはかる」と考えると分かりやすいですね。駄洒落が好きな者には「重い」や「重み」を「はかる」という連想が浮かびます。

「はかる」といえば、まっ先に頭に浮かぶのがスーパーです。スーパーは「はかる」だらけなのです。どの商品にも数やグラム数や容量が記されています。それはそうでしょうね。お金を出して買うのですから誤魔化されたくはありません。

辞書を見ると「おしはかる・押し量る・押し測る」の「おす・推す」は「押す・圧す・捺す」とも関係があるみたいです。スーパーで、野菜やラップにくるまれた魚なんかを買おうとするときに、指で押ししてみるということがありませんか。商品に圧力を加えるなんて、本当はやっていけないのですが、ついやってしまいます。

「身が引き締まっていて、新鮮かな?」「中が、すかすかなんてことはないだろうか?」そんな思いにつられて、指先で押したり、触ったりしちゃいます。ちょっと後ろめたい気がします。わくわく感やドキドキ感も覚えます。それが「おす・推す」なのかなとも思っています。

そうそう、「重みをはかる」の「重み・重い・重さ」は「思う・思い」と語源が同じらしいという説が辞書に載っていましたが、歯切れは悪いです。

＊

思いあたることがあります。やはりスーパーでの話なのですが、よくキャベツやカボチャを手のひらに載せて「重い・重み・重さ」をはかりますね。そんなときには目を軽く閉じている人がいます。たとえ目を開いていたとしても、その目は宙を見つめているか、うつろです。

あれは、自分の「思い・思う」の中にいるときの、人の表情や身ぶりではないでしょうか。

そんなイメージというか「意味」が気に入ってしまって、このところ、そうした思いを込めて「思う・思い」「重み・重い・重さ」という言葉たちを眺めたり、つづったりしています。「おもいはおもい・思いは重い」とか「おもいおもい・重い思い」なんて具合にです。

こういうのは、おふざけではなく、自分がつづっているさまざまな言葉たちの「重み・思い・意味・イメージ」の「多義性・多重性・多層性」を受けとめて楽しんでいるのです。はかっている、とも言えそうです。「はからずに・測らずに・量らずに・図らずに」、文章はつづれない気がします。

＊

一方の「わかる」には、殺伐とした印象がつきまとっているように思えてなりません。なにしろ「わかる」には「分ける・切る・割る」という動作が基本にあります。血生臭いのです。ばらばら殺人とか腑分けとかマグロの解体という言葉を連想します。痛々しいのです。「はかる」という言葉には、そうしたすさんだイメージをいまくことはありません。

「分かる」の基本的な身振りは「分ける」ですから、要するに頭の中で分けて「見ているだけ」という感じがして冷たく感じます。「はかる」は「推しはかり」、形だけでも共感し同情してくれます。見ている、そのまなざしが温かいというか、心と目の動きを感じさせる言葉です。

小学校の低学年のころに、商店街へよくお使いに行かされましたが、「はかる」で思い出すのはお肉屋さんでのやり取りです。たしか「ギユウのナミを百グラムください」とこちらが言うと、いつもコロッケを揚げている島倉千代子さん（もちろん、若き日のお千代さんです）にそっくりのおねえさんが「ちょっと待ってね」なんて言って出て来て、

牛肉を量ってくれるのです。母とふたりの家庭で、うちがいちばん貧しかった頃でした。

「気持ちだけ、おまけしておいたからね」という言葉が必ず返ってきて、その「気持ちだけ」という言い回しと、そう言うときのおねえさんの口調が妙に色っぽくしかも優しげで、幸せな気分になったのを覚えています。「気持ちだけ」とか「心持ち」というフレーズの響き。それが、個人的には「はかる」と結びついています。

\*

時計を思わせる上皿式の秤の受け皿に、蠟をひいたような白っぽい紙に載せられた赤いお肉が見える。そこに「気持ちだけ」が加わる。すると「気持ちだけ」針が揺れる。「思い」の「重み」が揺れる。こっちの心も揺れる。秤の動きに似ていませんか。天秤やばねを利用した秤の揺らぎ。共振。ともにふれる。

思いが重みとなって、向こうからこちらへと移る。あるいは、向こうの重みをこちらの思いが受けとめる。それが「はかる」ではないでしょうか。

昔は近郊の農家の人たちが、野菜やお味噌なんかをリヤカーに積んで住宅街を回ってきたものです。リヤカーを押したり引いてくるおばさんたちは、棹秤（さおばかり）と呼ぶのでしょうか、目盛が刻まれた棹と分銅の位置を調節しながら、慣れた手つきでニンジンやキュウリの重さを量っていました。

その仕組みが分かったのは小学校の高学年になってからだと思いますが、そんな妙な道具で重さを「はかる」ことができるというのが、不思議でなりませんでした。お肉屋さんの秤は針と目盛で「目に見える」のですが、農家のおばさんたちの秤は得体がしれなくて、なんだかいつもズルをされているような気がしました。

いまになって考えると、そのときの私は「目に見える」秤を無視して、おばさんたちの「目に見えない」思いをはかっていたのだと思います。

#日本語 # 辞書 # わかる # はかる # 思い # スーパー # 数字



09/03 似ている、そっくり、同じ、同一





＊

似ている、そっくり、同じ、同一

星野廉

2022年9月3日 14:39

目次

再現ではなく再演

顔が見えない

そっくり

そっくりという抽象とまぼろし

そっくりに囲まれて、そっくりに生きる

同じ、同一

同じ、同一という抽象とまぼろし

抽象、まぼろし

再現ではなく再演

夢の中でストーリーを思い出すことがありますか。

夢のストーリーではなくて、夢の中に小説とか映画とかテレビドラマとかそうした作品が出てきて、そのストーリーが思い出せるだろうか、という意味です。

ストーリーといえば、ある程度の長さを持ったものとイメージしています。自分の見た夢を例に取るしかないのですが、夢の中でこれまでに見聞きした作品の断片が出てくることはあります。登場人物であったり、演じた俳優であったり、アニメの主人公やキャラクターであったりします。

夢の中で映画やテレビを見るという展開もありそうですが、そんな夢を見た記憶はありません。夢の中で誰かの話を聞くという場合の話も、筋があるとすれば一種のストーリーではないでしょうか。

夢の中で、昔話や童話の登場人物やある特定の場面が出てきたことはあるような気がします。でも、こうやって夢を思いだして、後付けで言葉にしているのですから、こじつけっぽくて怪しいものです。

私にとって夢とは、見ている最中には断片的で薄っぺらいものを感じられます。それにこうやって意味づけするのは、夢を思い出しているときの覚めた意識なのではないかという気がしてなりません。

夢のさなかには意味づけなどする余裕はなく、あれよあれよと展開していきます。こう考えると、夢は再現できないという意見に傾きますが、そうすると現実と同じではないと思ひあたりました。

夢も現実も再現できない。過去も再現できない。そもそもヒトに再現などできるはずがない。人の意識の根本には、「何か」を「その「何か」とは異なるもの」で置き換える、つまりすり替えるという仕組みがあるのだから——。そう考えると、再現できないのは当然だと納得しないではられません。

ただ、再演ならできるというか、再演しているのではないかという気はします。再演ですから、毎回、ずれているという意味です。再演の演とはプレイ (play) をイメージしています。演技であり演奏であり競技であり遊戯なのです。

## 顔が見えない

人の顔を見分けるのにどちらかという苦勞する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形 (自分の姿) ではなく「とき」 (自分のイメージ=心象) であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがひありません。他のものを見るのとは異なる次元に

いると言いたいくらいのお話なのです。

ひょっとすると、鏡の前では見ているのではなく、おののいているとしか考えられません。それくらい鏡を覗くと緊張するのです。たとえば、鏡に映っているとされる自分を見つめながら、いきなり目をつむるとしますね。そのときに瞼の裏か頭の中か知りませんが、自分の顔が浮かんでほしいのに浮かばないのです。

浮かべ浮かべと念じて、浮かぶのはいつか見た写真に映った自分の顔であり、ほんの数秒前に鏡に映ったはずの自分の顔ではないのが不思議でなりません。つまり私の頭の中にある自分の顔は、ぜんぶ写真で見た顔だということになります。

とにかく見えないのです。ひとさまのことは知りません。問いたですような親しい相手がないからなのですが、たとえ親しい人がいたとしても、恥ずかしくて尋ねる気にはならないでしょう。親しい人とはこのたぐいの話はしたくはないのです。

いつだったか、出てくる人がことごとく同じ顔をしているという夢を見たことがあります。見たのは一度だけなのですが、何度も何度も繰り返して思い出したので、いま覚えているその夢はそうとうズレているにちがいません。

そういえば、どの登場人物も同じ顔をしている映画があったら面白いだろうと考えたこともあります。そんなことを想像したらぞくぞくしてきました。軽い息切れさえしてきました。この手の話が私は好きみたいです。この手の話というのは、顔とか表情とか仕草とか、似ているとかそっくりとか、そういうたぐいの話です。

考えていると時間が経つのを忘れるほどです。

## そっくり

掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉缶だ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。

上に引用したのは有名な一節ですから、ご存じの方も多いでしょう。そうです。夏目

漱石の『我輩は猫である』の冒頭のほうにある文章です。あの長い小説で私がいちばん好きな箇所です。

人の顔を猫の目から見ているという設定ですが、もちろん、これはある人間が想像、いや空想した猫の視点であって、それ以上でもそれ以下でもありません。そもそも、小説とは人による人のためのものですし、漱石先生はそれくらいのことは意識してお書きになったにちがひありません。

いずれにせよ、人間以外の生き物になった自分を空想するのはわくわくして楽しいし、いい頭の体操になります。

あなたは猫の顔が見分けられますか？ 猫や犬は人間にとって最も身近な生き物ですし、ペットとしている人も多いですから、見分けられる人は珍しくないと思います。ニワトリ、牛、馬、ヤギなどの家畜として飼われている生き物についても、その業者さんたちの中には見分けられる方が多いと聞いたことがあります。

要するに興味や愛着があれば、見分けられるのではないのでしょうか。逆にいうと、興味や愛着のない人には、どれも似たり寄ったりに見えるような気がします。

つまり猫やニワトリやイワシから見れば、ヒトはどれもそっくりというお話です。もちろん、猫やニワトリやイワシに聞いたことはありませんから、ここでしているのは戯言にほかなりません。

＊

スーパーの様子を思い浮かべてください。イワシ、サンマ、キュウリ、トマト、パック入りの牛乳、ヨーグルト、マヨネーズ、蚊取り線香、乾電池.....。

こうしたものたちは、そっくりなものが集めて売られていますね。そっくりという基準では動物、植物、製品とか、生き物か無生物か、などという区別は意味がありません。そっくりは印象だからです。いちいちその出自に注目はしません。

見た目至上主義みたいところが、そっくりにはあります。似ているとそっくりの区別もきわめて曖昧でいい加減です。そもそもそんな区別や分析とは遠いところにあるのが、そっくりなのです。

ちょっと分析すると、スーパーやホームセンターや家電の量販店で並んで売られている、そっくりなものたちには、製品であれば大量生産され、動植物であれば大量に飼育や栽培された、あるいは捕獲されたり採取されたという共通点があります。

そっくりであるほど、十把一絡げ的に、まとめて扱えるからでしょうね。一つ一つが違くと値段もつけにくいし運びにくいにちがいありません。なにしろ、早くさばくのが商品の販売の鉄則みたいです。個性と最も遠い世界にあるのが量販店で売られる商品なのでしょう。

\*

そうした大きなお店では、売る人も制服を着て、そっくりに見える場合が多いです。上で述べたようにあくまでも印象の話です。そうしたお店で働いていらっしゃる方には失礼な言い方になっていることをお詫び申し上げます。

場所もそうです。特に同じチェーンのお店だと、店舗のつくりも、商品の陳列の仕方も、流れる音楽も、店内の匂いも、雰囲気も、トイレの様子も、レジでの人の流れも、そっくりに見えてなりません。こういうことに割と敏感なせいか、私は軽い目まいを覚えることがよくあります。

特にコンビニがそうです。フライヤーというのですか、あの油の匂いを嗅いで頭がふらふらしているところに、既視感の洪水というか、反復の反復というか、目の前のコピー感と記憶にあるコピー感がシンクロして、倒れそうになることも珍しくありません。

どこに行っても、同じなのです。そっくりなのです。視覚だけでなく、嗅覚、聴覚、たずまい、そうしたものを総動員したうえで、そっくり同じように感じられます。やはり、似ているどころか、そっくりと言いたいところです。

そっくりがそっくりをそっくりな場所でそっくりなやり方で売る、そしてそっくりな

お客さんたちがそっくりなやり方で買う。そして、自分もまたそっくり化していることにふと気づき、嘔然となる。

おそらくこれが資本主義なのでしょう。というか、資本主義の顔であり表情であり身振りなのでしょう。

### そっくりという抽象とまぼろし

自分もまたそっくりである。そっくりの一つである。こうした状況は、無関心と関係があります。つまり、自分に興味がなく愛情も感じない人にとっては、自分はそっくりでしかない、その他おおぜいの一人でしかないと考えると分かりやすいでしょう。

立場を逆にして、世界のどこかにいる誰かは、あなたにとってそっくりなもの「一つ」であり、「一人」と数えるにも値しないほどのものだと考えられます。言い換えると人間としてではなく、抽象的な存在、たとえば 76 億人という数字の一つにすぎないのです。

数字や数は抽象です。お金も数値という意味では抽象です。

ただし、お金がたとえ 15,867,232 円という具体的な数字であっても、それが家を購入する資金であれば、抽象ではなくなります。意味とイメージをともなうからです。数字も、777 であれば、ある人たちにとっては特別の意味とイメージを持ちます。42 が不吉だと感じる人もいます。

0203 が自分の誕生日と同じ並びであれば、あるいは何かの暗証番号であれば、それは数字でありながら言葉と同じくらい意味やイメージが付着したものになりえます。また、たとえば 364 という数字が、その日に何度も目につけば、それを「シンクロ現象」と見なす人も多いようです。

数学者でさえ、そうした数字の非抽象化とは無縁ではないでしょう。ある数字を見て冷汗をかくたり、あるいはにんまりするという意味です。承認欲求とかゲシュタルト崩壊という、一見客観的であったり抽象的な言葉をつかってメタな視座に立っているつもりでも、そうしたものから逃れている人などいない、とえば分かりやすいかもしれま

せん。

抽象というのは人が考えているほど抽象でなかったり、人が思いもしない物事が抽象として立ち現れる事態もおおいにありうる気がします。

そっくりは印象なのですが、このそっくりさえも抽象として立ち現われる気がします。

### そっくりに囲まれて、そっくりに生きる

たとえばどこかをスマホを見ながら歩く人たち。たとえばどこかの待合室でスマホに見入る人たち。

スマホというモノもそっくり、その画面に映っている映像もそっくり、聞こえてくる音声もそっくり、ときどき鳴る合成音やブルブルいう振動もそっくり、そのスマホに見入っているヒトたちもそっくり、ヒトたちの身につけているモノたちもこの瞬間に地球の至るところでそっくりなものがあるはずです。

どことは言いません。至るところでの話ですから。誰とは言いません。誰もが免れない状況なのですから。

「わたしはスマホはつかわない」ですか？ テレビでもラジオでも新聞でも本でも車でも病室のベッドでも棺でもお墓でもかまいません。いま挙げたもののほとんどが、大量生産され、印刷という形で複製されたものです。あなたがつかっている、目にしている、耳にしている、皮膚にまわりついている、横たわっているそれは他のどこかにそっくりなものがあるはずです。

至るところにあるのは厳密な意味での同じや同一ではありません。同一は世の中にたった一つしかないものを言います。分子や原子レベルでの「同じ」だと考えてもいいでしょう。こうなると同一とは、個性とかアイデンティティとかいう言葉で語られる次元にはない気がします。

いま話しているのは、そっくりについてです。

なにしろ、そっくりなのです。そっくりはそっくりな点がそっくりであるところまでいくと、抽象というのがふさわしいのではないかと思われることがままあります。ここでの抽象とは、「ヒトの頭の中にしか存在しない」くらいの意味です。言葉の綾と置き換えても大差ない気がします。

言葉は物も事も現象でもありません。その代理なのです。したがって、言葉をつかって、そっくりとか似ているとか同じとか同一とかいう話をすると、齟齬が起きます。これは致し方ないことでしょう。

ではどうしたらいいのでしょうか。一つはレトリックでお茶を濁すことです。ほのめかすとか匂わせるのもいいでしょう。言葉の限界と幻界を意識して、一見矛盾であったり荒唐無稽やナンセンスに感じられる言い回しをして、その限界および幻界ぶりをほのめかし匂わせるという、ほのめかし方や匂わせ方もできるでしょう。

言い換えると、本当は何も言えないという限界と幻界を意識しつつ、何かを言っているふりをして、実は何も言っていないふりを演じるイリュージョンをすることです。つまり、「ふりのふりをする」ことなのですが、そう言うくらいの芸しかいまの私には思いつかないのです。そうです、私は芸のつもりで記事を書いています。私は、note という寄席にいるピン芸人なのです。申し遅れましたことをお詫び申し上げます。

レトリックとたわごとはさておき、話を「そっくり」にもどしましょう。

## 同じ、同一

「そっくり」という、「その他おおぜいのうちの一つ」（複製としての抽象）が、ある人にとっては「掛け替えのないたった一つのもの」（同一性を帯びた具象）であるということもあります。

あるお子さんが、大量生産された玩具の一つを気に入り、それでしか満足しないというケースもおおいに考えられるという意味です。愛車もそうでしょう。お気に入りの品とは、そういうものです。愛着と興味がそこに詰まっているという言い方もできるでしょう。



「そっくり」な抽象的な存在である複製の一つに、「顔」を見だし愛着を覚えれば、それは「個性」を帯びた具象になるのです。

抽象と具象のあいだにはグラデーションとしての愛着があるのかもしれませんが。この愛着を私は「顔」としてイメージしています。あるものに「顔」を見る度合いが高いほど具体性を増すという意味です。この場合の「顔」とは、赤ちゃんにとってのまわりにある「顔」のことです。

また、抽象と具象のあいだにある愛着には、生まれながらに備わっているものと、後天的に学習や習慣によって育まれるものの二種類あるような気がします。

＊

ここで整理します。

「似ている」と「そっくり」は印象であり、印象は人の中にあるものですから、確認できません。基準が、人それぞれという意味です。「同一」とは世の中にたった一つのもので、これを確認するのは至難の業です。ヒトの知覚と認知機能には限りがありますから、器具・計器、器械、機械をもちいて初めて「同一」かどうかを確認できます。

「同じ」は曖昧な言い方で、人によっては、あるいは時と場合によっては、「そっくり」と「同一」の意味でつかうことがあるでしょう。この記事でも文脈に応じてつかい分けるつもりです。

＊

話を進めます。

文字が究極の「同じ」であり「同一」であることを思い出しましょう。

猫、ねこ、ネコ、neko。

どんな活字やフォントや文字の大きさであろうと、誰が口にしようとして、いま挙げた語

は同じです。文字は複製なのに、そっくりどころか、むしろ同じであり、同一なのです。

ここでの文字は、インクの染みとか画素という意味ではありません。抽象的な意味での「猫、ねこ、ネコ、neko」という語の話をしています（観念や概念という言葉をつかうヒトもいるでしょうが、観念や概念は手垢にまみれた言葉で抽象的な話をするのには適していません）。

文字を含めて、言葉は外からやって来るものです。人の内にはありません。「猫、ねこ、ネコ、neko」は、あなたが生まれたときに既にあった語です。それをあなたは真似て学んだのです。ちなみに真似ると学ぶは同源らしいですが、ここではそんなことはどうでもいいですね。

大切なことは、文字を含む言葉が外から来ているものであり、外にあるものだという点です。正確に言うと、人の外にある言葉しか、他人といっしょにその存在とありようを確認できない、となります。

## 同じ、同一という抽象とまぼろし

同じとか同一という抽象は、外にあり、外と内を行き来します。これが抽象なのです。というか、抽象というとりとめのないものを言葉にするさいの一つのイリュージョン、つまりレトリックです。言葉の綾とも言います。

さて、言葉、とりわけ文字は同じであったり同一であるからこそ（つまり抽象であるからこそ）、人の外にあって、外と内を行き来するのですが、これは意味やイメージを取り去った文字や数字だという説明もできます。文字や数字には意味とイメージが付きもので、「意味とイメージを取り去った文字と数字」なんて人にはとらえられないものなのかもしれません。

ややこしいですね。実のところややこしいのです。簡単にすばっと切り取ることができれば、そんないいことはありません。というか抽象とか「意味とイメージを取り去った文字と数字」なんて考えてもいいことは一つもありません。こういうことは、本気でやることではないのです。単なるお話とか戯言として楽しめばいいという意味です。人それぞれですけど。

## 抽象、まぼろし

「似ている」と「そっくり」は印象であり確認できないので、まぼろしだと考えてみます。まぼろしは、人それぞれがいただくものです。人の中にあるものですから、見えないし、触ることもできませんから、他の人といっしょに確認しようがありません。

「同一」（世界で宇宙で「たった一つ」）は、計器や機械をもちいないと人には確認できません。「同じ」は曖昧です。時と場合によって、そっくり寄りであったり、同一寄りであったりします。

「同じ」には複製として「同じ」という場合があります。典型例は、文字です。文字の抽象的な部分、つまり形の特徴をとらえて、人は「同じ」と知覚し認識していると考えられます。学習の成果です。何度もなぞったり書いたり読んだりして真似て覚えていきます。学習ですから、間違いもあります。

＊

複製としての「同じ」を、絵画で考えてみましょう。版画を除いて、実物とか本物と呼ばれているものはふつうたった一つしかありません。同一と呼んでもよさそうです。絵画の鑑賞は複製でおこなうことが習慣化されていますが、さまざまな複製があります。粗悪な複製もあれば、精巧な複製もあるでしょう。程度の問題です。

印刷物であれば、紙質、インク、濃度、鮮明度が異なります。ネット上であれば、端末の環境によっても左右されるでしょう。絵画における複製の複数性と多様性を無視することはできないと思われます。

次に、複製としての「同じ」を、文字で考えてみましょう。文章もまた絵画と同様に複製で読まれることが習慣化し、一般的になっています。たとえば、小説、新聞、雑誌、論文、公用文といった文書（テキスト）は複製として存在し、拡散（流通）し、複製され（複製の複製です）、保存（保管）されると言えるでしょう。現物（実物）で利用されるもののほうが圧倒的に少ない気がします。

文字の複製にも、複数性と多様性が見られます。書体、フォント、サイズ、レイアウト、印刷物であれば紙質、ネット上であれば端末の画面に差があります。

＊

複製では、たった一つという意味での「同一」（同一性）よりも、同じであるという抽象面での類似性を利用して、拡散（流通）し、複製され（複製の複製です）、保存（保管）されるようです。

この類似性に支えられた「同じ」ですが、これを学習の成果だと見なせば、学習できない生き物には通じないだろうと考えられます。その意味（ヒトの頭の中にだけ存在するという意味です）で、複製としての「同じ」は、抽象であり、同時に、その意味でまぼろしだという気がします。

一概には言えないでしょうが、複製としての「同じ」（たとえば、文字や絵や映像）は、イヌやネコやニワトリやイワシには通じないだろうと思われまふ。ただし、生き物によっては部分的な学習は可能かもしれません。なお、かなりうまくいっているらしい機械に学習させることについては、ここでは触れまふせん（ひとこと言うなら、人のつくった機械は人の外にある「外」です）。

一方、「同一」（複製としての「同じ」とは対照的に）は、ヒトの知覚と認知機能を超えた精度の「類似」の話であり、ヒトのつくった機械や光学的な仕組み（ヒトがつくったとはいえ、ヒトの外にある「外」です）は、同一（ガチガチの抽象です）に支えられているようなので、まぼろしとは言いにくい気がします。ある程度の有効性が認められるからです。

まぼろしのおかげで、ヒトが仲間を月面に立たせたり、2000年問題に打ち勝ったり、地球の気温を何度か上げたりした、なんて言い方は、プライドの高いヒトが許さないにちがいありません。

以上、私小説あるいは心境小説的なお話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#言葉 # 表象 # 日本語 # 抽象 # まぼろし # 似ている # そっくり # 同一 # 文字 # 数字



09/04 影に先立つ【引用の織物】





＊

## 影に先立つ【引用の織物】

星野廉

2022年9月4日 08:15

ガラスの内には典雅なニス塗りの、棺が飾られて、これも朝日を浴びていた。店の奥にはさらにいくつかの棺が、すこしずつ意匠を異にするようで、壁や椅子にやすらかに立てかけられ、楽器のようにも見えた。

(古井由吉作「物に立たれて」(『仮往生伝試文』所収)より引用)

目次

棺＊

棺＊＊

棺＊＊＊

棺＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊＊＊

棺＊＊＊＊＊＊＊

柩と境

そっくり

真似る

見えないものは目の前にある

柩にひれ伏す

決めたのではなく決まった

影に先立つ

棺＊

人間には一人であるべき空間がある、と彼女はよく考える。寝床、風呂、鏡の前、ストレッチャー、病床、死の床、棺、安置室、火葬炉、墓。夢の中や心の中と同様に、そうした場所には誰も入ってほしくない。できれば一人でいたい。

(拙文「一人でいるべき場所」より)

### 棺\*\*

たとえばどこかをスマホを見ながら歩く人たち。たとえばどこかの待合室でスマホに見入る人たち。

スマホというモノもそっくり、その画面に映っている映像もそっくり、聞こえてくる音声もそっくり、ときどき鳴る合成音やブルブルいう振動もそっくり、そのスマホに見入っているヒトたちもそっくり、ヒトたちの身につけているモノたちもこの瞬間に地球の至るところでそっくりなものがあるはずです。

どことは言いません。至るところでの話ですから。誰とは言いません。誰もが免れない状況なのですから。

「わたしはスマホはつかわない」ですか？ テレビでもラジオでも新聞でも本でも車でも病室のベッドでも棺でもお墓でもかまいません。いま挙げたもののほとんどが、大量生産され、印刷という形で複製されたものです。あなたがつかっている、目にしている、耳にしている、皮膚にまわりついている、横たわっているそれは他のどこかにそっくりなものがあるはずです。

(拙文「似ている、そっくり、同じ、同一」より)

### 棺\*\*\*

\* 枠、タブロー、スクリーン

人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をうつしているとしか思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。

見えないものを真似ている。聞こえないものを真似ている。感知できないものを真似

ている。知らないものを真似ている。

なぞる。何かはわからないままになぞる。なぞっているという意識なしになぞる。

\*

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。空（くう）をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

\*

枠、frame、フレーム、figure、フィギュア。

仏壇、位牌、写真、卒塔婆、墓、墓石。棺桶、棺、火葬炉。

地獄絵、極楽絵図。

アイコン、アイコン、アバター、分身。

(拙文「人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく」より)

**棺\*\*\*\***

たとえば、人は椅子をつくったために、椅子に合わせて腰かけるようになった。

物だけではない。たとえば、映画をつくったために、映画のような夢を見たり、空想をするようになった。

棺桶をつくったために、棺桶に合わせて埋葬するようになった。冷蔵庫をつくったために、冷蔵庫に合うようなものを食べるようになった。パソコンをつくったために、パソコンの従者や下僕になった。スマホをつくったために、スマホに嗜癖しスマホに合わせて生活するようになった。

それだけではない。

大量生産されたそっくりなものを使う人間は、地球のあちこちで同じ仕草同じ動作をするようになる。そっくりがそっくりを生む。そっくりをそっくりが真似る。シンクロ、同期、似ている、激似、酷似、そっくり、同じ。

\*

つくったものに似せる、つくったものに似てくる。うつったものに似せる、うつったものに似てくる。ミメーシス、模倣、描写。

うつす、写す。似せる、真似る。かたる、語る、騙る。つたえる、伝える、つぐ、継ぐ、次ぐ、告ぐ、接ぐ。まねる、真似る、ふりをする、振りをする、えんじる、演じる。

(拙文「人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく」より)

**棺\*\*\*\*\***

寝入るとき、人はとつぜん一人になります。二人で抱きあって寝ていたとしても、眠りに入った瞬間に二人は別れます。どんなに愛し合っている、二人いっしょに眠りの中にいることはできません。

お墓とはちがうのです。そんなの、嫌ですか？ 悲しいですか？ お風呂もベッドも夢も、いっしょじゃなきゃ嫌。せっかく生きているのに。人生の三分の一は眠っているというのに。

お風呂はお墓に似ている、と書いた作家は誰だったか？ それとも、浴槽は棺桶に似ている、だっけ？ あ、トイレで縦長のドアが並んでいるのを見るたびに、縦に並べたお棺に見えると言った女性を思い出しました。

詩を書いていたあの人にまた会いたいです。夢でもいいですから。

(拙文「同床異夢、異床同夢」より)

### 棺\*\*\*\*\*

いま自宅の居間にいる私は自分の視界を意識しようと努めているのですが、その視界がどんな形をしているのか、さっぱり見当つきません。みなさんはどうですか？ 横長であるという気はしますが、長方形だという感じはありません。横に長い楕円形みたいにも感じられます。

そう考えると、映画やテレビやPCの画面に似ていますね。本は縦長ですが、見開くと横に長いようです。昔の巻物もそうでした。人の頭というか意識の中には長方形の枠があるのではないかと疑りたくなります。それをなぞるといふか真似て、物をつくっているのではないか。私たちは長方形に囲まれていませんか？

生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いというか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、PC、スマホ……。人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めっちゃくちゃ言ってごめんなさい。

人は自分（あるいは自分の中にあるもの）に似たものをつくり、しだいにその自分のつくったものに似てくる、似せてくる、とつねに感じているのですが、人は「自分のつくったもの」に「自分もどき」を見て初めて、「自分そのもの」に気づくのではないか、なんて考えてしまいました。

そのひとつが長方形の枠ではないでしょうか。

(拙文「直線上で迷う」より)

**棺\*\*\*\*\***

長方形というと、ひとりである場所をイメージしてしまいます。上で述べた長方形の場所や「容れ物」ではひとりでない場合のほうが多いのにです。たぶん、多くの人に囲まれていても人はひとりであるという気持ちが強くあるからだと思います。

寝床、ベッド、布団、病床、シーツ、ストレッチャー、トイレの個室、棺桶、お墓、遺影。こうした場や容れ物にひとりである人が頭に浮かびます。誰かに似ていますが、想像の中にあるその顔は見えません。見たくないのかもしれませんが。

意識だけとか目だけになって道を進むさまが、寝際によく浮かぶのは車に乗っている時を思いだしているのかもしれませんが。道は、たとえそれが獣道であっても、舗装された道路であっても長方形を延長していったものに見えます。

テレビにしろ、映画にしろ、液晶画面にしろ、本にしろ、車窓にしろ、枠があり、その枠はほぼ横に長い四角に見えます。視界もほぼ横長の楕円形に思えます。その横に長い長方形の枠のある光景を見ながら、人は生きていく。そのあいだに枠を意識することはまれにしかない。

こういうのはこじつけなのでしょうが、こじつけというAとBに置き換える作業が、視覚や知覚全般の根底にあり、たとえば言語活動や広義の比喻や印象やイメージという形で、人においてあらわれているのだと思われます。目だけでなく、また意識だけでなく、魂の働きだという気もします。

(拙文「夜になると「何か」を手なづけようとする」より)

**棺\*\*\*\*\***

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。これもレトリックですけど。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

スマホに限りません。車がそうです。自転車もそうです。三輪車もそうかもしれません。

ボールペン、消しゴム、ノート、お箸、絆創膏、腕時計、下着、靴下、眼鏡、シャワー、便器、ベッド、乳母車、棺。どれも大量生産されたそっくりさんたちですが、それを使うとき、人はそれぞれそっくりな仕草や表情をします。

ひとりひとりの顔も個性も違いますが、やることがそっくりなのです。

(拙文「私たちは同じではなく似ている」より)

## 枠と境

名づけて手なずけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name  
difficult to tame  
difficult to frame

抽象だから、似ているというよりも、そっくりというよりも、同じであり、同一。同期。

same

なぞ、なぞをなぞるというゲーム。なぞるが目的化して空回りする。

game to play  
aim  
aimless game to play

何のため？ 名前のため？

aim、name、fame、frame

それは罠だってば！

You're framed!

筋書き (aim) をなぞり、名 (name・fame) を残し、枠 (frame) を残すのに血道を上げる。

ゲーム (game) をプレイ (play・演じ戯れ競い奏で賭け、なぞり) しながら、自分が獲物と餌食 (game・prey) になってしまうのに気づかない。いまは祈る (pray) べき時なのに。player ではなく prayer であるべきなのに。

いまはもう、両の足で立つのもままならないのに気づかない。

We're already frail and lame.

言葉にひれ伏し、辻褃合わせに終始する非難合戦。

blame game

敵に屈しているのではなく、言葉という枠に屈していることに気づかない。

shame

\*

It's the blame game.

It's time the game came to the end.

Who is to blame?

Shame on who?



＊

謎も境も、知ろうとしたり分かろうとしたとたんに消える。

気づいたとたんに枠でも境でもなくなる。

意味であり無意味。抽象であり具象。中傷であり愚笑。

＊

文字の形と音が意味をなす。同音で一瞬だけむすびつけられる文字とイメージと事物。  
韻、隠、陰、淫、印、因、姻。

偶然と必然が意味を無くし、同時に意味を有む瞬間。

そもそもないものをなぞるといふ謎。空の雲に何かをなぞるといふ謎。その形を指や  
目でなぞるといふ不思議。

なぞることで枠と境が立ちあらわれる、とつぜんの異物感と異物性。

＊

どうして、文字の形、文字が喚起する音（おん）、形と音が呼びさますイメージと意味  
という似ても似つかない異質な物と事と言（こと）同士が、そこに立ちあらわれてしま  
うのだろうか。こんな不思議なことがあっていいのだろうか。

その不思議が当り前のこととして見過ごされるという、さらなる不可思議さ。これは  
知恵にちがいない。これこそ、人知なのだろう。さもなければ、人は日常生活をいと  
なめない。

線で文字をなぞるといふ謎。目でなぞるを追うといふ不思議。目線、視線が線である  
不可解さ。

無意識になぞるべきもの。それが人の知恵、人知、障地。最後で最期の知、血、稚、痴、  
恥、遅。

## そっくり

そっくりなものはたいてい人間がつくり出したものではないでしょうか。  
そっくりな点がそっくりなのです。  
それくらいそっくり。不自然なのです。

人には同じに見える、そっくりなものには自然物にはない精巧さが備わっています。  
同じものなんて、人がつくらないかぎりないのではないのでしょうか。

人がつくるそっくりなものには、どこか人に似たところがあります。部分的に似ているも含めて。

人に似ているのは、むしろ人が無意識に似せているからかもしれません。

自分や自分の仲間に似ているから安心するのです。

人は不気味なものはつくりません。不気味に似たものはつくりますよ。でも、何にも似ていない不気味なものはつくりません。

(拙文「引用の織物」より)

## 真似る

荒唐無稽で根拠なしの空想。馬鹿馬鹿しくてがっかりするしかないような話。

似せてつくったものに似せる、真似てつくったものを真似る。馬鹿馬鹿しい、馬鹿も休み休み言え、と言いたくなるような話。

そもそも物語は人がつくったもの。現実なり空想なりを見聞きして、それを「あたかも目の前にあるように」語るのが、物語。

\*

物語を模倣する人間についての小説。

物語というジャンルについての復習、小説というジャンルの予習。まさか、小説を壊しているのではないか。できたばかりのジャンルが既に壊れかけている。

(中略)

小説を模倣する人間についての小説。小説と現実を混同してしまう人間についての小説。

小説というジャンルの始まりと洗練。律儀と愚鈍が同義であると誰かに見破られることになる。

小説を模倣するボヴァリーを人は笑えるだろうか。映画を、テレビドラマを、CMを、アニメを、(演じる)俳優を、ストーリーを、ドラマを、キャラクターを、出来事を、事件を、報道を、ディスプレイに映った像やテキストを真似て、引用し、似せて、なりきる私たちは、そっくりな身振りをしていないだろうか。

ボバリズムとは、私たちのことではないか。

フロベールが「ボヴァリー夫人は私だ」と言ったという神話があるが、そう口にすべきなのは、私たち一人ひとりではないのか。ボヴァリー夫人は私たちなのだ。

(拙文「私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？」より)

### 見えないものは目の前にある

テレビ、映画、写真、絵画、文学、美術、映像、動画——こうしたものは人が現実の影、つまり現実とそっくりなものを求めて作った影です。

目的があり、ストーリーやドラマ、つまり意味のある影です。だからぞくぞくわくわくするわけですが、これだけ意味に満ちた影に囲まれて生きっていると疲れることがあります。

(拙文「意味のある影、意味のない影」より)

＊

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」(いわば鏡の中に見ている)のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということです。これがラカンについての私なりのまとめでもあります。

(拙文「人は存在しないもので動く」より)

### 柾にひれ伏す

人の作るものとは、言葉であり、物であり、事です。そのどれにも柾がありますが、柾とは境でもあります。

柾も境も、切り取るからできるものです。「切り取る」には「切り捨てる」がともないます。

そもそも切り取るのは、すっきりとしてきれいに見せるためです。持ち運んだり、簡単にさくさく処理するためには、すっきりとして無駄のない形をしていなければなりません。軽いことは絶対条件です。

軽くてすっきりしているのは、柾と境がある証拠だとも言えます。要するに不自然なのです。

＊

自然界には柾と境はないにもかかわらず、人は自然界に柾と境を作ることで、言葉の世界と現実の世界を一致させてきました。自然界に柾と境を作ることは、世界の言葉化でもあるのです。

自然も世界も、人の都合のいいように変えられてきたと言えますが、人はこの自然と世界の中にいるのであり、その逆ではありません。人も言葉化されてきたのです。

人は言葉を崇め、言葉にひれ伏しています。言葉の上での辻褃合わせと筋を通すことに血道を上げています。しかも、そのことに気づいていなかったり、気づいたとしても事の大きさにひるみ、すぐに忘れます。

それが人の面子（体裁）であり、同時に尊厳（プライド）であるとすれば、悲しいレトリックです。

（拙文「人の作るものは整然として美しい」より）

\*

We're framed.

### 決めたのではなく決まった

鏡、影、落書き、絵画、写真、映画（影や幻影の進化したもの）、テレビ、動画、VR。これほど人が「見る」に取り憑かれているのは、じつはいまだに「見えていない」からであり、その不十分な「見る」を補助するような物や仕組みや枠組みをつくるたびに、思いがけない、つまり想定外の「見る」や「見える」を見てしまい、驚き、ぶったまげ、何かにはっと気づく。そんなことを繰り返してきた気がします。

そう考えると、「見る」というのは「とりあえずつくった言葉」であり、その「見る」について、人は何も分かっていないのではないかというふうに思えます。「見る」「見える」という言葉をつくったから、「見る」「見える」んだ、うん、そうだ、と「決めた」とも言えそうです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

(拙文「直線上で迷う」より)

\*

人は「決めた」と思っているのに、じつは「決まった」のではないのでしょうか。

同様に、事物を「作った」のではなく、「できた」。言葉を「放った・発した・話した・放した・離れた」のではなく、「離れた」。「書いた・描いた」のではなく、「書けた・描けた」。「掛けた」のではなく、「掛かった」。「賭ける」のではなく、単なる「賭け」。

つまり、人の行為は、その行為をしたとたんに、人を離れて人の外での出来事になっているという意味です。要するに、人の行為は外にあるのです。さらにいえば、人の思いどおりにならないという意味で「外」なのです。

「決める」は人の為すこと、「決まる」は人知を超えている。そんな気がします。べつに神とか神秘を持ちだす話ではなく、「外にあるから見えない」だけなのでしょう。

だいたいにおいて、人が神や神秘を持ちだすのは、人が自分の落ち度を認めたくないときなのです。

「目の前にありながら外にあって見えない」という言葉の綾を文字どおり取るしかなさそうです。

\*

言葉の綾と現実の綾が食い違っても当然なのです。言葉の世界と現実の世界と思いの世界は、それぞれ別個の論理と文法に従っていると思われるからです。

ただし、「なぞる」は「なぞられる」のではなく、「謎」である気がします。「賭ける」が「賭けられる」のではなく、「賭け」であるように。

「なぞる」も「賭ける」も外にあるようには見えなくて、つまり目の前になくて、それでいて見えないのですから。謎です。外にない外なのかもしれません。

「なぞ(る)」と「賭け(る)」——おそらく「決まる・決まり」も——の対象であり主体だと思われる(この三者には共通して固定化指向が強いという特徴があります)、文字はいったいどこから来たのでしょうか。どこへ行くのでしょうか。

## 影に先立つ

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

ことのはに さきだつひとを おくるかけ

(拙文「「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれない。」より)

\*

鏡、落書き、絵画、文字、書物、文書、写真、映画、テレビ、動画、VR——。人のつくった影たちは何らかの形で残る気がします。

初めは人が影に先立ったのに、影が人に先立つようになり、最後には人が影に先立つのでしょうか。あるじをなくした影たち、いや、そもそも影たちはしもべではなかったのかもしれない。

つねに人の外にあり、ときどき人の中に入ったり出たりする、人の思いのままにならない「外」であるもの。影は不動、人が揺らぐ。

とりわけ気になるのは、人のつくった影の中で最もしぶとい文字です。

人に先立たれた文字。人の影であったはずの文字が残る。影が残る。影は人を見送っ

てくれるでしょうか。そのさまを思いえがくと苦しくなります。

ヒを浴びて 影に先立つ 空睨み

人が影を落とした大地と水面（みなも）には、もはや人の影はない。そんな地球上で、人のつくった影たちがどこかに残っている。遺っているのではなく、生き残っている。ひょっとすると、増えつづけるのではなく、殖えつづけている。

そうしたさまが、オブセッションとなって離れません。寝入り際にも、眠っている最中にも、浮かぶことがあります。

\*

消えないだけに、残るだけに、しかもいまや急速に増えているだけに——複製でありながら同一であるという最強の抽象を武器にして——、文字が気に掛かります。文字の暴力的なまでの異物性が気になってなりません。こんなものはこの星で他にあるでしょうか。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

先立つ人を見送るかのよう（これでは、まるで人は利用されただけで終わるかのようです）。新たななぞり手に先立つかのように。待つかのように。

文字は影どころか、粹なのです。

線からなる文字が、なぞるべき粹という棺に見えてなりません。語源はさておき、駄洒落と掛け詞好きの私にとって、棺は分く（分ける）粹です。別く（別れる）粹なのです。粹に収める者と収まる者とのわかれです。

棺下ろし 境で別れ 雲疾し

\*



雲をつかむような、個人的なオブセッションとギャグに満ちた話にお付き合いいただき、ありがとうございました。思いを書いて供養するしかなかったのです。

#言葉 # 日本語 # 文字 # 粋 # 境 # 影 # 鏡 # 模倣 # シンクロ# フローベール # フロベール # 棺 # 古井由吉



09/06 「この詩は、まちがっています」



＊

「この詩は、まちがっています」

星野廉

2022年9月6日 08:04

目次

間違っていますか？

種明かし

敬体、常体、口語体、文語体

谷崎潤一郎作『痴人の愛』、江戸川乱歩作『鏡地獄』

間違っていますか？

灰谷健次郎の小説に『日曜日の反逆』という短編があります。

国道で「ヒッチハイクの合図」をしていた少年を、男は車で目的地に送り届ける。その前の日曜日にも同じことがあった。自分については曖昧な話しかしない少年は、息子が飛び降り自殺をしたという男の話を聞いて「嘘だろ」と言う。日曜日ごとに少年と約束した場所に車をとめて、少年を待つようになる男。少年に「虚言癖」があると男は決めつけるものの、放っておけない。一向に約束の場所に姿を見せない少年が以前口にした言葉を思い出し、男は少年の「領分をおかす」。

こんなふうに物語は進行するのですが、互いの素性を知らない男と少年が腹の探り合いをする過程で、二人がそれぞれどんな背景を持つどんな性格の人間なのかが読み手には不明なままです。作中人物が謎をかかえると同時に、作品の外にいる読む人もサスペンス状態に置かれるわけですね。

この人はいったい何ものなのか？ 何を考えているのか？ 相手の腹をさぐる二人の作中人物のキャラクターの揺らぎが、多面体であるプリズムのきらめきのように感じられてわくわくします。

濃密な人間関係を描いた小説が苦手なために、見知らぬ者同士が会って短時間の交流の後に別れるというストーリーに惹かれる自分がいます。そんな出会いを繰り返す人生を送ってきたからかもしれません。というか、そういうある意味で刹那的な人間関係しか、ぴんと来ないのです。

『日曜日の反逆』は大きく二つに分かれます。前半が謎の提起で、後半は謎解きという様相を呈するのです。後半では、男が少年の学校をつきとめ、担任の教師と連絡が取れます。そこからの展開ですが、男は少年に手紙は書くし、少年から返事がとどくという具合に、個人的には興ざめしてしまいます（謎は謎のままで楽しみたいのです）。

少年からの手紙にはクラスの文集が添えられていて、それには少年の詩も収められている。文集にあるクラスメートたちや担任教師の文章から、男は少年の性格をはじめ背景や家庭を推測していく。文集から男が読み取ったという形で興味深い少年像が浮かびあがる。ここで、クラスメートの詩について少年が「批評」したというエピソードが出てくるのだが、これが興味深い。

「先生、この詩はまちがっています。この詩は常体と敬体を同時に使っているからまちがっています」と発言して担任の教師を驚かせたというのだ。「そういうことをいいそうな子だ」と男は思う、というこの箇所を読むと、感心している中年男のでれでれした笑みが頭に浮かぶようで苦笑してしまう。

少年をめぐる謎が解かれていく——とはいえ、深い心の謎は曖昧なまま——、この短編の後半の展開に「異議申し立て」をしたくなります。アルベール・カミュの『異邦人』の後半つまり裁判の出てくる第二部がなければよかったのに、と思うのと同じです。

【※灰谷健次郎の短編『日曜日の反逆』は、『少年の眼—大人になる前の物語』（川本三郎選/日本ペンクラブ編・光文社文庫）と『子どもの隣り』灰谷健次郎著・角川文庫）に収められていますが、現在では入手が困難なようです。】

それはさておき、常体と敬体を同時に使っている詩は間違っているという少年の見解には——もちろんこれはフィクションの登場人物の見解なのですが——複雑な思いをいただきました。本日のこの記事を書こうとして、ささやかな反逆（大人げないですね）と

どうか、ある「実験」をしてみようという気にもなりました。お気づきになりましたか。どうお感じになりましたでしょうか。間違っていますか。

## 種明かし

さて、さきほど述べた「実験」が何だったのか、種明かしをします。お気づきになった方もいらっしゃると思いますが、上の文章は「常体（だ・である調）と敬体（です・ます調）を同時に使っている」のです。

とはいうものの、同じ段落で常体と敬体を使うことは避けています。いわば、はじめはつけているわけです。また敬体は作品のあらすじを述べる箇所だけで用いて、他の部分は敬体で書いてあります。それが違和感をやわらげる役割を果たしているかもしれません。

もちろん、二つの文体が混じっているのがとても気になったという方もいらっしゃるでしょう。人それぞれです。個人的な意見を申しますと、その人が好きなように書けばいいと考えています。他人の言葉遣いには口を出さない主義でもあります。

言葉は誰にとっても生まれたときに既にあったものであり、それを真似るという形で学びます。誰にとっても言葉は借り物だということですね。

ひとさまが借りて使っている言葉の使い方は、その人の生活とそれまでの人生のあらわれだと思います。ですから、その人の生きざまを非難したり変えようとしたり否定する気持ちはありません。

＊

ところで、実験ではないのですが、上の文章にはもう一つ特徴があります。じらすのはやめて、それが何なのかを言いますと、一人称の人称代名詞を意識的に省いているのです。つまり「私」が使ってありません。

こういうのも読む人の違和感につながる可能性が高いのですが、好きなのでこういう

書き方をよくします。

上の文章では、一箇所だけ「自分」を使っています。

濃密な人間関係を描いた小説が苦手なために、見知らぬ者同士が会って短時間の交流の後に別れるというストーリーに惹かれる自分がいます。そんな出会いを繰り返す人生を送ってきたからかもしれません。というか、そういうある意味で刹那的な人間関係しか、ぴんと来ないのです。

特殊ともいえる個人的な来歴にもとづいた意見を述べている箇所ですね。この文脈なら「私」を使ってもかまわないというか、積極的に「私」を使っている部分だという見解もあると思います。でも、使っていません。それが癖なのですが、ただ頑固なだけなのかもしれません。

とはいえ、常にこういう書き方をするわけではなく、その時々で変わります。大切なのは、日本語は主語や人称代名詞が省ける珍しい言語だということです。

主語がないという言い方もできますが、個人的には、主語が隠れていると考えています。いずれにせよ、不思議だし面白いですね。

## 敬体、常体、口語体、文語体

敬体（です・ます調）と常体（だ・である調）という分け方についてなのですが、最近口語体と文語体と分けてもいいような気がしてきました。敬体と常体同様に、口語と文語や、口語体と文語体には、いろいろな意見がありそうですが、個人的には「話すように書くか」、それとも「書くように書くか」くらいのイメージで考えています。

この文章では、みなさんに語りかけるつもりなので、こう書いているだけなのです。結果として敬体となっているとも言えます。

実は「だ・である」という文の終わり方が好きではないのです。日記的な文章や小説では「だ・である」と書くことがありますが、書くたびに違和を感じています。それどころか、



「だ・である」と書く自分に嫌悪を覚えることさえあるのですが、これは自分を「俺」と言えないのと似ています。

お断りしますが、これはあくまでも個人的な意見です。「俺」とはめったに言わない女性も、「だ・である」は使うわけですから当然でしょう。でも、自分が使うさいには、そう感じるのです。

ひとさまの用いる常体に対してネガティブな感情を持つことはないのですから、これはきわめて私的な問題だと思います。

＊

次のような言い方もできると思います。

私にとって「だ・である」調は書き言葉なのです。書き言葉とは、自分の中では独白です。要するに、相手がない文章なのです。日記はふつう「だ・である」調で書きますね。日記的な文章だと私もそうしています。

私は小説も書きますが、小説は自分の中では独白に近く、特定の人に向けて書きません。不特定多数の人を意識はしますが、誰かに向けて書くという心境ではなく、自分の中で独自の世界を作ろうとする。さらに言うなら、自分の中で完結しようとする。つまり、小説の執筆はきわめて私的な作業であって、誰かが入り込む余地はありません。だから「だ・である」調で書いているのだらうと思います。

小説以外の形式で、ネット上で公開する文章の場合だと、私はどうしても「です・ます」調になります。みなさんに話しかけているからです。「みなさん」とは不特定多数の人たちにほかなりません。単純といえばまことに単純明快な理由から敬体を選択しているということですね。

＊

以上をまとめると、「だ・である」調は常体というよりも文語体であり、「です・ます」調は敬体よりむしろ口語体である——となります。あくまでも個人的な意見であり、私はこんなふうを考えて書いているという意味です。人それぞれですね。

(※新聞や雑誌で、聞き書きや談話やインタビューの記事がありますが、独特の語り口調で書かれていることがあります。有名人への取材をもとにしてライター（ゴーストライターという言い方は失礼ですね）が書く、有名人名義の本にも、その文体が見られます。その種の文章に興味があるので切り取って保存しているのですが、あの文体が新しい敬体あるいは口語体——ネット上でも使えそうです——のヒントになるような気がします。いつか改めて記事にしてみようと思っています。)

ところで、「です・ます」調で書くさいには、語尾が単調になると言われます。私も語尾には気をつけていますが、どうしても同じ終り方を繰り返す形になりがちです。

語尾の単調さを避けるにはいくつかの方法があるようです。作家の文章を気をつけて読むと、敬体と常体をうまく混ぜて書いている例があり、勉強になります。

見てみましょう。

#### 谷崎潤一郎作『痴人の愛』、江戸川乱歩作『鏡地獄』

”けれど私は、その当時、ナオミ以上の美人はないときめていた訳では決してありません。電車の中や、帝劇の廊下や、銀座通りや、そう云う場所で擦れ違う令嬢のうちには、云うまでもなくナオミ以上に美しい人が沢山あった。ナオミの器量がよくなるかどうかは将来の問題で、十五やそこらの小娘ではこれから先が楽しみでもあり、心配でもあった。ですから最初の私の計画は、とにかくこの児を引き取って世話をしてやろう。そして望みがありそうなら、大いに教育してやって、自分の妻に貰い受けても差支えない。——と、云うくらいな程度だったのです。これは一面から云うと、彼女に同情した結果なのですが、他の一面には私自身のあまりに平凡な、あまりに単調なその日暮らしに、多少の変化を与えて見たかったからでもあるのです。正直のところ、私は長年の下宿住居に飽きていたので、何とかして、この殺風景な生活に一点の色彩を添え、温かみを加えて見たいと思っていました。それにはたとい小さくとも一軒の家を構え、部屋を飾るとか、花を植えるとか、日あたりのいいヴェランダに小鳥の籠を吊るすとかして、台所の用事や、拭き掃除をさせるために女中の一人も置いたらどうだろう。そしてナオミが来てくれたらば、彼女は女中の役もしてくれ、小鳥の代りにもなってくれよう。と、大体そんな考でした。

そのくらいなら、なぜ相当な所から嫁を迎えて、正式な家庭を作ろうとしなかったのか？——と云うと、要するに私はまだ結婚をするだけの勇気がなかったのです。こ

れに就いては少し委しく話さなければなりません、一体私は常識的な人間で、突飛なことは嫌いな方だし、出来もしなかったのですけれど、しかし不思議に、結婚に対しては可なり進んだ、ハイカラな意見を持っていました。「結婚」と云うと世間の人は大そう事を堅苦しく、儀式張らせる傾向がある。先ず第一に橋渡しと云うものがある、それとなく双方の考をあたって見る。次には「見合い」という事をする。さてその上で双方に不服がなければ改めて媒人を立て、結納を取り交し、五荷とか、七荷とか、十三荷とか、花嫁の荷物を婚家へ運ぶ。それから輿入れ、新婚旅行、里帰り、……と随分面倒な手続きを踏みますが、そう云うことがどうも私は嫌いでした。結婚するならもっと簡単な、自由な形式でしたいものだと考えていました。”

(谷崎潤一郎『痴人の愛』一)

上の例でお分かりになるように、敬体に常体がうまく織り込まれていて、読んでいて違和感を覚え、文章の流れも滑らかです。あの谷崎がやっているのだからとは言いませんけど、必ずしも敬体に統一する必要はないと言えるのではないのでしょうか。

また、日本語では現在形と過去形あるいは完了形という、西洋からの借り物である文法用語が当てはまるとは思いませんが、「した・った」で終わるだけでなく、「ある・する」「だろう」というぐあいに自由な終り方をしている例を目の当たりにすると、「そうか、そうすればいいのか」というふうにとっても勉強になります。

いずれにせよ、敬体と常体は使い分けろと言われていたからとか、それがルールだからという思考停止的な理由で右往左往するのではなく、実際の例を見て自分で考えて判断することが大切だし、また多様な書き方がネット上で実現している現在は、各自が主体性をもって書いていい時代だと思います。

作文は借文だという言い回しを思い出します。自分がいいと思う文章があれば、そのいいところをどんどん借りましょう。

\*

”そのほか、たとえば、サブマリン・テレスコープといいますか、潜航艇の中から海上を眺める、あの装置をこしらえて、彼の部屋に居ながら、雇人たちの、殊に若い小間使いなどの私室を、少しも相手に悟られることなく覗いてみたり、  
そうかと思うと、虫目がねや、顕微鏡によって、微生物の生活を観察したり、  
それについて奇抜なのは、彼が蚤の類を飼育していたことで、それを虫目がねや度の弱い顕微鏡の下で、這わせてみたり、

自分の血を吸うところだとか、虫同士をひとつにして同性であれば喧嘩をしたり、異性であれば仲良くしたりする有様を眺めたり、中にも気味のわるいのは、私は一度それを覗かされてからというもの、今までなんとも思っていなかったあの虫が、妙に恐ろしくなったほどなのですが、蚤を半殺しにしておいて、そのもがき苦しむ有様を、非常に大きく拡大して見ることでした。

五十倍の顕微鏡でしたが、覗いた感じでは、一匹の蚤が眼界一杯にひろがって、口から、足の爪、からだにはえている小さな一本の毛までがハッキリとわかって、妙な比喩ですが、まるで猪のように恐ろしい大きさに見えるのです。

それがドス黒い血の海の中で（僅か一滴の血潮がそんなに見えるのです）背中半分をぺちゃんこにつぶされて、手足で空をつかんで、くちばしをできるだけ伸ばし、断末魔の物凄い形相をしています。

何かその口から恐ろしい悲鳴が聞こえているようにすら感じられるのであります。”

（江戸川乱歩『鏡地獄』・改行は引用者による）

上の引用文は、これで一段落なのですが、最初のセンテンスがとても長いですね。ここで切っても書けるだろうと思われる箇所で改行してみました。敬体では、センテンスを長くすることで語尾の単調さを避けることができるという好例です。

とはいえ、長いセンテンスを読みやすい形で書くことは難しいです。こういう例を見て、その技を盗むのがいちばん手っ取り早い方法だと思います。乱歩は「それ」「そう」のように前を受ける言葉をうまく使っていますね。上の谷崎の文章でも、そうです。

どんな文体であれ、要は読者が不自然に感じないように書くことなのでしょうが、それは簡単ではなさそうです。精進するしかないという思いを強くしました。

#文章# 文体# 灰谷健次郎# 谷崎潤一郎# 江戸川乱歩# 敬体# 常体# 口語体# 文語体

09/08 名前のない世界、動きだけの世界



＊

名前のない世界、動きだけの世界

星野廉

2022年9月8日 08:09

目次

夢の漢字、漢字の夢

あるとない

呪って縛る

有名夢、無名夢

漢字の顔

言葉をいじって憂さ晴らしをする

文字は後付け

異国の文字を読むアクロバット

パントマイムとしての夢

名前のない世界、動きだけの世界

夢の漢字、漢字の夢

自分だけなのかもしれませんが、夢で漢字が出てくることはありません。なんでこんなことを書いているのかといいますと、漢詩の夢を見たのです。漢字の夢ではなく、漢詩の夢です。

「くにやぶれてさんがあり」と夢に出てきたのです。音だけです。全部ひらがなで出てくる感じでした。それだけではありません。「しろはるにしてそうもくふかし ときにかんじてはなにもなみだをそそぎ」と、その続きがすらすらと出てきたのは驚きです。

驚いているのはいまの私です。夢から覚めて、その夢を思いだしている私です。夢の中ではかなり荒唐無稽なことが起きても、めったに驚きません。あれよあれよと眺めているだけです。何でも肯定されるのが夢です。少なくとも私にとってはそうです。

「くにやぶれてさんがあり」が自分の中にあるなんて、ふだんはぜんぜん意識していません。この詩の作者の名前も考えないと出てこないくらい、漢文は私には縁遠いと感じられるものなのです。

ひょっとすると無意識に避けているのかもしれませんが。学校時代には漢文が大の苦手だったのです。いい思い出はひとつもありません。漢字自体、苦勞して読み書きを覚えましたが、いまでも苦勞しています。

あるとない

存在と無

なんていかめしいのでしょうか。

「存在と無」

いかめしさに何かがありました。その何かはわかりません。

『存在と無』

おお。書名でしょうか。雑念と邪念と妄念が浮かんできます。

\*

Being and Nothingness

『存在と無』にくらべると、軽いですね。この文字列を初めて目にしたときには拍子抜けしました。

\*

『存在と無』

こんなタイトルの本をかかえている少女あるいは少年を電車の中で見かけたと想像し



てみてください。

一目見るなり恋に落ちる人がいても不思議はない気がします。

\*

Being and Nothingness

こんなタイトルの本をかかえている少女あるいは少年を電車の中で見かけたと想像してみてください。

\*

『あるとない』

こんなタイトルの本をかかえている少女あるいは少年を電車の中で見かけたと想像してみてください。

\*

『あることないこと』

こんなタイトルの本をかかえている少女あるいは少年を電車の中で見かけたと想像してみてください。

どうでしょう？

なにか、かわりませんか？ わかりませんか、ではなく。

いまここでは、そんな話をしています。

\*

よく考えると、私の夢の中に出てくる言葉はたいてい音であり声なのです。こんなことは人に聞いたことがありません。こういうことを話せる友達がいないからです。

ねえねえ、(あなたの) 夢に出てくる言葉って音だよね？

こんなことをひとさまに聞けますか？ 「アホか？」と言われてたり、口に出さなくても、危ない人じゃないかと勘ぐられるのがオチでしょう。こっちがアホで危ない人だって、バレてしまうじゃないですか。

そうなるとよけいに生きづらくなりそうです。相手がそうとう親しい人であっても、なかなか口にしにくい質問だという気がします。人には尋ねていいことと悪いことがあります。

## 呪って縛る

存在と無の呪縛

存在と無の呪縛。

存在と、無の呪縛

「存在」と「無」の呪縛

句読点や括弧といった約物は古い日本語の文章ではなかったものです。それがいまではある。こうした事態は文章が写本から印刷物へと移行していった経緯とも関係があるでしょう。

「ない」のが当たり前だったのに、「ある」のが当たり前になっている。存在と無の呪縛。存在と、無の自縛。

スマホやパソコンといった端末で入力された文章が一瞬で、遠近関係なく別の端末の画面に表示される（投稿と拡散と複製と保存がほぼ同時におこなわれるという意味ですね）、いま。これから先も存在と無の呪縛は続くにちがいません。

\*

夢で漢字が浮かばないのは、漢字が私にとって知的なものだからという気がします。風景とか物とかの形や模様は浮かぶのですが、漢字となると出てこないのです。ま、うっかり者ですから、出てきても覚えていないだけという可能性は高いですけど。

あと、習字のたぐいをないがしろにしてきたからかもしれません。習字や書道や書写や写経では、毛筆にしろペンにしろ、文字とまっこうから向きあうようです。文字の意味が消えて形になっていく体験でしょうか。あるいは意味と形のあいだを行ったり来たりするとか。想像するとわくわくします。

そうした漢字をふくむ文字に淫した経験や日常をお持ちの方であれば、文字の夢を見るにちがいません。正直言ってうらやましいです。私にとっては、別の意味での夢です。

文字の夢を見たいという夢。

そんな私の場合には、言葉は夢に出てきますが、たいていは音であり声です。音ですから全部ひらがなで出てくる感じです。その意味では、夢に出てくる言葉は歌詞に似ています。あくまでも音なのです。歌詞に似て、意味はあまり意識されません。

## 有名夢、無名夢

いま思いだしてみましたが、「国破れて山河あり」と漢字とひらがなをまじえて出てくることはありません。まして「国破山河在」はぜったいに夢に見ません。案外、見ていたりして……。夢を正確に思いだすなんておそらく誰にもできませんから、夢に関しての断言のたぐいは禁物です。

夢小説はうさんくささをもたないです。言語作品、つまり言葉でつくった作品だからです。夢の再現とか夢の再生（再演ならありえます、毎回ズレたりブレるのが再演です）なんて、まさに夢語りであり夢騙り。頼りにならないし信頼できません。

夢の話が聞かされるのは退屈なものです。夢日記や夢小説の退屈さは、名前と関係がありそうです。夢小説は有名小説（有名人の書いた日記）でなければ読まれないのです。見向きもされません。

そもそも小説であれエッセイであれ、人は「有名な」名前で読むのです。作品で読むのではありません。ある作家が文学賞を取ると、それまで見向きもされなかった過去の作品がとたんに読まれはじめるのを思いだしてください。

(ここだけの話ですが、ある無名の書き手の作品を、ある有名な作家の作品だと言って、誰かに読ませて感想を聞いてみる。またはその逆を試してみると、人が名前に左右されることがよく分かります。面白いくらいに、「引っ掛かります」。)

話を夢日記にもどしますが、見た夢について書いてある有名人の日記なら、私も読んでみたいです。名前の誘惑には負けます。名前にめちゃくちゃ左右されます。根がミーハーなのです。

## 漢字の顔

漢字の一部は絵文字を経た象形文字だといわれています。絵文字には読み、つまり音すらないものがある、またはあつたと聞いた覚えがあるのですが、なかなか興味深い話です。絵文字は、単なる絵ではなく文字なのですから、形と模様だけで意味があるということですね。

いまの絵文字とかアイコンとかピクトグラムとか一部の記号や標識も、音をともなわない文字だといえそうです。身振り言語（ジェスチャー）や手話や指文字もでしょうね。あとパントマイムも。

うーむ、うなってしまうます。こういう話が好きでわくわくします。

\*

個人的な印象ですが、無という漢字には「ない」を感じません。存在と無なんて目にとると、存在と存在に見えてくるくらいです。

無という文字をめぐるどれだけの言葉が話され書かれてきたことでしょう。無が「な

い」ではなく「ある」を思わせるからだという気がします。「思わせる」のです。あるないには関係なく。無を「文字」どおりに取るわけにはいきません。

顔に原因がありそうです。無という漢字の顔です。

無といういかめしいつらがまえの漢字を無化したくなります。手なずけ、飼いならすのです。文字の顔、つまり字面が偉そうなのですから、音にしてみます。無、む、mu。「む・m+u」はまるやかな音です。私は、ま行が大好きなのです。響きがまるくてやさしくて、口あたりがいいのです。

むをもどしてみます。む、霧、矛、謀、武、務、无、無。いかめしいですね。こわいですね。えらそうですね。

夢。これはどうでしょう。この夢という漢字が好きです。無を無化するには夢化するのがいちばんみたいです。

### 言葉をいじって憂さ晴らしをする

むきーっ、とか、むっとしましたか？ 他人の言葉遊びや駄洒落にはむっとしますよね。わかります。

言葉遊びのたぐいは、言葉をいじってもてあそぶことです。現実と切り離せないと考えられがちな言葉ですが、言葉をいじるというのは、ままならない現実への復讐なのかもしれません。

ちょろいもんだ、という具合に、です。

歌や詩、そして歌詞のある音楽や節のついた言葉を口にするときの快さには、そうした要素もあるように思えます。

代償行動。遠隔操作。隔靴搔痒。

現実の身代わりつまり代理である言葉をいじることで、憂さ晴らしをするのです。自由にいじれてあやつれる気にさせてくれる言葉。言葉だけではなく、現実も思いのままにいじれるような気分させてくれる言葉。錯覚ほど気持ちのいいものではありません。

言葉がかわいそうに思えてきます。とはいえ、私の駄洒落の虫は収まりそうもありません。

＊

夢で漢字が浮かばないのは、漢字は私にとって知的なものだからという気がします。「しょうけいもじ」とひらがなで記すと、憧憬門司とか荘家鋳物師なんて浮かびそうですが、憧憬門司は頭に浮かんでも、荘家鋳物師なんて文字変換とか辞書のお世話にならないとまず出てこないでしょう。

こんなふうに漢字や漢語はきわめて知的なのです。知識がないと出てきません。昔々にはごく一部のエリートや帰化人や上流の支配者階級しか、その読み書きの知識はなかったらしいのです。

現在でも荘家鋳物師なんてぱっと理解する人なんてそうとうな物知りにはちがいません。私なんかとは正反対の人です。

私は知的ではありませんが、痴的であり恥的ではあるような気がします。さらに恥をさらしますと、歳を取るにつれて、稚的になってきているようだと最近ひしひしと感ずるのです。

## 文字は後付け

話をもどしますが、漢字が知的なものであるとは、やっぱり文字だからでしょうか。生まれて間もなく、真似しはじめるのは音であり声です。

文字は後付けみたいに、もう少し大きくなってから真似て学びます。文字はえらそうに後になってから現れるのです。

昔々の話ですが、物心がついたかつかないうちに、文字の中でももっとも偉そうな顔をした漢字の文字列を、真似させられ、学ばされたことがあったと聞きます。ほぼ強制的に、ですよ。頭をこづかれたり、びんたされた子がいたにちがいありません。

それが漢文の素読なのです。良い悪いは別として、じっさいに全国的におこなわれてきたようです。ごく一部の人を対象に、です。すごいと言えばすごい。いや、すごいと言わなくてもすごいと言うべきでしょう。

なにしろ、経典だけでなく、この国のまつりごとの基本となる文書（公文書）や学問の書物の大半が漢文で書かれていたのですから。しかも東洋における共通語（リングワ・フランカ）でもあったのです。

後付けの文字の中で漢字はスーパースターだという気がします。もちろん、日本語においての話です。

大切なのは、素読においても読経においても文字が音になっていることです。文字を音にすることで、手なずけるのです。手なずけて何度も何度も自分の中に入れる。なぞる。そうすると移ってきます。

文字を覚えるさいには、何度も何度も書き写します。写しているさなかにはおそらく意味は消えています。文字を形にすることで、手なずけるのです。なぞる。そうすると移ってきます。

おそらく意味は後付けなのでしょう。なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。文字も例外ではありません。というか、文字こそ後付けの最たるものだという気がします。

## 異国の文字を読むアクロバット

不思議です。不思議でなりません。

この国に漢字があることです。大陸における漢字とは大きく異なるでしょうね。日本語にある漢字はもはや日本語なのでしょう。

昔々、漢字という異物を取り入れ、手なづけ、飼いならしていった人たちに敬意を表したいです。文法体系も、発音発声も大きく異なります。そもそもこの国には文字がなかったのに、漢字から文字をつくったのですから、やるのがすごいです。

漢文はすごいです。中国語を日本語として読む方法を編み出したのですよ。レ点とか送り仮名とか振り仮名とか、あんなアクロバットを考えた人はすごすぎです。ああいうものが約物やルビの先祖なのかもしれません。

そして、訓読みというのですか、これがすごい。

いかめしい形をまるやかな音に変える。漢語から和語・大和言葉へ。静止と固定と停滞を流れに変える。流れではなくながれ。

やっぱり、手なづけて飼いならしていると思えません。漢字はべつに押しつけられたものではないし、その使い方についても、ああしろこうしろと命令されたわけではないからです。

てなづける、て名付ける。新しい名をつける。かりのな。

真字真名しんじまなマナを仮字仮名かりなかなかなカナにかえる、うつす。

漢文の素読はすごいです。幼いうちから、徹底的に漢字で書かれた文章を読ませるのです。音読。なんどもなんども声を出して読ませるのです。意味なんて、あとで考えさせればいいのです。

文字を音とすることで、手なづけ、飼いならすシステムとノウハウを広めたのです。それがずっとつづいて、エリートを生産しつづけたのです。

それが西洋の文物を取り入れるときの素地になったという説もあります。蘭学もそう



だったのでしょう。

たしかに明治時代のエリートは漢文の素養のうえに西洋の言葉を身につけ、学問を学んでいったようです。すでに線路が敷かれているようなもので、その上で、西洋の新しい言葉や理屈を学ぶのは楽だったのではないかと想像します。

この辺については、以下の記事に詳しく書いています。長いものなので、お時間のあるときにでも、斜め読みしてください。

言葉の夢、夢の言葉 - 星野廉のブログ

テリトリー、外、内、辺境  
辺境に身を置いた人たち  
言葉は外と内から辺境へとやって来る  
辺境としての自分  
夢の言葉、言葉の夢

horensou.hatenadiary.com

### パントマイムとしての夢

夢はパントマイムではないかと思うことがあります。夢の中では動作と景色と模様だけでなく、音も声も旋律もある気がしますが、ふと思いだすときには静止した場面とそこそこの動きだけが浮かぶのです。

夢を思いだすときにはなぞる感じなのです。指でなぞるのとはちょっと違います。目で追うに近い気がしますが、もっと全身的なものです。その意味でも身体をフルにもちいるパントマイムを連想します。

パントマイムでは表情も大切です。私の場合には、パントマイムを見ながら顔を真似ている自分がいます。眺めながら、なぞっているのです。

パントマイムとしての夢は、単に視覚的な「映る」や「写る」ではなく、全身的な「移る」の世界なのです。

覚めた思いの中で、覚えていなかった時の思いをなぞっているわけですが、思いだすときには不思議に音がしません。ふと意味もないことに気づきます。

夢の中では名前すらないようです。「見覚えがある」はあっても無名の世界なのです。名前の代わりに懐かしさや親しさがあるという感じ。

名前はないけど、動きと表情と模様と景色があるだけ。それらが立ちあらわれている。ひとりで、あくまでもひとりで、椅子に縛りつけられて見ている映画、あるいは劇。

とはいうものの、「思いだす」から「話す」や「書く」にうつると、夢はもはや夢でなくなっていくます。

### 名前のない世界、動きだけの世界

動きと表情があるだけ。似ているに満ちている。

なぞる。「似ている」になる。

＊

夢の中では名前すらないようです。「見覚えがある」はあっても無名の世界なのです。名前の代わりに懐かしさや親しさがあるという感じ。

夢の中では文字はないようです。夢で文字に似たものが出てくるとすれば、それは顔です。顔もまた、懐かしさであり親しさ。

似ているから似ているが生まれる。

これって、言葉に似ていませんか。言葉から言葉が立ちあらわれる時です。言葉の世界では言葉が質的に「かわる」とか「うつる」ことがある。そんな気がします。言葉が夢にもっとも近づく時というか。

名前のない世界、というか名詞のない世界、つまり動詞だけの世界、それをいうなら動きだけの世界。

夢だけでなく、言葉だけでなく、思いでも、そんな時がある気がしてきました。あ、現実（うつ）でも、です。

そろそろ疲れてきたようです。

\*

(以下は引用です。)

「動詞」は自然の状態であり常態であると思います。「名詞」に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は「動詞的なもの」に満ちている気がします。

「動詞」も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、「動詞」の向いている方向は、「名詞」の抽象性とは異なる気がします。

比喩的に言うと具体的な動きを誘いだす「動詞」はすくと腑に落ちます。繰り返しの言い方になりますが、「動詞」が動きを指向するからでしょう。

(.....)

一方の、「名詞」は「頭で理解する」(比喩です) 感じで、不自然なのです。動きよりも固定を指向するからではないでしょうか。自然界には固定を指向するものは存在しない気がします。いわゆる万物流転です。固定は抽象(ここではヒトの頭の中にしかないものという意味です、というか抽象とはきわめて人間的なものなのです)ではないでしょうか。

(拙文「映る、写る、移る」より)

動きからなる世界を、言葉はすくえないし既述できないのではないのでしょうか。言葉はつねに遅れます。追いつけないのです。ヒトの知覚と認知機能にとって、世界を「見る」とか「触れる」なんて荷が重すぎるから当然と言えば当然でしょう。

固定化を指向する言葉、とりわけ名詞の不自然さと無謀は目に見えているというべきでしょうか。とはいえ、世界を固定化したいという夢が与える高揚感と、そうした固定化を錯覚させる言葉（とりわけ名詞）の魅力にヒトは勝てそうもありません。気持ちがいいほうに流れるのが人情というものです。

＊

かわる、変わる、代わる、換わる、替わる。

うつる、映る、写る、移る。

漢字、おそるべし。というか、日本語における漢字というべきでしょう。こうしたことができる言葉があることを幸せに思います。

漢字があっいまの日本語があるのですね。いろいろ書きましたが、この記事が漢字批判に取られるとすれば、それは本意ではありません。また、ここで私が漢字（あるいは漢文）と言っているのは、中国語ではありません。日本語における文字である漢字のことです。念のため、申し添えます。

＊

夢のあれよあれよ感は意味でもないし言葉にならなし絵にも動画にもならない気がします。

いや、同時にそうでもない気もしてきました。

うつつ（現実）で、絵をぼーっと眺めているとか、文字をぼーっと見ているとか、動画をぼーっと目にしていると、音が消えます。パントマイムの静止画というかパントマイムの動画というか。

そんなぼーっとしているとき、体が何かをなぞっているような心もちになります。何かを目で追っている感じにも似ています。

手や足や皮膚がかすかに動いていたり、ふるえていたり、しきりにまばたきが起こっていたり、呼吸がみだれている、汗をかく、尿意を催す、わくわくそわそわぞくぞくとしか言えない何かが起こっている。

音がない、音が聞こえないのではなく、音と形と動きと意味の区別が文字どおり意味を失っているのかもしれない。

言葉が言葉になる時——それは言葉が言葉でなくなる時でもあるような気がします。

言葉でかたるのをやめて、しばらく横になってみます。疲れてきました。でも、いい気持ちです。いまはもう言葉は要らないみたいです。

#日本語 # 漢字 # 夢 # 文字 # 漢詩 # 漢文 # 大和言葉 # 存在と無 # 音楽# 声



09/09 他人の家に入る





＊

## 他人の家に入る

星野廉

2022年9月9日 08:05

他人の家に入るとぞくぞくします。こんなことをしていいのだろうかという後ろめたさも覚えます。こういう気持ちが特殊なものかどうかは知りません。話せる友達がいないので聞いたことがないからです。

私は他人の家に入った経験が人よりずっと少ないのではないかと思います。人との交際が極端に薄いのです。最近だと、他人の家に入ったのは五年前でした。ほんの三十分くらいの体験でしたがどきどきしました。思い出ただけでも息が苦しくなります。

＊

アパートかマンションに住んでいる夫婦の話——。廊下を隔てた隣人である別の夫婦が長期の旅行に出ることになり、その留守中にペットと室内の植木の世話を頼まれる。鍵を預かり数部屋から成る住まいに入って、言われた通りに猫に餌をやり植木に水をやる。

それだけならいいのですが、それだけでは済まないのです。妙な心理におちいります。魔が差したという感じなのです。おそらくふだんは自覚していなかった深層の心理が、旅行に出かけた隣人夫婦の住まいの管理を頼まれたことをきっかけに突如として出てくるのですが、不気味で読んでいてわくわくします。

以上は、レイモンド・カーヴァーの『隣人』（村上春樹訳）という掌編の要約です。この小説を再読したのがきっかけになって、このところ他人の家に入るという行為について考え続けています。

そうした行為が夢にまで出てくるのですが、行為の主体は自分であったり他人であったりします。物の場合もあります。夢の主体は動詞あるいは用言ではないかと思うことがあります。体言的な要素がことごとく曖昧になる世界が夢なのです。私にとっては。

夢の中では自他とか彼我とかあっちとこっちといった線引きは不明になります。見るのは筋らしきものがない、とりとめのない夢ばかりなのですが、今夜も見られないかなあと毎日楽しみにしています。

夢の中では反復と変奏だけが景色となって流れているような気がします。すべてが肯定されるという意味で、そこには差異はないのです。それは本を読む行為にも似ています。

＊

本にどんなに物珍しいことや初めて知る情報が書かれていても、言葉は親しげな表情をまとってそこにある。そこにいる。新しいことはない。いつか見た記憶のある言葉たちの顔と身振りの数々。懐かしい。心安らぐ。

その言葉が異形を呈する瞬間がある。それは言葉が形として立ち現れる時だ。言葉が文字となり形となって意味を失う時。心が騒ぐ。

夢の中で目を覚まされる時。そこには反復はない。似たものたちの微笑みもない。しかし、これもまた夢になっていく。そうやって人は不安と恐怖を飼い慣らす。それも一瞬のうちに。

たぶん、それが書物を読むという行為。だから本は決して読めない。書物を読んだ者はいない。現実が見えない人に現実を見た人がいないのと同じく。

書物は夜に読むべきもの。いや、そうしなくても、きっと誰もが夢の中で読んでいるもの。

＊

私は吉田修一の小説が好きで、一時期には『元職員』を除く全作品に目を通していました。『元職員』を残したのには深い意味はありません。なぜか、ある時からぱたりと読まなくなったのです。でも、好きな作家であることは変わりません。むしろ大好きな作家といえます。

吉田修一の作品には「他人の家に入る」という身振りがよく出てきます。その身振りに関して、上で挙げたレイモンド・カーヴァーの『隣人』と似たストーリーというか設定と場面が出てくる小説がいくつかあります。

そっくりなのは『パーク・ライフ』です。

”ラガーフェルドの世話という名目で、誰もいない宇田川夫妻宅に毎晩やってくるようになって二週間になる。「泊まっていてもいいよ」と和博さんが言ってくれたので、ここ数日はその言葉に甘え、広い2LDKのマンションを独り占めしている。歩いて三分しかかからない自分のアパートに戻らないのは、三日前に上京した母がそのベッドを占拠しているからで、ここ数年、彼女は、春と秋、季節がいいところを見計らって上京してくる。”

(吉田修一著『パーク・ライフ』文春文庫・p 40)

『パーク・ライフ』では、語りである「ぼく」が知人らしい夫婦宅マンションで、彼らの愛猿ラガーフェルドと遊びながらテレビで映画を観ていたりします。夫妻が住まいにいない理由は割愛しますが、とにかく語り手は留守宅を任されているわけです。

(この小説ではタイトルにあるパーク（公園）が主要で重要な場所になるのですが、他人の家に入るというテーマとは関係がないので公園での出来事は触れずに話を進めます。吉田修一の諸作品において公園という場所はきわめて興味深い役割と機能を果たしている、と指摘するだけにとどめておきます。)

語り手の「ぼく」は、知人夫妻宅でシャワーを浴びたり、リビングの書棚から本を取り出してめくったり、かかってきた電話の留守録の内容を聞いたりします（盗み聞きとも言えます）。台所に行って冷蔵庫を開けて好きなものを作って食べたりもします。

こう書いていると既視感の洪水がやってきました。

「ぼく」は「歩いて三分しかかからない」ところに自分のアパートがあるのです（そこには家族の一員である母親がいる）。それなのに他人の家に入る。他人の住まいをあちこち物色する。そこにはペットがいる。その世話を頼まれている。やっぱり似ています。

似ているというより懐かしいのです。寝入り際の夢うつつや夢の中でよく出会う風景のように懐かしいのです。

＊

長くて恐縮ですが、反復と変奏がテーマになってきたので、以下に拙文「プライベートな場所、プライベートな部分」から、以下に引用させていただきます。

カーヴァーの短編や掌編では、住まいに他人がまるで「異物」のように入りこむ話が目立ちます。「異物」というのは、その住まいと住人（多くは夫婦なのですが）にとって不気味で異質な存在であり、何か不穏な事態を招く存在だという意味です。『隣人』では、留守中の猫と植木の世話を頼まれたとはいえ、ストーン夫妻の住まいに入りこんで物色したり私物をいじるビルとアーリーンは他人の住居に侵入する「異物」と見なしていると思います。

他人のテリトリーを、おかす、侵す、犯す、冒す——というわけです。

『大聖堂』という短編では、「私」という語り手の妻の友人である「盲人」ロバートが家に泊まりに来ます。このロバートが語り手の心や感覚を揺さぶるのですが、その揺さぶり方が奇妙なのです。盲人に大聖堂がどんなものかを言葉と絵で描写するという思いがけない展開に戸惑う読者が多いでしょう。しかもその記述がじつに触覚的で、読者はあれよあれよという間にカーヴァーの術中にはまるにちがいありません。

『ファインダー』は、「両手のない男がやって来て、私の家を写した写真を売りつけようとした」という具合に始まります。この一文だけでもカーヴァーはうまいと思います（持論なのですが、ほのめかしの多い淡々とした筆致のカーヴァーは、意外とサディスティックなのです）。男はトイレを使わせてくれと頼みます。トイレもカーヴァー特有の小道具です。語り手の「私」は、赤の他人であるこの男に自宅で、いわば「こき使われる」はめになります。

『ささやかだけど、役にたつこと』とそのショート・バージョンである『風呂』では、交通事故で意識不明になった息子の入院中に、何度も自宅にかかってくる電話が「異物」となります。ところで、それほど重要な要素だとは思えない風呂 (bath) がタイトルになっているのは興味深いうえに不可解で、何か読み落としたのかと気になるほどです。父親か母親のどちらか一方がいったん病院から帰宅して風呂に入っている間が、親子三人がぼらぼらになり、各人が一人になる時であるという意味で重要なのでしょうか。ここでは、風呂が基本的に一人になる場であると指摘するだけにとどめ、その象徴的な意味については別の機会に譲りたいと思います。

『ダンスしないか』においては、カーヴァー・ワールドで頻出する家具や生活用品が、ガレージセールという形で庭に出されます。庭がにわかに住まいの様相を呈するのです。売主である「彼」は結婚が破綻したらしい中年男で、その家の庭に結婚前の男女が現われるのですが、ここでは住まいがもはや住まいではなくなっています。庭に並べられた物たちが住まいを追い出された「主」で、中年男や若いカップルのほうが「異物」に見えてくるのです。カーヴァーによる自作の脱構築と評するのは、言い過ぎでしょうか。

引用は以上です。

\*

『パーク・ライフ』の文章が好きです。字面が綺麗なのです。癖がなく清潔な印象を与えるのは、いわゆる「お洒落な都会生活」が描かれているからかもしれません。そうかもしれませんが、文章そのものにこだわりたいと思います。

吉田は内容に応じて文体を変えます。短編集『熱帯魚』(文春文庫)と長編『長崎乱楽坂』(新潮文庫)だと、もっとごつごつして生々しい性欲と暴力性を感じさせる文章を書いています。この種の文体の時には、登場人物がやたら汗をかくという特徴があります。

安易な連想ですけど、中上健次の作品に似ていると思ったこともあります。初期には中上を意識して書いたのではないかと思われる作品がいくつもあります。上で挙げた『熱帯魚』や『長崎乱楽坂』がそうです。中上の作品のように字面も黒々としています。

吉田修一は内容やストーリーだけでなく文章で楽しませてくれる作家です。語りで読ませる書き手だと思います。

他人の家に居候をしたり、臨時にあるいは短期間他人宅に住んでいる人物が、吉田の作品ではよく登場するのですが、そんなところにも私は惹かれます。たぶん自分には縁遠い世界が描かれているからでしょう。

以前に吉田修一論を書こうとしたことさえあります。出だしは決まっていて、「吉田修一の小説ではやたら人が汗をかく。いや、むしろ汗が吹き出し流れるのだ」でした。

『パーク・ライフ』では、登場人物は汗をかきません。かきそうでかかないのです。性欲と暴力が少なくとも全面には出てこないからだと思われれます。作家のこういう癖みたいなものが私は好きです。作家が書く時の癖を楽しみながら読んでいるところがあります。それが私の読む時の癖みたいです。

＊

(以下は引用です。)

他の人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。

詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人たちの作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。これはプロ・アマを問わず見られます。悪い言い方をすればワンパターンでありマンネリズムです。

そうしたものが個性なのであり、オリジナリティーなのであり、本物なのであり、著作権によって守られる対象だと言えるでしょう。

あ、これ、〇〇の曲でしょ？ △△の映画は見始めて三分でだいたい分かるね。確かに、このドラマは、いかにも□□さんの脚本ばいストーリーね。これって、あの人の作でしょ？ まだだ！ 「なんでレンブラントだって分かったの？」「背景の色、そして筆さばきかな」

創作活動とは自分を真似ることではないか、自分の複製をつくることではないか、と思えるほどです。

(以上は、拙作「私たちはドン・キホーテとボヴァリー夫人を笑えるでしょうか？」からの引用でした。)

\*

吉田修一作の別の作品を見てみましょう。

” 閻魔ちゃんの部屋でのぼくの暮らしぶりは、「体調の良い病人」という言葉がピッタリだと思う。毎日昼近くに起き出して、夕方まで本を読んだり、散歩したりして過ごす。五時頃になると、閻魔ちゃんが近くの丸正へ買物に行くので、ぼくはゆっくり風呂に入る。風呂から上がった頃には、閻魔ちゃんの料理が完成しているというわけだ。”

(吉田修一著『最後の息子』文春文庫・p.20)

『最後の息子』では、「ぼく」(『パーク・ライフ』とはまったく別の語り手です)が「閻魔ちゃん」の住まいで居候をしています。この小説は実にユニークな設定なのでぜひお読みいただきたいのですが、いずれにせよ、他人の住まいにいる語り手の生活が描かれていることに注目しましょう。

『パーク・ライフ』と『最後の息子』——。両者を読む時、私は既視感を覚えずには読むことができません。そしてその既視感はカーヴァーの『隣人』で描かれるさまざまなシーンとも重なるのです。そうした既視感と連想は、私にとって読書の醍醐味でもあります。こういうとりとめのない思いが楽しくて仕方ありません。

大げさな言い方になりますが、文学空間とかテキスト空間に居るような不思議な気分になります。言葉と言葉が喚起するイメージが共鳴し合うような世界です。正視すれば目まいを起こすに違いない明視の世界なのですが、ぼうっとした眼差しを送ることで、それをやり過ごすのです。

大切なことは差異よりも類似が幅をきかせる場という点でしょう。

お断りしなければならないことがあります。ここでは異なる作家による作品間の模倣や影響を問題にしているではありません。私は類似に惹きつけられる人間ですが、作

品間の影響や模倣について考えることはないです。ただ似ているのが面白いと思うだけなのです。

影響や模倣という概念は、そのに在る言葉を読めなくします。在るものを何か別のものに置き換えるという、読むのとは違った作業に陥ります。

他人の部屋に入るという行為が出てくる作品は世の中にたくさんあるにちがいはありません。私が読んだことのある小説など数が知れていますし、私が似ていると思うのはごく個人的な感想であり意見でしかありません。

一個人がその限られた読書体験の中で気づいたことを楽しんでいるだけだ、と理解していただきたいと思っています。

\*

小説にしろ、詩にしろ、エッセイにしろ、ある書き手には書く際の癖みたいなものがありますね。ある特定の作家を読みこめば読みこむほど、癖やパターンが分かってきます。

たとえば、さきほど述べたように吉田修一の作品では登場人物がやたらと汗をかきます。汗と同じ水からなる、プール、海、噴水もよく出てきます。繰り返しになりますが、他人の家に入るとか居候をする話も多いです。「あっ」（この間投詞を吉田が使うと実にチャーミングなのです）と声を上げる仕草も頻出します。あと、建物の上から、外の通りを見下ろすという身振りも目立ちます。

一時期に私が吉田の小説を集中的に読んでいたのは、何らかの形で他人の家に入るという身振りに惹かれていたからではないか、と思うことがあります。私は小説を書くことがあります、自分にとっての第一作にも、「他人の家に入る」という行動が出てきます。実生活では、他人の住まいを訪ねることが極端に少ないにもかかわらず、です。

そういえば、私の小説をずっと読んでいる人から、「あなたの小説ではおしっこをする場面とお風呂の場面が多いね」と言われて、はっとしたことを思い出しました。そうかもしれません。おしっこの場面はなくても、トイレが重要な意味を持つ作品もあります。



完成か未完成を問わず、これまでに自分の書いてきた作品たちを思いかえしてみると、他人の家に入るという身振りが繰り返されているのに驚きます。同時に、やっぱりねという思いもあります。

たぶん、いや、きっと、私は他人の家に入りたいのです。さもないと、「他人の家に入る」についていくつも記事を書かないだろうと思っています。まだまだ書くに決まっています。気持ちがいいから、それを繰り返すのです。すると繰り返すこと自体が気持ち良くなる。

同じことを繰り返すことで安心するのでしょうか。子どもがブランコやシーソーやメリーゴーランドの単調な動作や風景の繰り返しが好きなように。そうしたぶらぶらゆらゆらぐるぐるとした世界では主体などなく、あるのは動きと景色ばかりなのです。

やっぱり、創作活動と読書体験（作品の鑑賞）は夢に似ています。

#小説# 文学# 読書# 吉田修一# レイモンド・カーヴァー



09/10「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる



＊

「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる

星野廉

2022年9月10日 07:52

「わかる」と「はかる」は字面と発音が似ていますが、「わかる」にくらべて、「はかる」はあまり考えたことがありません。でも、身のまわりを見ると「わかる」だけでなく「はかる」が多いのに驚きます。

とくに、病気になったり老いると「はかる」を意識するようになります。病院に行くとうなりますが、検査は「はかる」のデパートです。「はかる」をたくさんして、その結果が「わかる」というわけです。尿検査だけでも、たくさんの「はかる」があり「わかる」があるようです。結果の項目（リスト）を見るとわかります。

それにいまは、家でも毎日体温を測っています。はかれればわかって安心するわけです。いや、「はかる」の結果をわかりたくないと思うときが、ままありますね。気が滅入りそうなので、思い出話をします。

＊

いまになって思うと、学校という場所は「はかる」と「わかる」に満ちあふれていました。そもそも、学校は「わかる」と「はかる」に二分されると言ってもいいのではないのでしょうか。

なにしろ、はかるとわかる、はかるはわかる、なのです。恐ろしいことですけど。「はかる」は、ほんわかとした、いいこと尽くめではないのです。

09/10 「はかる」と「わかる」に因はれて上りし

黒板と教科書とノートをつかってのお勉強は、たいていが「わかる」ためです。理科の実験・観察や体育や家庭科や図工なんかは、だいたい「はかる」の世界です。

保健室も「はかる」の領域という感じがしませんか。体温計、体重計、そして何と呼ぶのか知りませんが、身長や座高を測る計器が置いてあるところです。そして最後は通知表で、これが「はかる」の総決算になるのです。

はかられる気分は決していいものではありません。少なくとも私には悲しい思い出しかありません。人間が数字に還元されるのですから。

飛躍するようですが、一足す一は二というのと同じで、事物や生き物の個性を消すのが「はかる」なのです。数字になるとは、個性を消されることにほかなりません。

はかる行為が、例の殺伐とした残酷な風景と究極においてつながっていることを忘れてはならないと思います。死者〇〇名とか負傷者〇〇名という具合に……。「死する」と「負傷する」が殺伐として残酷なのではありません。数字として「処理される」ことのほうです。

＊

体育も「はかる」の世界です。というか、「はかる」そのものが体育だという印象があります。しかも「はかる」だけではなくて、「くらべる」のです。そして「きそう」のです。嫌でした。

大学に進学して一般教養の科目として体育があると知ったときには、度肝を抜かれました。「うそー。だまされたー」という気がして、しばらく立ちなおれませんでした。私にしてみれば、まさに、はかられたのですから。

高校を卒業して嬉しかったことのベスト3に、体育とのお別れがあったからです。そう信じて疑っていなかったのです。なのに、大学にまで体育がついて来たのです。ショックでした。

それで思い出しましたが、大学の入学式のすぐあとに身体測定兼体力測定があったのです。その会場の雰囲気、すごく嫌でした。体育会系の部やサークルの連中らしき者たちが、当たり前みたいな顔をして場内をうろついているのです。そして握力や背筋力や肺活量などをはかる計器のそばで、新入生たちを物色しているのです。

ドナドナドーナ、ドーナという悲しげなメロディーが頭の中で鳴り響いていた記憶があります。売られていく家畜になったような、切ない気分になりました。

でも幸いなことに、運動能力とか体力とか腕力のたぐいには全然自信がなかった私は、見向きもされませんでした。特に握力形の数値を見たある上級生が「嘘だろ」とか何とかつぶやいたのには一瞬むかっとしましたが、すぐさまほっとしました。「僕は売れそうもない。よかった——」

＊

「はかる」をわけてみましょう。分けるのです。「はかる」と「数値化する」を分けたいのです。お金で考えてみます。値踏みという言葉がありますね。値踏みはお金という数値に置き換えることですが、お金という数字に置き換えた瞬間に、「はかる」が「わかる」に変わっているのではないのでしょうか。

値段が決まるまえに「ああでもないこうでもない」がありますが、それが「はかる」だという気がします。ある意味、優柔不断でとりとめがないのが「はかる」なのです。優柔不断でとりとめがないと言われつづけてきた私は、親しみを覚えます。

「値踏み」や「値を踏む」のこの「踏む」とは、地面の土を足の裏で押すことにほかなりません。野菜や果物のできぐあいを目をつむって押してみる。スーパーでラップにくるまれたお肉や魚をこっそりと押してみる。あれと基本的に同じです。

人が身体をつかって「おしはかっている」のです。指や手、足の裏や足の指という繊細なセンサーがついてる末端で「押す」「推す」わけです。「今年は○が優勝すると踏んだ」なんていう場合の「踏む」は「おしはかる」「はかる」ときわめて近い気がします。

走り幅跳びとか走り高跳びのスタート地点付近で足踏みみたいな仕草をする選手がい

ますが、あれも踏んでいるし、はかっているのでしょう。間合いとか土のぐあいとか風向きや風の強さとか自分の中の「何か」とか観衆の圧とか、そういうものをはかっているにちがいません。

結果としての数字つまり記録は後でやって来ます。「わかる」は後に来るのです。わかるまではどきどきでしょうね。わかって喜んだりがっかりしたり.....。

足踏みという言葉とイメージが好きです。えんえんと足踏みをしている。前には進んでいない。べつに踏ん張らなくてもいい。えいえんにわからないまま。たぶん、わかることを放棄している。ふんでいるだけでいい。自分の人生みたいで親しみを覚えるのです。

#日本語 # 辞書 # わかる # はかる # ふむ # 学校 # 体育 # スポーツ # 数字



09/11 名詞的なもの、動詞的なもの



＊

## 名詞的なもの、動詞的なもの

星野廉

2022年9月11日 08:07

「動詞（的なもの）」と「名詞（的なもの）」については、以前に記事にしたことがあるので、近いうちにもう一度加筆したうえで投稿しようと考えています。

（拙文「映る、写る、移る」より）

今回は、上に引用文にある「以前に記事にしたこと」を取り上げます。

目次

名詞的なもの

動詞的なもの

名詞派、動詞派、動名詞派

## 名詞的なもの

名詞は、固定と安定を指向します。揺れとぶれを忌み嫌うのです。

名詞は、固定化と安定を目指す以上、権威や権力と親和性があり、同時に思考停止や判断停止とほぼ同義であることを忘れてはなりません。名詞で「決める」と、「やった！」という具合に思考が止まるのです。そして保身に走ります。革新がいなくなって保守だけになるのです。権力は腐ると言いますが、名詞も腐ります（もっともらしかったり、偉そうな名詞は腐っています）。

名詞は、印刷と相性がいい、あるいは親和性があります。現在はネット上で書きネット上で文章を流通したり拡散することが一般化していますが、印刷しかなかった時代の書き方やレイアウトやルールを踏襲しようとする人が跡を絶ちません。ご覧のとおり、いまの私がそうです。十三年前のほうが、自由な書き方をしていました。↓

うつせみのあなたに 第7巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム

哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいただき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた

puboo.jp

note では新しい試みをしている書き手が多いです。note では書体やフォントでの冒険はできませんが、表記、レイアウト、言葉遣いの点でさまざまなバリエーションを楽しめます。とくに「詩」では過激なくらいの冒険をしていて、わくわくします。形式だけに目を向けると（私は文章の顔、つまり字面を重視するのです）、「詩的なもの」や「詩のようなもの」や「詩らしいもの」がかなり揺らいでいるという印象を受け、頼もしく感じます。

名詞は、普遍や真理を目指す、あるいはその存在を信奉しています。ないものを信じているわけですから土台無理があります。その無理の上に成り立っているのが名詞的なものなのです。まさに無理難題。

名詞は、シンプルや簡潔を求める、あるいは他者にも求めたり強制します。この押しつけがましさに惹かれる人も多いです。きわめて多いというべきでしょう。「シンプルなものじゃなきゃ真理じゃないの!」という威勢の良さはやはり魅力でしょう。容易に否定できるものではありません。

名詞は、名詞至上主義であり、名詞原理主義です。当たり前ですね。

名詞は、不自然で人工的です。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいのではないのでしょうか。観念だからです。ないのです。だから、見えません。あるものもないもの、見えるもの見えないもの見境なく「名づけた」結果なのです。その意味で、ひょっとすると名詞は不自然どころか反自然なのかもしれません。

そもそも「名づける」とは、自然と向きあう人間が恐怖と不安を解消しようとして「手なづける」ためにおこなっている操作なのであり、人の心理的な動機から生じた処理法だとも言えるでしょう。人の都合で、代理である表象（言葉、イメージ、映像、象徴、記号など）をもちいて名づけている（手なづけている）にすぎません。

言葉を持ってしまったただけでも大事件だったのに、人は文字まで持ってしまいました。

無文字という選択肢もあったはずなのにです。話し言葉は消えますが、文字はしつこく居直り残ります。まるで名詞みたいじゃないですか。人は文字を手にして、さらに固定化を指向するようになった気がします。人類の言葉化、名詞化、文字化が進行しています。人は言葉に擬態しているのです。

人のつくったものに人は似ていく。そんなふうに思えてなりません。

\*

名詞は、結果重視ですから、どこかに到着することが目的であり目標になります。「わかった！」を目指すわけです。概念と悟りという標語で突っ走ります。いや、じつは動いていないのです。名詞は睨みをきかせるだけ。睨まれて動くのは人間です。右往左往しています。

無いものなのに付度して右往左往、いや、無いからこそ付度するのでしょうか。無いものや見えないもの気配に付度。見られているどころか、睨まれているという気配ほど、恐ろしいものはありません。せめて名づけて、その恐怖を誤魔化すしかないという理屈です。名づけることで恐怖は軽減されますから。なにしろ、名前は言葉、言葉はいじれますから。name を name る、みたいに。なめてかかれます。チョロいものだ、と。

この辺については諸説があります。手ごわいから名づけて、つまり名前をあげて、「餌づける」という説です。餌は生きがいのをあげるのがいちばん。乾物や干物じゃ駄目です。生餌（なまえ）です。なまえをあげるのです。「上げる」ですから高くかかげて差し上げるのです。供物に似ています。生け贄（犠牲）のことです。厳粛な気持ちになります。

名詞は、Sです。基本は暴力。しかも一方向（一方的）。要するに、攻撃。自己中で相手に有無を言わせない。忍耐強くない。快感を得るためのストーリーはなく、計画性は希薄で衝動的。ある意味、単純。主導権という観念すらない。

名詞は、端正、重い、厳めしい、存在感あり、がちがち、ごちごち。頼りになる。実は抜けている。短い。簡潔。すっきり。固体。

名詞は、テリトリー（領土、縄張り）を手放しません。定住者なのです。トーテムポー

ルのように歴史を重んじます。

名詞的なものとして、男根、顔、まな、真字、真名、ステーキが挙げられますが、イメージがお分かりいただけますでしょうか。

あと、名詞とつながりが深そうなものは、文字、読書、図書館、記述・記憶・記録、よむ、かんがえる、ろんじる、かたる。だんだんやっつけ仕事になってきて申し訳ありません。辟易しているのです。

最後に。当たり前のことですが、名詞は名指しますね。「めいし」を「名指」と表記するのが、当たり前で理にかなっている気がします。当て字の名人である漱石先生が夢に出てきて、教えてくださった感字なのです。

## 動詞的なもの

動詞は、揺らぎとブレを指向します。固定や安定を横目に（見てないわけではありません）、ぶらぶらふらふらします。

動詞は、ネットと相性がいい、あるいは親和性があります。現在、ネット上では印刷オンリー時代にはなかった新しく自由な書き方、表記、プレゼンテーションが流通しています。こうした形式はこれからも変化し続けるでしょう。統御する組織や仕組みがない限りですけど。

動詞は、随時あるいは常時更新中という状況であり、「とりあえず」が常態だと言えます。「これでいい」とか「ここまで」とか「これしかない」とは無縁なのです。

動詞は、多様性や多層性に対して開かれています。他者への干渉を諦めているふしが見られます。なんでもあり、お好きなようにというイメージです。

動詞は、文字どおりとにかく動きます。当たり前ですけど。揺らぐ、うつる（映る・移る・写る・遷る・流行るんです）。ゲリラ的な動きをするので目が離せないところがあり

ます。

動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。動詞も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、動詞の向いている方向は、名詞の抽象性とは異なる気がします。

＊

動詞は、プロセス重視であり結果を重視しません。行き先には無頓着で「ドライブは途中が楽しいよ」派なのです。「えーっと、えーっねえ……」となかなか煮えきらない。体感と直感を重視しますから優柔不断とも言えます。

動詞は、Mです。基本は、教育と演技（演劇・振りをする）と遊戯ですから、要するに、プレイなのです。しつこい、根気強い。かまってちゃん。言っていることと望むことがしばしば真逆（たとえば、「駄目」は「OK」、「やめて」は「続けて」、「死にそう」は「めっちゃ気持ちいい」）。名詞に負けた振りをしながら、主導権は自分が握っています。Mはじつは「ご主人」なのです。したたかなのです。

動詞は、いびつ、軽い、飄々、とりとめがない、ひゆるひゆる、ほわん。きわめてテキトーで、冗漫、ぐたぐた、気体のよう。

動詞は、領土の境のない草原のようで、そこには遊牧民（ノマド）が住んでいます。リズム、器官なき肉体なんてものと近そうです。

動詞的なものとしては、表情、かな、仮字、仮名。料理だと、スキヤキまたは鍋物、要するにごった煮です。

あと、動詞と仲がよさそうものとしては、音声、歌、口承、かく・しるす・よみがえる・かえる・かえす・うたう・となえるなんてところでしょうか。

だんだんやっつけ仕事になってきて申し訳ありません。息切れがしてきました。こう

いう分類が苦手なのです。「じゃあ、やめれば」なんて聞こえてきたので、ここでストップします。

### 名詞派、動詞派、動名詞派

何だか性格占いみたいで楽しいですね。というか、上の図式はそうようにつかっていただいてかまいません。あなたは、どっち派ですか？ 名詞派？ それとも動詞派？

しょせんお遊びの図式ですから、楽しいに越したことはありません。そもそも、こんなことは本気で真面目にやるものではありません。ところで、あなたは、どっちがタイプですか？ 恋人としてなら、〇〇派、結婚をするなら、〇〇派なんて言うのも、面白そうですね。

私は友達にするなら「動名詞」派です。動名詞とは、英語の動名詞という名前をお借りして私が勝手につくったものなのですが、抽象度の高い名詞に「する」をつけるとできます。愛する、哲学する、詩する、小説する、なんて感じですよ。

＊

たとえば、愛という名詞は抽象的で役に立ちませんから、「愛する」と動詞にすることで具体的な「行為にうつす」のです。すると生きます。「愛」なんて、「愛して」なんぼです。もらってうれしいのは名詞より動詞でしょ。

固定を指向する名詞を流動化させるなんてもっともらしい言い方もできるでしょう。

ジル・ドゥルーズする、みたいに固有名詞を動名詞にしても、「生きる」と思います。固有名詞の主への盲信から生じる思考停止を阻止できるとは夢にも思いませんが、活性化する一助にはなる気がします。

世界をマルクスする、なんて言い得て妙だし、今夜みんなでニーチェる、なんて楽しそうじゃないですか。サルトルる、ポーパワーるはそのまま日本語の動名詞になりますから、サルトルれます、ポーパワーれば、というふうには活用しない手はないと思います。



おふざけはさておき、名詞を片っ端から動名詞にするといい頭の体操になりそうです。平和してみる、学校してみる、幸福してみる、母親してみる、猫してみる、文学してみる、SDGs してみる、たんぼぼしてみる、インシテミル——想像力を働かせて演じてみるのです。頭の体操ですから正解なんてありません。楽しくやりましょう。

いろいろ書きましたが、そもそもこんなことは本気でやることではないのです。本気でやると固定化して保守に走りますから。

#名詞 # 動詞 # 日本語 # 固有名詞 # 言葉



09/12 レッテルたちと戦いながら生きていく、  
たったひとつの名前



＊

レットルたちと戦いながら生きていく、たったひとつの名前

星野廉

2022年9月12日 07:44

曖昧なものが好きです。多義的であったり多層的であったり、プリズムのように見る位置によって見え方が異なる物や事や人に惹かれます。というか、どんなものでも一様であることはなく、多様なのだと感じているのです。

そういう曖昧さを感じる楽曲があります。ビー・ジーズ (Bee Gees) のメロディ・フェア (Melody Fair) なのですが、この歌では Melody Fair (※映画では、Melody Perkins (メロディ・パーキンス) です。) という女の子の名前自体が詩なのです。

melody は、ご存じのように「旋律」という意味があります。ジーニアス大英和辞書にある語義を並べてみます。

- ・(主) 旋律、節 (ふし)、歌 (曲)
- ・快い調べ、美しい音楽
- ・(詩・声などの) 音調、抑揚
- ・歌うのに適した詩

fair にはもっとたくさんの意味があるので、気になったものだけを挙げましょう。

- ・(文語で) 天候がよい
- ・(皮膚が) 色白の、(髪が) 金髪の、(人が) 色白で金髪の
- ・(名声などが) 汚れのない、きれいな
- ・(文語で) (女性が) 美しい、魅力的な
- ・(同音の別語で) 縁日、市 (いち)、品評会 (※華やかでお祭りの行事を想起させ、Melody Fair で「旋律の祭典」みたいなイメージも浮かぶと思います。)

※映画の中では、Melody Perkins (メロディ・パーキンス) という名前です。

＊

Melody Fair の歌詞を部分的に引用してみます。

Who is the girl with the crying face  
looking at millions of signs?

She knows that life is a running race,  
Her face shouldn't show any line.

Who is the girl at the window pane,  
watching the rain falling down?

Melody, life isn't like the rain ;  
its just like a merry go round.

ご覧のように似た発音の言葉がいい具合に縦横に散らばっています。完全に韻を踏んでいるわけではありませんが、似たものが散らばるだけで心地よさを感じさせるのです。反復と変奏の妙です。

また、Melody Fair という美しく響く文字通りメロディのような名前が繰り返されます。その音を乗せている旋律 (メロディ) が綺麗なのです。単語の発音と意味に旋律が擬態しているような印象さえ与えています。

韻や似た音の連続は、意味の離れた事物同士に音以外の「似ている」点があること——あらゆる物が多面的だからです——を気づかせてもくれます。言葉が事物をつないでくれるわけですね。花から花へと飛ぶ蜂や、恋や愛のキューピッドみたいで微笑ましく思います。

＊

いちばん好きな箇所を挙げます。

Melody Fair, won't you comb your hair?  
you can be beautiful too.

fair が hair と韻を踏むという点は、この歌詞で決定的なインパクトをもたらし、この箇所への響きの美しさは比類がありません。won't と comb にも母音の一致が見られます。音読しただけで、ため息がこぼれます。続く、強弱弱強弱弱強というフレーズの you、beautiful、too の同音の連続も快く響きますね。

Melody Fair, remember you're only a woman.

Melody Fair, remember you're only a girl.

名前を呼ぶ、最初の二語で盛り上がり、次第に抑えていき最後はつぶやくように歌われる箇所です。この二行では、最後の a woman と a girl だけが違います。あとは同じ。この繰り返しと差異の妙は見事だと思います。

woman と girl は反義語であると同時に類義語でもあります。つまり、人という存在は多面体（プリズム）なのです。この歌では、この曖昧さ（両義性・多様性）が詩（歌詞・音声）となり人を惑わせるのです。

woman と girl に相当する日本語で見てみましょう。

女の人－女の子（大和言葉）

おんな－むすめ（大和言葉）

女性－少女（漢語・唐言葉系）

日本語でも反義語であり同義語でもあることがお分かりいただけると思います。同じ女性なのに、ある尺度や見方で切り分けているだけです。この切り分けを差別とも言います。切られれば痛いし血が出るのに、切ったほうは気がつかないのです。

Melody Fair, remember you're only a woman.

Melody Fair, remember you're only a girl.

たった二行のこの部分が、レッテルたちと戦いながら生きていく、たったひとつの名前を歌った詩のように見えてなりません。

＊

メロディー・フェア、髪を櫛でとかしてみたらどうかな？

君は美人にだってなれるんだよ。

だって、

メロディー・フェア、覚えておきなさい、君はただの女なんだよ。

それだけじゃない、

メロディー・フェア、覚えておきなさい、君はただの娘なんだよ。

つまり、君は「ただの女だから」（男には負ける）と「ただの娘だから」（しょせん子ども、しかも女の子だ）が、社会的に不利であると同時に「（髪を櫛でとかせば）美人になれる」という可能性を潜在的に持っていると感じかせているとも取れます。逆手に取ると言えば、深読みしすぎでしょうけど。

「いいかい、君は girl であり woman であり Melody という人間なんだから」——そこまではおそらく言うてはいませんが、そう解釈したくなります。

人を一つの属性を表す語、つまりレッテルで指すことは不可能なのであり、複雑な現実を反映していないのです。こうした現実を失念しているために起こる誤解や苦しみや不和や争いは多いと思われます。

＊

悲しいことに、人は一面的なレッテルをたくさん貼られながら生きています。一面がたくさん集まったから多面的になるわけではありません。レッテルとは、その時、その場の都合で貼られるものなのです。押しつけなのであり、おそらく、その人を縛るための方便です。

こうも言えます。ある人が、一日で貼られるレッテルは多いのは事実です。時と場合に応じて役割があるから当然です。でも、ひとつのレッテルでその人をくくるのは、その人の多面的な個性を無視して、その人を縛ることにほかならないと思います。

人はレッテルとは関係なく、多面的な存在なのです。レッテル、言い換えれば、あなた



の名前以外の名詞はあなたを縛って固定化しようとするだけ。名詞は固定を指向します。

\*

Melody Fair は映画「小さな恋のメロディ」の主題歌でもあります。この映画のサウンドトラックに収録されている「First of May (若葉のころ)」もいい曲ですね。

この映画の原題は Melody、または S.W.A.L.K です。S.W.A.L.K とは、sealed with a loving kiss の略でラブレターの封筒の裏に書くのだそうです。愛を込めて封をするのでしようね。

この映画は、自分に一方的に貼られた一義的なレッテルに反抗する「女の子」および「子どもたち」の物語にも思えてなりません。「女性対社会」とか「子ども対おとな」という構図を見ることも可能でしょう。

いま使った女の子、子ども、女性、おとな——こうしたものは言葉でもあります。言葉を使う以上、人はレッテルと無縁で生きることはできませんが、レッテルの存在を意識することで、レッテルに抗い、戦うことはできると思います。戦うのは自分です。他人と連帯するたぐいの問題だとは私には思えません。

自分に貼られたあるレッテルが嫌で嫌でたまらなかつたり、堪えられないほど重荷に感じられることはありませんか？

もし人が生きづらいつけるなら、その人の人生は、自分に押しつけられ自分を縛るレッテルたちとの戦いなのかもしれません。誰もがレッテルという複数の名前と戦っているのです。たったひとつの大切な名前だけで十分なのに。

#洋楽 # 歌詞 # 映画 # 音楽 # 英語 # ビーゼズ # 女性 # 少女



09/14 one way or another



＊

one way or another

星野廉

2022年9月14日 08:04

はかる、測る、量る、計る、図る、謀る、諮る。

わかる、分かる、解る、判る。

わかる、分ける、別ける。

語源とか出自にかまわず、漢字にしていきます。辞書をつかっても、PCで入力するさいに出てくる候補をもちいてもできます。

「わかる」を「わかる」ことで「わかる」。「はかる」を「わかる」ことで「わかる」。「わかる」を「はかる」ことで「わかる」。「はかる」を「わかる」ことで「はかる」。

わくわくします。

＊

漢字でわけてわかったり、漢字でわけてはかったりするプロセスがわくわくする一方で、「はかる」も「わかる」も「わかる」も、好きではありません。

「わかる」から言うと、「わかる」よりも「わからない」ほうがわくわくします。「わかる」をえんえんと引きのぼすと言えいいのでしょうか。まだまだという感じで、宙づりにされたまま「わかる」に至るまでのプロセスを楽しむのですが、べつに「わかる」を目指してはいません。

私にとって「わかる」はプロセスであり、目標ではありません。

「はかる」。これは嫌ですね。「はかる」と「くらべる」と「きそう」と「あらそう」は、近いというかセットなのです。体力や学力など能力というものを想定して、それを数値化するのが「はかる」です。

数値は独立して存在するものではありません。ほかの数値とくらべてなんぼなのです。

「君は〇〇センチ（メートル、点、キログラム）だから、XXさんの下だね（クラスで最後から二番目だよ）」

＊

ああ、思い出しました。私の場合、ほかの人たちに比べて極端に乏しいのが、投げる力です。投げる力をはかるには、ハンドボールやソフトボールを投げさせられますよね。投げた時の距離が半端じゃなく短いのです。

それを知らない先生は、ずかずか寄ってきて「おい、ふざけんなよ」なんて言われたことがありました。肩にきつと障がいがあるのだと思います。でも、日常生活には支障がないので気にはなりませんけど。

必然的に、ソフトボールも、野球も、ドッジボールも駄目ということになります。中学に入ってバレーボールとサッカーをやらされたときには、何とか耐えましたけど、幼いころから球技全般に嫌悪感をいだいていました。

好きだったのは走ることぐらいでしょうか。それも短距離だけです。持久力がないので長距離はまるっきり駄目でした。高校の「マラソン大会」のときには遅れ気味の第二反抗期だったので、コースの後半は堂々と歩きとおしました。もちろん、「どんけつ」でした。内心、誇らしく思ったのを覚えています。

スポーツは「はかる」の世界ですね。記録は「はかる」ものですから当然です。私は、趣味として何かのスポーツをすることはありません。スポーツ観戦は積極的にはしません。テレビでたまに見るくらいです。

実際に試合や競技が行われている場に出向くことはありません。プロ野球、サッカー、ラグビーのスタジアムやフィールドにも行った経験が一度もないくらい、スポーツとは縁がないのです。高校三年の秋に、市内対抗の体育大会が催された多目的競技会場に、嫌々ながら応援のために連れて行かれたのが最後です。

はかる、くらべる、きそう、あさそう——。

＊

それにもかかわらず、スポーツ関係のノンフィクションを読むのが大好きなのです。特に山際淳司と沢木耕太郎が書いたスポーツものは、ある時期までほとんど目を通していました。ルールを知らない競技のものでもおもしろいというか、読んでいて快いので読みました。

いま挙げた二人の書き手の文章が好きだったということもあります。書く側としてのスタンスのとり方に共感を覚えました。スポーツはやらないけどスポーツについて書かれた文章は読むという癖は、小説や詩は読まないが文芸批評は読むとか、映画は観ないのに映画評を好んで読むという、もう一つの癖に似ている気がします。

山際淳司といえば、忘れられないことがあります。スポーツとはまったく関係がありませんが、おそらく私がいちばん好きな短編と呼んでいい作品があって、それを訳したのが山際淳司なのです。

＊

ピーター・キャメロンという米国人が書いた『ママがプールを洗う日』(原題は Memorial Day で戦没将兵追悼記念日のこと)という短編で、同名の短編集(原題は One Way or Another)に収められています。その短編が好きで好きでたまらなくて原書まで買い求めました。

その短編には、実母と義父——義父と言ってもかなり若い——に対して絶対に口をきかない少年が出てきて、その少年が一人称で語るという形式なのです。

少年は、一年前のまだ実父がいて親子三人で過ごした戦没将兵追悼記念日(五月の最

終月曜日)の回想をします。毎年この日になるとママがプールを洗って夏の用意をするのですが、今年は自分の兄にしか見みられない童顔で、じっさいにかなり年若い義父がいるという設定です。

自分がなぜ話さなくなったかについて少年はいっさい語りませんが、おそらく魅力的な母親と、新しい父親と、少年のあいだで、一種の三角関係が生じていることは十分推測できます。

この短編では、語り手の少年が、自分とまわりの人たちとのあいだ、そしてまわりの人たち同士のあいだ——あいだにある距離、重さ、濃淡、湿度——をはかっているようにも感じられます。

はかってもわからないままに作品は終わります。それでいいのだと思います。だから、私はこの小説に惹かれるのかもしれない。

\*

いまその作品の原書を手にして表紙を見ているのですが、タイトルの One Way or Another の上に絵があり、そこに描かれている赤いフレームの自転車が、よく見ると変なのです。前後にハンドルバーがあって(二つあるという意味です)、サドルがないのです。そんな自転車が、白い横羽目板の壁をバックに置かれています。

壁の左にはヒバに似た低木が茂っているのが見えます。絵の右側の隅には窓の端っこが描かれていて、その下に葉の多い枝が伸び、バラのような赤い花が二つ咲いています。そして例の奇妙な自転車の下には、白っぽいコンクリートか、石のボードを敷いたようにも見える小道があり、絵のいちばん下には芝生の緑が覗いています。

その絵も気に入っていて、よく眺めます。懐かしいのです。高校二年生の時に、二十日日間ほど米国を東部から南部にかけて旅行し、複数の家庭でホームステイをさせてもらったことがありました。そのうちの、ある家で見えた芝生のはえた庭とプールのある風景が鮮明な印象として残っていて、それが短編の描写と原著の絵と重なって思い出されます。



また、その短編に出てくる少年の心境が、当時の自分と重なって心が惹かれるのかもしれない。何度読み返したか分からない短編です。好きすぎて書き写したこともありました。

辞書には「あれやこれや、何とかして」という訳語のある言い回しですが、one way or another とは、「どっちの方向に行ったらいいのだろう」という不安定な気持ちのあらわれにも思えてきます。前にも後ろにもハンドルのある自転車の絵も、それに呼応して感じられます。確かに不安定な心理の人物ばかり出てくる短編集なのです。だから惹かれるのかもしれない。

表題作の『ママがプールを洗う日』のほかに、『ジャンプ・オア・ダイブ (Jump or Dive)』と『「白鳥の湖」からの抜粋 (Excerpts from Swan Lake)』がいいです。

訳文は、山際氏らしい、さらりとした文体（ひょっとすると下訳と呼ばれる本職の訳者がいて、それに山際氏が手を入れたのかもしれませんが）。乏しい英語力の者が言うのもおこがましいですが、原文を読むと言葉の選び方にウェットな趣が感じられます。

原文と翻訳のどちらを読んでも、うっとりとした気分になります。ストーリーよりシーンに重点をおいた作風が、永遠の時にいるような錯覚にいざなってくれる。そんな作品です。

この短編にはべつにオチはないので、大好きなラストを引用します。ようやく少年が言葉を発しようとするかに思われる瞬間です。

”水の音が突然止み、僕が顔を上げると、ママがこっちにやってくる。剥き出しの肘と膝がはてっている。ママは僕のそばに座ると、少しのあいだ何も言わない。僕は芝生の上で眠ってしまったふりをするんだけど、彼女は僕が寝ていないことくらいお見通しのはずだ。

(中略)

僕は座り直す。僕は本当に彼女の心が傷ついているのか確かめるように、彼女の胸を見つめる。左胸に小さなブルーの鯨のワンポイントが入ったポロシャツを着ている。僕はママの顔を見るのが、怖い。

僕らがそんなふうにしてしばらくの間座っていると、闇は更に深くなっていく。僕が喋ろうとすると、ママが横から手を伸ばしてきて、僕の口をふさぐ。

僕は彼女を見つめる。  
 「待って」と彼女は言う。「まだ何も言わないで」  
 僕は唇でママの肌を感じている。ママの腕のあたりから塩素の匂いがたちこめている。  
 蛍が僕らの回りを照らして、僕は気が遠くなっていく。”  
 (『ママがプールを洗う日』ピーター・キャメロン著・山際淳司訳・ちくま文庫 pp.17-18)

”Then I hear it stop, and I look up to see my mother walking toward me, the skin on her bare legs and arms glowing. She sits down beside me, and for a while she says nothing. I pretend I am asleep on the ground, although I know she knows I am awake.  
 [...]

I sit up. I look at my mother’s chest, as if I could see her heart breaking. She has on a polo shirt with a little blue whale on her left breast. I am afraid to look at her face.

We sit like that for a while, and darkness grows around us. When I open my mouth to speak, my mother uncoils her arm from her side and covers my mouth with her had.

I look at her.

“Wait,” she says. “Don’t say anything yet.”

I can feel her flesh against my lips. Her wrist smells of chlorine. The fireflies, lighting all around us, makes me dizzy.”

(“Memorial Day” in “One Way or Another” by Peter Cameron pp.7-8 (Perennial Library, Harper & Row))

こうやって比べると、日本語と英語では別の作品に思えます。とりわけストーリーよりも情景を重視した短編は詩のようで、それぞれの言語の言葉たちがダイレクトに響いてきます。

山際訳を読んでいて原文が浮かぶことはありません。その逆も同じです。それにしても、「僕は気が遠くなっていく」——私だと、dizzy からこの言葉は出てきません——はいいなあ。これまでに何度も頭の中で描いてきた、このラストシーンのイメージが好きです。

\*

道草をしてしまいました。とりとめのない書き方で、とりとめのないことを書いています。私の文章は、いつもこんな調子なのです。ごめんなさい。

テーマは、「はかる」と「わかる」でしたね。

原文と山際訳をくらべて、わかったり、わけたり、はかったりしたわけですが、やはり別の作品に思えます。というか、感動を前にすると、わかることも、わかることも、はかることも空しいです。

こじつけ——こじつける、何でもかんでもつないでしまう、というのも、私の記事の常套手段です——になってしまいますが、たったいま紹介した短編は、語っている「現在の思い」と回想されている「過去の思い」とが重なって「現在でも過去でもない思い」となったような感じをいだかせる、やや「重い・多重的」で「厚い・多層的」な作りになっています。

でも、誤解しないでください。この『ママがプールを洗う日』という短編ではテーマや書き方は全然重くはありません。もちろん、作品の受けとめ方は、人それぞれですけど。

もう、こうなったら、ずれまくりですけど、「読む」という行為は、「わかる」だけでなく「はかる」とも近いようにも、また「わかる」と「はかる」とが「読む」において重なっているようにも思われます。

さらに言うなら、「スポーツをする」にも「スポーツを見る・観る」においても、「わかる」と「はかる」が共に重要な役割を果たしている気がします。そんなことについて、考えてみたいです。

＊

そう言えば、以前「わかる」について「かわる」とからめて考え、記事にしたことがあります。いや「かわる」の話が「わかる」へと転じたのかもしれませんが。私の中ではどちらも同じなのです。

かわるとわかる【引用の織物】- 星野廉のブログ

＊「かわる」がわかる ＊「わかる」の表記＊「わかる」と「かわる」のシンクロ＊「わかる」と「かわる」のシンクロを体で演じ

[horensou.hatenadiary.com](http://horensou.hatenadiary.com)

スリリングでおもしろい体験でした。「はかる」に関しても、やはり「わかる」と「かわる」がかかわってくる気がします。

はかるとわかる、はかるはわかる。

はかるとかわる、はかるはかわる。

one way or another

こういうことについて、またいつか何か書いてみようと思っています。思いは尽きません。

#小説# 連作# 言葉# 連想# 日本語# 英語# 翻訳# 読書# ピーター・キャメロン  
# 山際淳司

09/14 動くものを手なずける



＊

## 動くものを手なずける

星野廉

2022年9月14日 15:27

動詞は、揺らぎとブレを指向します。固定や安定を横目に（見てないわけではありません）、ぶらぶらふらふらします。動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。

（拙文「名詞的なもの、動詞的なもの」より）

目次

### 動きを記述する

人類はずっと呪術の世界に生きている

動く、動かない、動いていることにする

自分は動かないのに動く

自分が動くことで動かないものを動かす

「名詞」はヒトの頭の中だけにある抽象ではないか

万物流転

動いているものの代わりをしている動いていないもの

ストーリーとドラマを喚起する絵

動きを誘いだす仕組みとしてのストーリー

まとめ

### 動きを記述する

動きを記述するのが困難なのは、そもそも動きは固定化できるものではないからです。「動いているもの」が「固定している」つまり「動いていない」なんて変ですよ。無理があるわけです。土台無理なのであり無理難題なのです。私は論理的という言葉が好きではないので、非論理的だとは言いませんけど。

動きを静止画として表したものが写真（絵でもいいですけど、上手い下手があります）です。動きを撮影したものが動画です。映画では、静止画をコマ送りすることで動いていると錯覚させるそうです。コマ送りが細分化されているほど滑らかな動きに見えるんですけどっけ？ 詳しいことは知りません。

こうしたことについてはいろいろな分野の人がいろいろなことを書いているにちがいません。私はだんだん本を読むのがつらくなってきているので、自分で考えてでっちあげることになります。そのほうが楽しいからです。苦しいとか苦しむのは嫌です。この歳だと体が持ちません。

＊

動きを表すのに適した表現形式は何でしょう？ 映画や動画かもしれませんが、必ずしもそうとは言えない気がします。確かに映画や動画を見ているその時点ではそれなりの臨場感やリアリティがあって見ている人は感動するでしょうが、その場かぎりなものです。

それを見た記憶がずっと残るわけではないという意味です。そもそも人の知覚や認知機能や記憶は動きを処理するのに適していないからでしょう。いずれにせよ、映画や動画を見た体験が、その人の記憶や思い出として残り、動きがその後も繰り返され再現あるいは再演されるかどうかは興味深いです。

話し言葉や書き言葉や表情や身振りは動きを表現するのに限界があるのは当然です。動きそのものではなく、動きを置き換えたものだからです。動きの代わりに動きではないもので済まして澄ましているわけですが、置き換えたという状況は変わりません。

＊

映画であれ、動画であれ、VRであれ、メタバースであれ、それを見た時点でどんなに臨場感があっても、その記憶がそのままずっと残るわけではありません。一時的な記憶は墓場に持って行けないし、その前の段階である死に際でさえ、そっくりそのまま思い出せないのではないのでしょうか。

これ以上は、おそらく「あの世」とか「来世」とか「輪廻」の話になるはずですが、人



の欲は限りないもので、悟りとか、来世とか、はたまた生まれ変わるなんて贅沢なことを考えるし欲します。

要するに、人は自分が亡くなった（無くなった）のちも、動いていたいのです。動きを記述したいという人の心理は、つまりは永遠に動いていたいという欲求ではないか。そんな気がします。

## 人類はずっと呪術の世界に生きている

要は、再現性、再演性ではないでしょうか。つまり、動きがどれだけリアルに再現あるいは再演されるかです。どこでって、ヒトの頭の中での話です。リアルかどうかという印象が大切なようです。印象は錯覚と近いところにあります。主観（的）という言葉をあててもいいでしょう。

動きを映し、それがなぞるという形で写され、さらには「何か」として自分（正確には自分の頭でしょう）に移ることができれば、ヒトが満足できるという意味での高度な再現性や再演性が生みだされるのではないのでしょうか。くどいですが、ヒトの頭や心や思いの中での話です。

いま流行っている、または流行る気配を見せている、仮想現実とか仮想幻術（そんなものないか）とか、メタバースといったものも、ヒトの頭の中にどう働きかけるかが最大の問題となっているようです。

＊

人類はいまだに呪術の世界に生きていると感じられてなりません。否定しているのではありません。否定することは自分を否定することになると思うくらい、私もどっぷりと呪術の世界に浸かって生きています。

インクの染みを見てそれに似ても似つかぬものを読んでいる、画素の集まりを見てそれとは別のもを見ている、大切な人の写真を踏めない時点で、呪術にはまっているのです。これは恥ずべきことでも、憂うべきことでもありません。人類から呪術を取ったら何が残るのでしょうか。

動きをヒトの中で誘いだす、つまりイメージを喚起することが大切だという気がします（催眠術や語りや騙りの延長上にあります）。これは再現ではなく、繰り返すたびに異なったズレやブレや変奏が生じる再演でしょう。ヒトがすることですから、再現は努力目標でしかありえません。

なお、人類にとって呪術の究極的な願いは不死でしょう。その願いのあらわれの一つが、動きを手なずけることだと思えてなりません。

### 動く、動かない、動いていることにする

「映る、写る、移る」と「映す、写す、移す」においては、動きとか波（振動）が大きな役割を演じている気がします。

「動き」は自然の状態であり常態であると思います。とはいえ、人は「動き」を見たり知覚したとしても、それを言葉にする以外に他の人と「動き」について語りあうことはできません。言葉という形で外に出さない限り、他人といっしょに確認できないからです。自分の中で思うだけという意味です。

残念ながら、言葉、とりわけ話し言葉（音声）と書き言葉（文字）は「動き」を表す、つまり置き換えるには適した素材ではないようです。音声も文字も固定化を目指すからです。というか、人は固定しないと動きをとらえられないからだとも言えそうです。

映画が静止画をコマ送りして、動いているという錯覚に頼っていることを思い出しましょう。

動きだけではなく、ヒトは事物の全体も空間的にも時間的にもとらえられません。無限に生きられないからであり、限界のある知覚機能と認知機能をもちいて世界をとらえているからです。

全体の代わりに部分で済まして澄ましている。

手の届かないものの代わりに手の届くもので済まして澄ましている。

このように置き換える（すり替えるでもいいです）ことによって、ヒトは「代替りのもの（別物という意味です）」を「実物や本物」としてとらえるという錯覚に頼るという妙案を利用していると言えそうです。

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている。（たとえば、静止した画面上で動いて見える像を見ている。動いて見えるだけなのです。）

というわけです。「動いているものの代わりにしている動いていないもの」を人はたくさん考えだしたり、じっさいに作っているようですが、動詞もそのひとつでしょう。

### 自分は動かないのに動く

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている——。この変種があります。

自分は動かないのに動く——。です。言葉にすると不思議なことのようにですが、ぜんぜん不思議ではなく、誰もが日常的に経験しています。乗り物がそうです。地球もそうです。

自分は動かないのに動いた気持ちになる——。これは映画であり、電話であり、テレビであり、パソコンであり、スマホであり、仮想現実なのですが、その芽は、話（実話、夢語り、作り話、ほら話、昔話を含みます）を聞く、絵（落書きとそれ以降のすべての絵）を見るに、すでにあったのであり、いま始まったことではありません。

もちろん、手紙やメモやお経や経典や聖典といった書かれたものを読んでもらったり（読み書きが誰もができるものではなかった時代は長いと言われます）、自分で読んだりすることも、そうでしょう。

人の意識（脳でもいいです）は乗り物に乗って動くしかないのかもしれませんが。もちろん、体も乗り物です。ここではそういう話をしています。

本気に取らないでくださいね。そもそも、こういう話は本気でするものではありません。

### 自分が動くことで動かないものを動かす

自分は動かないのに動く——。これによく似たというか、逆に思われることがあります。

自分が動くことで動かないものを動かす——。漢文のことです。

大陸から持ってきた異物である漢字からなる文章を、列島にある言葉が迎えた。想像するとぞくぞくします。ここからは学校（小学校から高校までです）で習ったことの記憶を頼りに想像します。

文字のなかった列島で話されていた言葉で、文字という異物からなる文字列を読めるようにしたらしいのです。漢文の素読をイメージしているのですが、具体的にどんなことをしたのかは知りません。勝手に想像というか、空想します。

漢字からなる文字列を動かさないで、自分が動いて読んだらしいのです。上から下という順で書かれている文字を、目を上下に何度も動かしたりして、列島で話されていた言葉で読めるような工夫をしたのは、バイリンガルだったにちがいありません。

しかもエリートでしょう。ごく一握りの文字どおり頭のいい人たちだったと想像できます。頭がいいというのは、記憶容量が大きく、情報の処理が素速いという意味です。直感力（直観力）や洞察力にも優れていたにちがいありません。

自分が動く、つまり自分の目を上下に動かす（おそらく同時に頭の中と体でなぞる）ことで、動かないものを動かす（もちろんそう思い込むのですが）ことに成功したのです。

「動かないものを動かす」とは、自分の頭の中で起きていることにほかなりません。大陸

にあった文字が列島にあった言葉に移ったとも言えそうです。外にあるもの（文字）をなぞって、自分の中（思い）でなぞることにより、移った（おそらく話し言葉から書き言葉へ移行していった、つまり漢字を和語として読み下して読む過程でひらがなやカタカナを作っていた）のです。

異物を手なづけ、飼いならしたとも言えるでしょう。こう考えるとすごい話です。

「自分が動くことで動かないものを動かす」とは、漢文だけでなく、人の知覚と認知のあり方のことではないかなんて大風呂敷を広げたくくなります。でも、そうじゃないでしょうか。動かないものを目で追って、それが動いていると感じる、言い換えると「ない」を「ある」にするのは、赤ちゃんがふつうにやっていることではないでしょうか。つまり、赤ちゃんに限らず私たちがふつうにやっていることではないでしょうか。

人は「ない」を「ある」として生きているのです。言い換えると、人は世界という、自分の思いどおりに「動かない」異物（怪物でもいいです）を「自分が動く」（たぶん体と頭の中で動いてなぞる、です）ことで手なづけ、飼いならしている、つまり自分の思いどおりに「動かしている」つもりになっているのであり、それが人として生きることだという気がします。

かなり脱線してきたので、話をもどします。

### 「名詞」はヒトの頭の中だけにある抽象ではないか

「動詞」は自然の状態であり常態であると思います。「名詞」に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は「動詞的なもの」に満ちている気がします。

「動詞」も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、「動詞」の向いている方向は、「名詞」の抽象性とは異なる気がします。

比喩的に言うと具体的な動きを誘いだす「動詞」はずとんと腑に落ちます。繰り返しの言い方になりますが、「動詞」が動きを指向するからでしょう。

「動き」がすっと腑に落ちるとするのは、話し言葉や書き言葉を知らない（学んでいない）赤ちゃんが、表情や動きに注目して、それを目でなぞり、おそらく自分の中でなぞったり、あるいはじっさいにその動きを真似て演じることを思いだすと分かりやすいかもしれません。

私はおとなだ、赤ちゃんではない、とおっしゃる人が多いと思いますが、人は赤ちゃんを卒業することはできないのです。赤ちゃんを続けながら、おとなになるという気がします。

＊

一方の、「名詞」は「頭で理解する」（比喻です）感じで、不自然なのです。動きよりも固定を指向するからではないでしょうか。自然界には固定を指向するものは存在しない気がします。いわゆる万物流転です。固定は抽象（ここではヒトの頭の中にしかないものという意味です、というか抽象とはきわめて人間的なものなのです）ではないでしょうか。

つまり、「名詞」はヒトの頭の中だけにある抽象ではないでしょうか。

あらゆるものが、動いているのです。ただその動きがヒトの知覚機能を超えている場合には、当然のことながらヒトには察知できないということでしょう。

そういう知覚できないものを、ヒトは器械や機械や器具をもちいて知覚できるような工夫をしています（いわゆる視覚化とか「見える化」とかシミュレーションがそうです）、それが完全であったり万全であるという保証はないわけです。

私はこういう状況を隔靴搔痒の遠隔操作と呼んでいます。簡単に言うと、「手に届かないもの」の代わりに「手に届くもの」で済ませて澄ましているという意味です。「そのもの（本物や実物）」には到達できないから、とりあえず「代わり（代理や似たものや似せたものや偽物、要するに別物）」を相手にしているのです。

写真に写っているものはそのものではないし、言葉は言葉が名指している事物ではないし、目の網膜に映っているものはそのものではない、と言えば分かりやすいかもしれ

ません。

## 万物流転

話を「あらゆるものが、動いている」にもどします。

よく考えると、身のまわりのすべてのものが移動してここにあるわけです。それに、いつまでもここにあるわけではありません。「ここ」にある「これ」は、以前は「こう」ではなかったし、「どこか」にあったはずです。万物流転。万物動転。気も動転。びっくり仰天。はあ。ため息が漏れました。すべての物が長い目で見れば動いているのですね。

## 動いているものの代わりをしている動いていないもの

全体の代わりに部分で済まして澄ましている。

手の届かないものの代わりに手の届くもので済まして澄ましている。

このように置き換える（すり替えるでもいいです）ことによって、ヒトは「代替のもの（別物という意味です）」を「実物や本物」としてとらえるという錯覚に頼るという妙案を利用していると言えそうですが、もう一つ、例文を加えてみます。

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている。（たとえば、静止した画面上で動いて見える像を見ている状態。動いて見えるだけなのです。）

というわけです。「動いているものの代わりをしている動いていないもの」を人はたくさん考えだしたり、じっさいに作っているようですが、動詞もそのひとつでしょう。

## ストーリーとドラマを喚起する絵

「動いているものの代わりをしている動いていないもの」を具体的に見ていきましょう。

いきなり映画とかテレビに行く前に、たくさんのそうした仕組みや仕掛けや物があっ

たと考えられます。

洞穴の壁に描かれた絵とか、地面に木の枝で描いた絵を想像してみましょう。

こういう絵は「動いている」のです。静止画であっても、人はそうした絵を見ながら、あるいは描きながらストーリーを口にするはずですよ。

「このシカはね、きのう、あの山のそばにある川で水を飲んでいるところを、うちの息子たちが矢じりで射止めたんだよ。すごく手間がかかってねえ。……」

「こんなものを沼の向こうの谷で見かけたよ。とにかくでかいんだ。人の大きさがこれくらい。……」

「夢でこんな形のいかだに乗った生き物に会った。顔は魚、体はサル、足はカエルみたいにひれがあったよ。こういうふう……。……」

「これが、死んだおじいちゃんから聞いた話を絵にしたもの。絵はぜんぶで二十あるから順番に見て行ってね」

「いいかい。葬式の段取りを順番を追って描いていくからね。長いけど、これを消さずに残しておくんだよ」

こんな具合にです。絵の上手な人や記憶力のいい人が尊敬されそうです。そういう人が芸術家の走りとか語り部（長い長い叙事詩を朗々と語る人をイメージしてください、あと話のうまい人とか、どこかで聞いてきた話をうまく語る人です、読み書きは必ずしもできなくてもよかったのです、強いて言えば後の物語作家とか作家のことです）だったのではないのでしょうか。

### 動きを誘いだす仕組みとしてのストーリー

つまり絵（視覚的イメージ）とともにストーリー（言葉）を語ることで、動きを誘い



だしているのです。自分と、その絵を見ている人たちの中にです。中というのは、体と頭だという気がします。動きが自分の中に移ってきて、体の中で「なぞる」という感じですが、同時に頭の中でも「なぞる」ように思えます。

このように絵と言葉（口承）が結びついていた時代が長かったと想像するのが適切ではないでしょうか。

絵は動きを喚起する装置だと言えるでしょう。どんな絵もそうでしょう。落書き、絵、イラスト、漫画、アニメ、映画、動画。描く、写す、撮影する、作るの差は程度の差であり、決定的な違いだとは考えられません。

大切なことは、ヒトの作った絵には、ストーリーとドラマがあるのです。ストーリーとドラマはたいてい言葉——話し言葉と表情と身振り（文字はずっと後のことでしょう）——として発せられる点が重要です。

広義の絵と言葉が不可分であるのは、現在も美術の世界で絵画をめぐるおびただしい言葉（ストーリーやドラマや感想や批評や解釈という形で）が語られているのを思いだせばお分かりいただけると思います。映画、漫画、アニメ、動画もそうです。

ストーリーとドラマは動きです。広い意味でのプレイ (play)、つまり演技、演劇、ドラマ、遊戯、演奏、競技、パフォーマンスがつまっているとも言える気がします。

だから、わくわくするのはです。ときどきもするのはです。ぞくぞく、あらら、という感じ。そのために作られているのですから当然と言えば当然でしょう。

以上のように考えると、ヒトは動くものを手なずけたと言えそうです。そういうことにして、人類に花を持たせようではありませんか。私も人類の端くれです。

ヒトは動くものを手なずけた。ただし、その底には錯覚、遠隔操作、イメージの喚起（つまり想像、空想、妄想、幻想、幻覚）があることを忘れてはならないでしょう。

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている——。この状況はビクともしていないのです。

## まとめ

動きからなる世界を、言葉はすくえないし既述できないのではないのでしょうか。言葉はつねに遅れます。追いつけないのです。ヒトの知覚と認知機能にとって、世界を「見る」とか「触れる」なんて荷が重すぎるから当然と言えば当然でしょう。

固定化を指向する言葉、とりわけ名詞（動詞も固定化した使い方をすると名詞と変わらない気がしますが、これについては別の記事に書きます）の不自然さと無謀は目に見えているというべきでしょうか。とはいえ、世界を固定化したいという夢が与える高揚感と、そうした固定化を錯覚させる言葉（とりわけ名詞）の魅力にヒトは勝てそうもありません。気持ちがいいほうに流れるのが人情というものです。

#動詞 # 名詞 # ストーリー # ドラマ # 絵 # 言葉 # 話し言葉 # 書き言葉# 文字 # 表情  
# 身振り

09/15 「AとB」での主役は「と」なのです



＊

「AとB」での主役は「と」なのです

星野廉

2022年9月15日 07:48

「AとB」と書いてあると、AとBのあいだに何らかの関係を見てしまいます。さもなければ、「と」で結ばれているはずがない気がするからでしょう。

ロミオとジュリエット、ピンクとグレー、『男と女』(Un homme et une femme)、女と男、Ebony and Ivory、存在と無、存在と時間、ハリー・ポッターと賢者の石、蜜蜂と遠雷、北風と太陽、点と線、美女と野獣、老人と海、スクラップ・アンド・ビルド、トムとジェリー

どこかで見聞きしたペアだと、そのペアが何であったかで決まる気がしますが、それでも分からない気がする場合もあります。「存在と時間、点と線って、どういう関係かな？」と考えこむ人もいそうです。

私とあなた、猫と犬、山と川、かわいいとうつくしい、砂糖と胡椒、火曜と金曜、歌うと読む、ペンとスマホ、数学と書道、アメリカと平安時代、鍵と砂時計、青と化石、寝台の上の蝙蝠傘と谷間の百合、ジル・ドゥルーズと蓮實重彦

何だかなぞなぞみたいにも、ほのめかしや詩のようにも感じられるものがあります。意味深というやつです。シュールなギャグに感じられるフレーズもありますね。

ところで、思わせぶりの「と」には気をつけましょう。何の関係性も示していない「と」がときどきあります。詩や哲学にありそうな気がします。どちらにも疎いのでよくは知らないのですけど。あと、このアカウントにもたくさんあります。要注意です。

なお、「と」をめぐるの、この辺の話は、蓮實重彦先生経由ジル・ドゥルーズ先生のご意見を参考にしています。（※詳しくは、拙文「ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その5）【引用の織物】」の冒頭をお読みください。）

＊

「と」はつなげます。「つなげる」のはいいのですが、どういう具合につながっているのかは、きわめて「曖昧＝テキトー＝あんまり考えていない」場合が多いですよね。結論から申しますと、

＊「AとB」に真ん中にある「と」は、「何でもありー」だ。

さらに、

＊つなげてみないとわからない

＊つなげてみてもよくわからない

と言えそうなんです。

だから、

＊眺めているしかない

とも言えそうです。ああでもないこうでもない、ああだこうだと言いながら、関係を考えるのです。

関係とは印象だからです。この場合には、抽象と言っても大差ありません。

＊

関係といっても漠然としていますから、具体的に見てみましょう。

まず反対のようなペアです。

大と小・マクロとミクロ・無限と有限・絶対と相対・SとM・もうとまだ・多いと少ない・ポジティブとネガティブ・白と黒・裏と表

次に、動きや状態に注目しましょう。AとBがどうなのかという話です。

引き寄せ合う・反発し合う・シンクロする・矛盾する・くっ付いたり離れたりする・まじり合う

似ている・同じである・異なっている・結ばれている・からみ合っている・重なる・仲がいい・入れ子構造・表裏一体

ずばり「○○関係」だと分かりやすいかもしれません。

相関関係・因果関係・三角関係・ねじれた関係・あやしい関係・くさい関係・不倫関係・主従関係・親戚関係・競合関係・無関係

\*

いろいろなAとBの関係が考えられますね。こうした関係は固定していなくて、流動的である場合も想像できます。彼女と彼は、十年前は夫婦ただただけれど、いまは雇い主とアルバイトの関係で、友達同士でもあり、きのうは不倫関係、きょうはきわめて険悪な関係、現時点では重なりあっている、なんてありえますよね。

思うのですが、「AとB」では、AとBは刺身のつまで、「と」こそが主役ではないでしょうか。

ロミオとジュリエット、ピンクとグレー、『男と女』(Un homme et une femme)、女と男、Ebony and Ivory、存在と無、存在と時間、ハリー・ポッターと賢者の石、蜜蜂と遠雷、北風と太陽、点と線、美女と野獣、老人と海、スクラップ・アンド・ビルド、トムとジェリー

たとえば、上のペアでは「と」で結ばれている両者がどんな関係であるかが問題であって、両者は別の両者でもいいわけです。

試しに「ロミオとジェリー」としてみましよう。「ロミオとジュリエット」や「トムとジェリー」とは別の関係が生まれました。「ジュリエットとトム」でも同じことが起きるでしょう。

＊

「と」ってすごいじゃないですか。「と」自体には意味はないようできて、二つの言葉を「つなぐ」という働きがあるのです。

「AとB」と書かれれば「と」は刺身のつまみたいに見えます。でも、この「つなぐ」という働きはほかの言葉にはない気がします。

「と」というごく短い言葉によって、関係性が立ちあられるのです。これを奇跡と言わずに何と言えればいいのでしょうか。言葉が魔法に感じられます。

「と」は助詞と呼ばれてもいますね。助手とかアシスタントみたいじゃないですか。大きな働きをしているのにかわいそうだと思います。

声を大にして言いたいです。

「AとB」での主役は「と」なのです、と。

#ジル・ドゥルーズ # 蓮實重彦 # 助詞



09/15 レトリックだけでなりたっているような  
文章



＊

レトリックだけでなりたっているような文章

星野廉

2022年9月15日 11:33

目次

\*\*タイトルを決める

活用を活用して書く

動くために動くを使う

外国語に翻訳できないような文章

レトリックだけでなりたっているような文章

レトリック詞集

＊イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。

＊書いても書いても書いてははいない。

＊分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

＊映る、写る、移る

＊記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

＊この符合、符号、付合は、只事ではない。

＊そっくりなところがそっくり

＊(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。

＊あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。

＊「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまう

＊写す、映す、移す、撮すと言うより

＊playerではなく prayer であるべきなのに。

＊指す、差す、刺す、射す、挿す

＊「あなた」＝「I love you. (only you)」＋「I miss you. (without you)」説

＊なぞるをなぞる。

＊ことのはに さきだつひと

最後に\*\*

## タイトルを決める

動くものを手なずける

昨日に投稿した記事のタイトルです。私の記事には動詞が目立つと言われたことがありますが、それは意識してやっていることなのです。

動きを懐柔する。運動をとらえる。運動を固定する。運動を固定化する。動きを記述する。

「動くものを手なずける」の代わりに、こんなタイトルでもよかったと言えますが、あえてそうはしませんでした。「動く」と「手なずける」をどうしても使いたかったのです。

動くを手なずける。「動く」を手なずける。「動く」を記述する。

この二つも候補だったのですが、「動くものを手なずける」に落ちつきました。

## 活用を活用して書く

そんなことで悩んでいたのですが、わざわざ舞台裏をお話ししたのは、まさにそういうことを、今回は書きたいからにほかなりません。ややこしくてごめんなさい。

私は考えたり書いたりするときには、動詞とか用言に導かれることが多いようです。いま用言という言葉を使いましたが、私は文法用語には疎いです。英文法は好きでしたが、日本語の文法が苦手でした。なんだがぴんと来なかったからだと思います。

いま辞書で用言と体言を調べてみましたが、大きな違いは用言は活用して、体言は活用しないということみたいです。これなのです。私が動詞に惹かれるのは。

簡単な例を挙げます。

愛。これは名詞です。中国語ではどうなのかは知りません。日本語での話です。

愛する。これは動詞と見なしていいでしょう。

愛——。私の中では、これで終りになります。思考停止におちいるのです。「愛なの」「そうですか」、「愛である」「ははあ」、「愛です」「あ、はい」という感じです。

愛する——。えっ？ 誰が何を？ 何が何を？ 誰が誰を？ いつ？ どこで？ どうやって？ 愛さない。愛せない。愛せば。愛しちゃったのよ。愛してる。愛していた。愛するだろう。愛していいですか？ 愛していないんですか？

動詞だとどんどん活用というか、頭の中で「愛する」が変化していくのです。ひとさまのことは知りません。こんなことを話す相手がないのです。今回初めてこんな話をしています。

ちなみに、この記事は小説です。正確なタイトルは「【小説】レトリックだけでなりたっているような文章」です。私は研究者でも探求者でもありません。「小説」とすると言いたいことが自由に言えるので、このところ味を占めてやっています。

記事は楽しく書きたいものです。

### 動くために動くを使う

要するに、私は動詞を使うことで思考停止を避けているみたいです。名詞ばかりを使っていると、考えられないし、書けないと言えるでしょう。ひとさまのことは知りません。知りたいともあまり思いません。自分の世話で精一杯なのです。

そんなわけで、私の書く文章には動詞や用言がよく出てきます。活用する用言に助けってもらって書いているのです。活用を活用するというか。

\*

His love of dogs led him to the hatred of people.

イヌへの愛が彼を人間への憎悪へと導いた。

イヌを愛する気持ちが彼を人間嫌いにした。

イヌを愛する気持ちが高じて、彼は人間嫌いになった。

イヌを愛するあまり、彼は人間を憎むようになった。

自作のぎこちない英文を自分なりに日本語にしてみたのですが、いわゆる「直訳」から「こなれた訳」へと変わっていく過程が分かるのではないのでしょうか。私はかつて翻訳家をめざしていたのですが、上のような訳の違いをいろいろな先生から教えてもらいました。

名詞構文とか動詞構文なんて言葉を使って説明する先生もいた記憶があります。要は、英語は名詞構文が多いから日本語では動詞的に訳せ、ということでした。そのほうが日本語としてこなれているとか、分かりやすいからだと教わりました。いま考えるといかにもいかがわしい説明です。

そうした訓練が、いまになって私の書く文章に表れているのかもしれませんが。いずれにせよ、原文があってそれを読みやすい日本語にするような練習をしていたのです。現在の私の文章が読みやすかったり分かりやすいかはまったくの別問題ですけど。

＊

私にとって考えるとは、言葉を動かすことのようにです。動詞でも名詞でも、どんな言葉でもです。言葉をいじると言ってもいいかもしれません。人が何をどう考えているかは、人の中で起きていることですから、確認できません。自分でも確認できないし、他人といっしょに確認することもかなわないという意味です。

思いは言葉という形で出してみても、はじめて確認できます。言葉は、外にあるのです。

外にある言葉は聞こえるし見えます。ただ、意味を取ろうとした瞬間に、言葉は見えなくなり聞こえなくなります。人の中に入るからでしょう。中にあるものを言葉と呼ぶ勇氣は私にはありません。

(言葉が人の中に入ったと考えたとき、その言葉がどうなっているのか、不思議でなりません。確認できないという意味で、中の「外」というふうにイメージしています。ブラックボックスというか、分かりようがないという意味です。)

「言葉らしきもの」が、目に見え、聞こえ、場合によっては触れることができる場合に、私はそれを言葉と呼びます。見えない、聞こえない、触れることができないものを、私は抽象だとしか考えていません。

抽象は動かさせません。

＊

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉のことです。

いま引用したのは、私はよく使う文章です。ちょっといじってみます。

誕生の時点で既に存在するもの。常時、人の外部に存在し（外在し）、それでいて時に人間の内部へと出入りし、思惑に抵抗するという意味で、人にとって「外部」であるもの——。言葉のことである。

このいじった文は自分では絶対に書かないものなのですが、動詞よりも名詞を使うことに加えて、もう一つ特徴があります。あえて漢語を使っているのです。

私はできるだけ、いわゆる大和言葉、つまり和語を使うようにしていますが、これは名詞を避けて動詞を使うことと深くつながっています。いま思えば、大和言葉をなるべく用いるようにと言われていたのも翻訳を修業していたころでした。

誕生の時点で既に存在するもの。常時、人の外部に存在し（外在し）、それでいて時に人間の内部へと出入りし、思惑に抵抗するという意味で、人にとって「外部」であるもの——。言語のことである。

太文字にしたのが漢語的な言い回しです。私は漢語の多いこの手の文章が苦手で、頭

に入って来ません。どうしても読まなければならないものは、自分なりに和語の多い文章に「翻訳」します。日本語を日本語に訳すのですが、これは冗談でもレトリックでもありません。

長い引用になりますが、最近の記事から取った以下の文章をざっとご覧ください。

\*

「わかる」と「はかる」は字面と発音が似ていますが、「わかる」にくらべて、「はかる」はあまり考えたことがありません。でも、身のまわりを見ると「わかる」だけでなく「はかる」が多いのに驚きます。

とくに、病気になったり老いると「はかる」を意識するようになります。病院に行くとわかりますが、検査は「はかる」のデパートです。「はかる」をたくさんして、その結果が「わかる」というわけです。尿検査だけでも、たくさんの「はかる」があり「わかる」があるようです。結果の項目（リスト）を見るとわかります。

それにいまは、家でも毎日体温を測っています。はかればわかって安心するわけです。いや、「はかる」の結果をわかりたくないと思うときが、ままありますね。気が滅入りそうなので、思い出話をします。

いまになって思うと、学校という場所は「はかる」と「わかる」に満ちあふれていました。そもそも、学校は「わかる」と「はかる」に二分されると言ってもいいのではないのでしょうか。

なにしろ、はかるとわかる、はかるはわかる、なのです。恐ろしいことですが、「はかる」は、ほんわかとした、いいこと尽くめではないのです。

(拙文「「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる」より)

\*

上の文章では、「はかる」と「わかる」という表記をしています。和語をひらがなにし



ているのは意識してのことで、もしそうした表記をしなかったら、上の文章は絶対に書けなかつたらうと思います。

### 外国語に翻訳できないような文章

ところで、上の文章を、たとえば英語に翻訳することは可能でしょうか？　いま考えていたのですが、私にはできそうもありません。

逐語訳（極端な言い方をすると、原文と訳文をできるだけ一対一に対応させる直訳みたいなもの）は無理でしょう。解説を訳文に混ぜるとか、註を付けば、できそうです。

ま、そんな奇特な人はいないでしょうけど……。

必死にかく、もがき、あがくのです。書いても書いても「欠く」しかない世界。圧倒的に言葉は足りないし、見る果てがないし、きるにも切りがないし、分けても分からない。それが「ありえない」なのです。

（たとえば、いま書いた文章はレトリックだけでなりたっている書き方をめざして書きました。書かれていても何も言っていないのです。ひとり受けギャグの世界に似ていませんか？　また、この書き方には外国語に翻訳するのがきわめて難しいという特徴があります。翻訳する人などいませんけど。）

（拙文「ありえない文章」より）

こうした書き方を、用言体とか「ありえない文章」と呼んでいたこともあります。私にとってオブセッションのようです。

### レトリックだけでなりたっているような文章

たとえば、レトリックだけでなりたっているような文章、これを「レトリック詞」（私は詩が書けないので、詩ではなく詞です、当初はナンセンス詞とするつもりでした……）と勝手に名付けたいと思います。

これはどんなものなのかと言いますと、上で述べたことの繰り返しかえしになりますが、たとえば解説をしたり註を付けないかぎり、外国語に翻訳するのがほぼ不能な書き方を

目指します。「勝手に目指せば？」ですよね。我ながらアホなことを目指していると思います。

ひとつだけ言い訳をさせてください。「レトリック詞」は、学生時代にフランス文学（そして現代思想）を勉強していた自分としての総決算なのです。なぜなのかと言いますと、私がいろいろなことを学んだフランスの作家や詩人や思想家の中に、日本語（あるいはフランス語以外の言語）に翻訳するのが不能であるような書き方をしていた人たちが少なからずいたからなのです。

ミシェル・フーコーとジル・ドゥルーズにくらべると、日本語を母語とする者にとっては体感しにくいお話を語る人だという印象を、デリダについてはいただいています。

落語を聞いていて、あるいは海外のコメディ映画を見ていて、どこで笑えばいいのか分からないというのに似ています。「笑うべきところ」を解説をしてもらったとしても、笑いが自然と湧いてくるわけではないのです。

（拙文「【小説】音の名前、文字の名前、捨てられた名前たち」より）

私は、いわばオマージュとして、その人たちの書いた文章の言葉の身振りを母語でなぞりたいのです。たとえば、日本語でデリダする、フーコーする、ドゥルーズする、バルトするというふうに……。いま思わず笑ってしまいました。無知から来る無恥は、まことに恐ろしいものです。鞭で自分をぺんぺんしたくなりました。

私がそうした人たちの足元にもおよばないことは重々承知しておりますが、だからこそ、アホと呼ばれてもいいから死ぬ前にやっておきたいなあ、と思っている次第なのです。じつのところ、アホでなければ、こんな荒唐無稽なことは言えません。

こういうありえない夢があるかぎり書きつづけることができるのだとすれば、この夢が終わらないでほしいです。この夢の中で、ありえない文章をひたすら書くしかない。（……）

終りなど考えないで、めざしているのが蜃気楼であると意識しながら、ただ歩くしかない旅なのかとも思います。

（拙文「ありえない文章」より）

そんなわけで、私は母語である日本語で、「ありえない夢」を追い、「ありえない文章」を書いていこうと思います。アホは直らないようです。

## レトリック詞集

以下は自己引用による、いわばレトリック詞集ですが、出所はあえて明記しません。これまで何度も引用してわけが分からなくなっているのです。

自分でも不明なので、たとえば（「たとえば」が多くてごめんなさい）、「星野廉イツ・ア・マジック。」とか「星野廉記述は、既述であり、」というふうにネット検索するとヒットするので助かります。

こんなふうに自分の痴部（たとえば、自己引用癖のことです）が露わになり、絶句します。

悪いことはできないものですね……。いずれにせよ、便利な世の中になりました。みなさんも、ご自分のユーザーネームでお試しになると面白いかもしれません。

なお、以下のレトリック詞集に意味や内容はありませんので、ざーっと顔＝字面だけをながめる感じで、目を通してやっていただけるとうれしいです。

**\*イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。**

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

**\*書いても書いても書いてはいない。**

隔靴搔痒の遠隔操作。まるで夢の中。知覚機能を用いる限り対象には触れることができない。言葉を使う限り直接的に森羅万象を相手にすることはできない。

駆けても駆けても駆けてはいない。掛けても掛けても掛けてはいない。搔いても搔いて

も搔けてはいない。書けても書けても書けてはいない。要するに、そういうことです。

どう足搔いても藻搔いても現実にたどりつけない私たちは、覚めた夢の中にいるのかもしれない。

**\*分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。**

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

まず現実での体験があって、言葉は後という意味です。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

言葉、とりわけ文字は後付けです。理屈なのです。分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

### **\*映る、写る、移る**

それが見るであり、聞くであり、読むという行為と言えるでしょう。見たもの、聞いたもの、読んだものを、いったん信じないことには——「信じる」は「なぞる」です——、見えないし、聞けないし、読めないのです。実際には「ないもの」を見て聞いて読んでいるのですから、変な精神状態にあると言えるでしょう。

いましているのは、絵、映画、映像、動画、演劇、物語、小説の話です。虚構というものは「ない」を「ある」と一時的に信じ（つまり、思い描くことでなぞり）、しかもそれを自分自身も心の中で表情や動作として演じるわけですから、確かに変なことをしているとと言えます。

要するに、映る、写る、移るです。転写された相手が自分の中に入ってくるという感じ。

**\*記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。**

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

言葉を用いて「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉や言い回しを「なぞる」こと、言い換えれば既述なのであり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術だと言えます

**\*この符合、符号、付合は、只事ではない。**

呪術、呪い・まじない、魔術・マジック・magic、マジ・magie（フランス語です、マジな話が）、まじもの・蟲物。

この符合（※ふごう）、符号（※ふごう）、付合（※つけあい）は、只事ではない。「まじ」めな話が.....。

**\*そっくりなところがそっくり**

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。これもレトリックですけど。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

\*

そっくりがそっくりをそっくりな場所でそっくりなやり方で売る、そしてそっくりな

お客さんたちがそっくりなやり方で買う。そして、自分もまたそっくり化していることにふと気づき、嘔然となる。

おそらくこれが資本主義なのでしょう。というか、資本主義の顔であり表情であり身振りなのでしょう。

**\* (7) AとBは、反意語=反対語=対義語=異義語というよりも、むしろ「同意語=同義語」であるらしい。**

世界を「まだら」状にしか知覚および認識できない人間が、長年にわたって使用してきたことにより、慣例的に反対の関係にあると事実誤認および錯覚されていると推測可能な言葉のペア。補完関係があるという見方も可能かもしれない。静と動、絶対と相対、客観と主観、客体と主体、知覚と錯覚、「分かった」と「分からない」、「知っている」と「忘れている」、「記憶にございません」と「存じ上げております」、きれいと汚い、毒と薬、可能と不可能、シャチョーとペーパー、はじめしゃちょーと林家ペー（※両者とも人間という意味）、林家ペーと林家パー子、お偉いさんと市民、苦労人と元苦労人、玄人と素人、素人のど自慢と紅白歌合戦、濃いと薄い、あそこここ、善と悪（倫理的意味ではなく、この惑星に対しての人間の影響度）、神と悪魔（諸説あり）、異端と正統、温水と冷水、ヒトと動物、なまものといきもの、のろいとまじない（漢字にすると同じである点に留意されたい）、優と劣、高等と劣等、理系と文系、〇〇党と△△党、右派と左派、保守と革新、主流派と非主流派、〇〇党XX派と〇〇党□□派、など。

**\*あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。**

あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。

あやまるものはあやまる。

あやまらないものがあやまる。

あやまらないものがあやまらない。

あやめて、あやまる。

あやまって、あやめる。

あやまって、あやまる。

あやまって済む問題。

あやめて済む問題。

あやめとかきつばたとしょうぶをあやまる。  
あやめばしで、みをあやまる。ごめんなさい。  
あやめばしはあやめた橋。諸説あり。

あやめ亭は落ちついたお店です。  
あじさい亭もすごく美味しかったです。最高でした。

あやまらないそうり。  
あやまらない、あいむそうり。  
あいむそうりと言わないそうり。  
あいむそうりと言わないあいむそうり。(早口言葉)

あやめてもあやまってもあやまらないみちびくひと。  
あやまりをみとめないみちびくひと。  
つじつまあわせにちみちをあげるみちびくひと。(早口言葉)

#### \* 「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまう

「あるとない」と「有ると無い」と「存在と無」は、同じことを言っているというのは抽象です。それぞれが違います。

「あるとない」 < 「有ると無い」 < 「存在と無」

「存在と無」は「あるとない」よりずっと厳めしい、つまり存在感があります。難解な印象を与えますし、実際に難解でもあります。なにしろ、「ないことはない」という振りをして「ないことがある」とほのめかしているのです。「いや」が「いいわ」だったりするSMプレイとそっくりなのです。

漢語系の言葉や漢字は、「ない」を「ある」ようにほのめかします。これは顔の問題だと思います。文字には顔がありますが、漢字のいかめしさはすごいです。漢語系の言葉を使うと頭が良さそうに見えるし、すごいことを言っているように見えます。

字面が強面だとも言えそうです。ないはない、ことばはことば、ことばはものではない。こういう身も蓋もない、がっかりするしかないほど明快なことを「無は無なり」「言

葉は言葉である」「言葉は事物ではない」と漢語系の言い回しで言うと、とたんに「ないはある」の振りをしてしまうという事態が生じます。がちで「ある」ように思えてしまうのです。いわば顔芸です。

「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまうとか、「無」に「ある」がつまっている気がすると言えば、分かっていただけでしょか？

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

無 = あるあるあるあるある.....

漢字や漢語には何だか「思い」がつまっているようで「重い」のです。ただし、あくまでも日本語においての話です。また私という個人においての話であることは言うまでもありません。

#### \*写す、映す、移す、撮すと言うより

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。その意味で、なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではありません。

\* player ではなく prayer であるべきなのに。



名づけて手なずけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name

difficult to tame

difficult to frame

抽象だから、似ているというよりも、そっくりというよりも、同じであり、同一。同期。

same

なぞ、なぞをなぞるというゲーム。なぞるが目的化して空回りする。

game to play

aim

aimless game to play

何のため？ 名前のため？

aim、name、fame、frame

それは罠だってば！

You're framed!

筋書き (aim) をなぞり、名 (name・fame) を残し、枠 (frame) を残すのに血道を上げる。

ゲーム (game) をプレイ (play・演じ戯れ競い奏で賭け、なぞり) しながら、自分が獲物と餌食 (game・prey) になってしまうのに気づかない。いまは祈る (pray) べき時なのに。player ではなく prayer であるべきなのに。

#### \*指す、差す、刺す、射す、挿す

指す、差す、刺す、射す、挿すのです。何度も何度も。そして射る、入るのです。つまり、サディスティックなのです。

川端康成の作品における「指」の役割と象徴性はきわめて大切です。指はなぞり、さすものなのです。何かの代用であることは明らかでしょう。

\* 「あなた」 = 「I love you. (only you)」 + 「I miss you. (without you)」 説

「あなた」 = 「I love you. (愛しいあなた)」 説。これでは「かなた」の意味がすくえません。

じゃあ、「あなた、貴方 = you、彼方 = over there」なのですから、音感的には「あなた・貴方」 = 「I love you.」で、意味的には「あなた・彼方」 = 「I miss you. (目の前にいないあなた)」では、どうでしょう。

つまり、「あなた」 = 「I love you. (only you)」 + 「I miss you. (without you)」 説。

\* なぞるをなぞる。

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。なぞるをなぞる。空(くう)をなぞるように見えて、枠をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

## \*ことのはに さきだつひと

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

ことのはに さきだつひとを おくるかけ

## 最後に

以上、私の文章がいかに内容なんてないよーであることが体感いただけたかと思えます。

文章は顔が命。文章は読むよりも、その顔を見て愛でる。読むよりも、見たり唱えて楽しめばいい。

さいきん、つくづくそう思います。意味に疲れて、憑かれて、突かれて、潰かれて、付かれているのかもしれない。

ひとりよがり自己満足でしかない自分語と化してきた拙文の言葉たちにお付き合いいただき、ありがとうございました。

#文章 # 名詞 # 動詞 # 用言 # レトリック # 翻訳 # 文体 # 文字 # 漢字# ひらがな  
# 大和言葉 # 和語 # 言葉



09/16 「似ている」の魅惑



＊

「似ている」の魅惑

星野廉

2022年9月16日 08:02

目次

「ワンパターン」は褒め言葉

作家が書くときの癖

繰り返し出てくる光景や身振り

他人の家に入る

共振する身振り

書いてあることを読まずに、書かれていないことを読んでしまう

作品と作家を超えて共振する身振り

「似ている」に依存する

「ワンパターン」は褒め言葉

語弊はありますが「ワンパターン」は褒め言葉だと思います。いま頭にあるのは、水戸黄門や笑点ではありません。

ユーミン、みゆき、サザン、陽水、小室の楽曲は聞いて何となく分かるとか、スティーヴン・キング、みゆき、漱石、龍、春樹の小説には同じような場面や人物が繰り返し出てくるとか、ニナガワ演出のお芝居は見てすぐに分かったとか、スピルバーグ節とかヒッチコック調とか、マイコーの踊りはワンパターンだったとかいう言葉をよく見聞きします。

これらは最高の褒め言葉ではないでしょうか。ファンはアーティスト固有のスタイルに惚れ込んでいます。イメージチェンジや急激な進化はリスクを負うのです。

多くの人に長く愛される作品やその作り手には、パターンとか文体とか文法とか流儀とか芸風、あるいは刻印がある。そう言えるような気がします。そういうパターンがファンに見過ごされる場合もある一方で、熱狂的なファンでなければ分からない場合もあるとも言えそうです。

たとえば、ユーミン、みゆき、サザン、陽水、小室の曲は雰囲気似ているから聴いて何となく分かるといった現象は、どちらかと言うとそのアーティストに興味や関心のない人によって感知される気がします。一方、ファンはどれも微妙に違うとかぜんぜん違うと主張します。好きなアーティストの曲を聞き込んでいるので細部に詳しいからでしょう。

それに対し、スティーヴン・キング、みゆき、漱石、龍、春樹の小説には同じような場面や人物が繰り返し出てくるといった言葉は、同じ作家による作品をかなり読み込んだ人でなければ、吐けないセリフかもしれません。以上は、あくまでも個人の意見です。

## 作家が書くときの癖

私は音楽には詳しくないので、小説に話を絞ります。

作家には書く時の癖があるようです。とくに小説の場合なのですが、ある作家の作品を読むと同じような場所が出てくるとか、似た登場人物が繰り返し出てくると感じる事がよくあります。また、ある種の物とか、登場人物の仕草が特定の作家の小説に頻出することがあります。

たとえば、宮部みゆきの小説の中では、実によく雨が降ります。短編でも長編でもです。水浸し、川の氾濫、暴風雨、台風——といった形で、頻繁に雨や水が出てきます。大雪の中で事件が起きる長編もあります。ファンの方は、ああ、あれだと心当たりがあるにちがひありません。火や炎も、よく登場しますね。

宮部みゆきはスティーヴン・キングの熱狂的なファンを自称していますが、キングと宮部の作品には共通点が見られます。雨や雪や液体（もちろん水と血液も含まれます）と、火と、少年（あるいは「少女」とされながら説話的な要素としては「少年」の機能を果たしている登場人物）です。キングの場合には、子ども、特に男児にいたずらをする性的虐待者がよく出てきます。



宮部とキングにおいては、雨や雪や液体（水や血）が降ると物語が始動する、つまり物語のスイッチが入るのです。またキングにおいては、性的虐待者や不審者が現われることでストーリーの展開が促される、あれっとな声を上げるほど急に調子が出てきたのを感じる場合があります。嬉々として書いているのではないかと思うほどです。

あとキングの作品では、「眠る」または「横たわる」（睡眠や不眠だけでなく、仮死や拉致監禁や意識不明を含みます）という身ぶりが、ストーリー・テリングを始動し促す重要な触媒になっているものがあります。

宮部みゆきとスティーヴン・キングの古い作品は、いまま書棚や押し入れ内の段ボール箱に入っています。かつてはよく読みました。元気があったからです。未読の作品も積ん読になっています。何しろ長いものが多いので、もう読むことはないと思います。

＊

宮部やキングはページターナー、つまりページをめくるのがもどかしいほどの面白い読み物の書き手ですが、似通った場面や状況や登場人物を繰り返し書きながらも、次作を心待ちにする読者が多数いるのは興味深いことです。ワンパターンと非難する人もいるでしょうが、これだけ広く愛されているのですから、決まったパターンには中毒性があるのかもしれない。

似たようなものが繰り返されることに安心感を覚えるという心理は分かる気がします。音楽には詳しくないのですが、楽曲においては反復と変奏が大きな役割を果たし、同じ旋律やテーマが繰り返されたり、形を少し変えて出ることによって、聴く人が快感を覚えるという話を聞いた覚えがあります。

これもまた詳しくないとかまったく経験がないことなのですけど、幼い子どもに本を読み聞かせる際に、親や保育士さんが子どものためを思って話を変えると、子どもが不機嫌になったり、眠りそうになっていたのに目をぱっちり開けて「ちがうよ」と抗議すると聞いたこともあります。

## 繰り返し出てくる光景や身振り

夜寝入る時や夜中に目が覚めた時に、頭に浮かぶ断片的な心象にも反復と変奏を感じます。宮部みゆきの小説に何度も出てきた覚えのある公園や、川と堤防のある風景。キングの小説に繰り返し出てくる豪雨と洪水に見舞われた街の様子。

角田光代の小説に頻出する、引越しの前後の雑然と物や段ボール箱やゴミ袋が散らばって置かれた部屋。吉田修一の小説でしょっちゅう流れる汗。やはり吉田修一の小説にやたら出てくる、上階の窓やベランダから車の流れる通りを見下ろす仕草。病室のベッドに身動きが取れない状態でいて、音を頼りに病院内外の様子にあれこれ想像をめぐらすという、古井由吉の諸作品におけるオブセッションじみた描写。

こうした繰り返し訪れてくる風景やイメージは毎回微妙に変化しているように感じられます。見る見るうちに様相が変化する場合も珍しくありません。

そんなシーンや状況の出所を作家名を挙げてたどっているのは、この文章を昼間に書いているからに他なりません。夜中であっては、こうした心象はいわば匿名的なシーンや風景として断片的に浮かんできます。ああ、これは誰々のあの小説のシーンだなんて考えません。そういう無名ともいえる視覚的なイメージが浮かんでは消えるのです。

テーマに文章が擬態して（私にはよくあるのです）、似たような記述が増えてきたので（このままでは收拾がつかなくなりそうです）、話を吉田修一の小説に絞ります。

## 他人の家に入る

吉田修一の小説では、他人の家に入るという身振りが繰り返し出てきます。反復というよりも変奏というのがふさわしい気がします。他人の家に入るという行為は、レイモンド・カーヴァーの掌編および短編でも頻出する設定でありシチュエーションだといえるでしょう。

吉田修一の長編小説『パレード』は、小説を書く習慣のある人にとっては興味深い作品ではないかと思います。内容はもちろんですが、その形式が面白いのです。登場人物の書き分けも見事で勉強になります。実は、この小説には驚愕の結末があるのですが、他

人の家に入るという行為に的を絞っている限りはネタバレを恐れる必要はなさそうなので解説してみますね。

『パレード』は五話に分かれていて、それぞれの話で異なった語り手が一人称で語るという形式を取っています。第一話では「ぼく」、第二話では「私」、第三話では「私」、第四話では「おれ」、第五話では「俺」が語るという具合です。あっさり書きましたが、文体のレベルでも個性という意味でのキャラクターのレベルでも、異なる話者を書き分けるのは至難の業です。

この五話の舞台は同じで（マンションで共同生活を送っているのです）、語り手の違うそれぞれの話に同じ人物たちが登場して全体のストーリーを形成します。五人の心の内を覗いているような気分になりぞくぞくするのは、かなり赤裸々に一人称で語られているからでしょう。

そう、「覗いている感」がこの小説の魅力だと思います。また、ある人物を別の人物の視点で語るという構成は人間が多面的な存在であることを思い出させてくれます。はっとする箇所が多々あります。その「はっとする」のMAXが小説全体のクライマックス（驚愕の結末）になりますが、ネタバレになるので詳しくは書けません。

吉田修一は小説の作りが巧みだし、語りがうまいですね。

＊

『パレード』では第三話がいちばん好きです。「小窪サトル（18歳）自称「夜のお仕事」に勤務」が「おれ」という一人称代名詞で語るのですが、このサトルには特定の寝泊まりする場所がありません。いわゆる住所不定無職なのです。吉田修一の作品では、こうした居所が定まらない人物が頻出します。

不謹慎な発言になるのを覚悟で書きますが、私にはそういう居場所が不安定な人間に対する憧れがあります。実生活では引きこもっているからでしょう。居場所に関していえば、引きこもりは究極の絶対「安定」なのです。だから、吉田修一の作品に出てくる「ふらふらした身振り」に惹かれるのかもしれませんが。

＊

「小窪サトル（18歳）自称「夜のお仕事」に勤務」が語る話には、すべてとは言いませんが、吉田修一の諸作品に頻出するテーマや身振りや物や風景や状況が詰まっているという気がしてなりません。そう感じさせるこの話の細部を列挙してみます。

- ・実家を出ている。

- ・他人家に入る。不法侵入であったり、主の酔った勢いでそこへ連れて行かれたり、公園で拾われて「お仕事」をするために部屋に連れて行かれたり、ほぼ居候として居着いたりする。

- ・公園へ行く。ぶらぶらしたり、客（男）を取るためだったりする。
- ・他人の家の窓から外を眺める。窓から渋滞した道路を見下ろす。
- ・他人の部屋の中にある物を無断でいじる。部屋の中で飲み食いする。部屋の主に食べ物や飲み物をもらう場合もあれば、留守宅で勝手にそこにある物を口にしたり、外で買ってきた物を食べることもある。

こう並べてみると、殺伐としていますね。でも、それが吉田修一ワールドの一部なのです。こうした仕草や身振りが頻出するのが、吉田の作品群で時折見られる風景なのです。危ういし物悲しい風景ですが、その風景に引きこまれる私があります。

吉田修一の小説で繰り返される「他人の家に入る」は、呼ばれて遊びに行くだけでなく、いきなり訪ねるとか、間借り、居候、留守番、不法侵入という形を取ります（こう書いていて、やっぱりカーヴァーを連想します）。そうした行為が頻出する『パレード』を書いた吉田が後にミステリーや犯罪小説を書くようになったのは理解しやすい展開だといえるでしょう。初期の作品を読むと、その素地は十分にあるということですね。

吉田修一の犯罪小説で私がいちばん好きな『怒り』の冒頭では「他人の家に入る」行為が犯罪、しかも凶悪犯罪として描かれます。また全編を通して上に列挙した身振りが頻出し、汗も随所で吹き出します。ああ、あれだ、ああ、これだという具合に既視感の氾濫に見舞われると言えば、言い過ぎかもしれませんが、私にはそう感じられます。

＊

他人の家に足を踏み入れた瞬間に、その家独特の匂いがしたり、自分の住まいとは違う湿度を感じたり、何か見てはいけないものと出会う予感がしてどぎまぎすることがないでしょうか。

私の場合には、思わず身構えている自分があります。緊張するのです。なぜか、後ろめたい気もします。店や公共の施設に入るのとは違った気持ちがするとすれば、それは私たちの遠い祖先が感じていたであろう、他人のテリトリーを侵犯する際のスリルに似た感覚が呼び覚まされ、刺激されるからではないでしょうか。こうなると、スリルと言うよりも、恐れや警戒心と言うほうが適切かもしれません。

もちろん、人それぞれですから、今お話ししているのはあくまでも私個人の意見です。

恐れや警戒心というのは、まず皮膚的な感覚として生じる気がします。気配というやつです。さきほど侵犯という言葉を使いましたが、侵も犯も「おかす」という大和言葉に当てた漢字です。「おかす」は「侵す、犯す、冒す」と書き分けることができます。

## 共振する身振り

『パレード』に話を戻しましょう。

”なるべく皺がつかないように、ユウコのベッドに寝転がった。(後略)”  
(吉田修一『パレード』幻冬舎文庫 p.197)

この場面で、「小窪サトル(18歳)自称「夜のお仕事」に勤務」は、見知らぬ女性の後をつけ、その女性が出かけた住まいに不法侵入し、ベッドに寝転がり、そこで何と自慰行為におよぶのです。おかす、侵す、犯す、冒すという言葉の分光が、頭の中で起こります。

サトルが語る『パレード』の第四話は、不気味で興味深い細部に満ちています(何しろ、お客だった「ある男」からの又聞きという形で、ピエール・リヴィエールとおぼしき人物の話が出てくるのです)。

吉田の他の作品、そして吉田が読んだり観たと思われる他の作家の文学作品や映画作

品との共振度もすぐれて高いといえます。つまり、ああ、あれだ、ああ、これだの連続であり、ぞくぞくするのは。息切れがするほどです。

＊

話がきわどくなってきたので変えますね。

吉田修一の複数の小説から、食べるという差し障りのない身振りの出てくる箇所を見てみましょう。場所はもちろん、他人の住まいです。

”おそらく各部屋の物色後、男は台所で時間を過ごしている。里佳子がこの日スーパーで買って来たライ麦の食パンを四枚食べ、冷蔵庫にあったハム、カップ入りのとうふそうめん、マンゴー三個をたいらげており、リビングのソファで横になったと推測される。”  
(吉田修一『怒り』上・中央公論社 p.6)

”閻魔ちゃんは、それからシチューを煮込んでいるが、もう鼻唄は歌っていない。

リビングのソファで、シチューができるのを待っていると、急に熱い風呂に入りたくなった。ぼくはビデオを置いて浴室へ行った。風呂蓋を開けると、きのうの夜の残り湯が、冷たくなっていた。(後略)”

(吉田修一『最後の息子』文春文庫 p.23)

”リビングのソファで毛布に包まり、琴ちゃんが焼いてくれたワッフルに苺ジャムを塗っていると、いつもより少し遅く起き出してきた直輝が、「サトル、お前、きょう、俺の会社でバイトする気ないか？」と訊いてきた。

もちろんなかったので、「ない」と答えて、熱いワッフルに齧りついた。(後略)”

(吉田修一『パレード』幻冬舎文庫 p.200)

”肝臓やら心臓やらグロテスクな素描ばかり見ていたせいとか、味の濃いものを食べたくなり、台所へ向かって開けた冷蔵庫にローマイヤのスモークサーモンがあって、欲していた味ではなかったが、フランスパンに挟み黒胡椒をかけて食べた。”

(吉田修一『パーク・ライフ』文春文庫 p.39)

人が生きていれば必ずどこかで何かを食べるのですから、そういう場面が小説に出てくるのは別に珍しくもないと言われれば、その通りであり、返す言葉もないのですけど、私には目についてならないのです。

## 書いてあることを読まずに、書かれていないことを読んでしまう

大学生の時に、ある先生がしきりに「書かれていないことを読む」と「書かれていることを読む」と口にしていました。小説を読む時の話です。書かれていないこととは、たとえば作者の生い立ちとか人生観とか死生観とか世界観とか思想だとか、そういうものです。

要するに、そこに書いていないことをどこかから持ってくるのです。そこに書いてあることを別のものに置き換えるともいえます。

よく小説の文庫本の解説にはそういうことが書いてありますね。大学の授業なんかでも、ある文学作品を読んでいると、学生はその作品の解説書や批評の類を見つけてきて、そこに書いてあったことを授業で発表したりするんです。

すると、その先生は「それは、この作品のどこに書いてあるのですか？」と優しい口調ながら澄ました表情で尋ねます。褒められると期待していた学生は言葉に詰まります。そんな学生を相手に、蓮實重彦というその先生は作品に書かれていることだけについて次々と質問をしていくのです。

そういえば前後は忘れましたが、ある日学生の一人が見当違いな発言をして、教室内が白けた空気に包まれたことがありました。その時、ヘビースモーカーだった先生が煙草を吸い終え、「ここにこんなことが書いてありますけど」とよく響く低音で口を切り、室内がにわかに活気づいた瞬間もありました。この一瞬を今でも夢に見ることがあります。

私は読むというきわめて具体的な作業を非常勤講師として教えていたその先生から学びました。その際につくづく感じたのは、「書かれていることを読む」のがとても難しいということです。誰もがつい書かれていないことを読んでしまうのです。

私がここで述べている連想もそこに書かれていないことであるのは言うまでもありませんが、どこかに書かれてはいるわけです。大切なのはその「どこか」が文学作品だということでしょう。解説書や批評や作家の経歴ではありません。

たとえば、『最後の息子』を文学界新人賞、『パレード』を山本周五郎賞、『パーク・ラ

イフ』を芥川龍之介賞という手垢のついた言葉で評したり、その作風を純文学や大衆文学というジャンル分けで論じたり、その雰囲気をいわゆる「洒落た都会生活」という思考停止的な言葉で語ってお茶を濁したり、吉田修一を長崎や東京や台湾や、スイミングスクールのインストラクターという経歴や、愛猫家という側面などと置き換えたとして、それが吉田修一の作品に書かれていることを読んだことになるのでしょうか。

そうした読み方を否定しているわけではありません。私もときにはしますし——一例を挙げると吉田が愛読したというジャン・ジュネと吉田を比較してみたい誘惑にも駆られます、きっとわくわくするに違いありません——、読みは人それぞれですし、そうした読み方の楽しさに激しく共感するほど、私は根がミーハーな人間です。読みはその人にとって快いものであれば、それでいいと思います。

### 作品と作家を超えて共振する身振り

レイモンド・カーヴァーの『隣人』（村上春樹訳）では、妙な夫婦が出てきます。

アパートかマンションに住んでいる夫婦の話。廊下を隔てた隣人である夫婦が長期の旅行に出ることになり、その留守中にペットと室内の植木の世話を頼まれる。鍵を預かり数部屋から成る住まいに入って、言われた通りに猫に餌をやり植木に水をやる。それだけならいい。それだけでは済まないのだ——。

何が妙なのかというと、隣人夫婦から留守番を頼まれたこの夫婦ときたら、やたらと性的な興奮を覚えるようになる、つまり催すのです。お隣の夫婦の住まいですよ。変といえば変、分かるような気がするといえば分かるような気がするのですが、いずれにせよ妙な話であることは変わりません。

カーヴァーの『隣人』を思い返す度に、上述のサトルをはじめ、吉田ワールドの登場人物たちが他人の留守宅で物をいじったり勝手に物を食べる身振りや仕草に、『隣人』で出てくる夫婦の同様の行為をどうしても重ね合わせたくくなります。もちろん同じではありませんが、要するに「似ている」のです。

”彼は戸棚を全部開けて中にある缶詰やシリアル食品やらパッケージ食品やらカクテル・グラスやらワイン・グラスやら陶器やら鍋かま類を全部点検した。冷蔵庫も開けた。セロリの匂いをちょっとかいでみて、チェダー・チーズをふたくち齧り、林檎を食べなが



らベッドルームに行った。ベッドはすごく大きく見えた。(中略) ナイト・スタンドの引き出しを開けると半分空になった煙草の箱が見つかったのでそれを自分のポケットに入れた。”

(レイモンド・カーヴァー『頼むから静かにしてくれ (THE COMPLETE WORKS OF RAYMOND CARVER 1)』村上春樹訳・中央公論社 p.30)

異なる作家の書いた作品間の影響や模倣を問題しているわけではありません。ただ似ているだけです。いろいろな作家の文章を読んでいると、この種のことはざらにあります。小説だけでなく、エッセイや映画やテレビドラマや絵や楽曲や写真や動画でも、よく見られる現象です。

みなさんにも心当たりがありませんか。

この曲、あれに似ている。この映画の場面とそっくりなシーンを見たことがある、確かテレビドラマだ。このイラストってピカソのゲルニカに似てね？ あれなんだっけ、これとめっちゃ似てるんだけど、なんだっけなあ。この小説を読んでいると、〇〇の新曲のPVみたいでデジャビュを感じる――。

### 「似ている」に依存する

同じ作家やクリエイターの作品間でも「似ている」は頻出します。レイモンド・カーヴァーと吉田修一以外に、私がそれを強く感じる作り手の名を思いつくまま挙げてみますね。記事の冒頭と重なりますが、次の通りです。

夏目漱石、中上健次、藤枝静男、村上龍、村上春樹、松任谷由実(荒井由実)、小室哲哉、Bee Gees、スティーヴン・キング、宮部みゆき、橋田壽賀子、パトリシア・ハイスミス、角田光代.....。

こうした作り手の作品群にはワンパターンとかマンネリズムという言葉で片づけたくない、「似ている」がたくさんあります。スタイルとか文体とか個性とか刻印と呼んでも、事情は同じかもしれません。

大切なことは、その「似ている」を好み、楽しみ、また新たな「似ている」を待ち望ん

でいるファンが大勢いるという事実ではないでしょうか。作品間の「似ている」感が強い作り手ほどファンが多い気がします。「似ている」には依存性があり、人を安心させる何かがあるように思えてなりません。

#文学# 読書# 宮部みゆき# スティーヴン・キング# 角田光代# 古井由吉# 吉田修一  
#レイモンド・カーヴァー# 蓮實重彦

09/17 言葉と現実のあいだを行き来する



＊

言葉とうつつのあいだを歩き来す

星野廉

2022年9月17日 07:57

四方を山に囲まれた町で生まれ育ったのに、私は山について知りません。自分のまわりの人たちは、遙か彼方に見える山々の名前をよく知っています。登山口の近くにある観光地で、登山もさかんな土地なので、本格的な登山の経験はなくても、日帰りで近場の山や高原にドライブに出かけるのが当たり前になっているほどです。

幼いころから山には興味がありませんでしたが、交際がきょくたんに薄い人生を送ってきたことも、私が山に詳しくない原因のひとつだといえそうです。そんな私がいまになって山に興味が出てきて、相変わらず引きこもってはいるものの、以前だったら見向きもしなかった山についての番組を食い入るように見ているのには理由があります。

小説なのです。山を描いた小説をとおして、山への興味が湧いてきたのです。老年になってのことですから、何だか妙なというか、間が抜けた話だと自分でも思います。

＊

介護が必要だった母が亡くなった五年前から、車に乗せてもらって外出する機会が増えました。私にとって初めてのことの連続でもありました。初めて出席する葬儀で初めての喪主——正確には近親者だけによる「送り」でした——、母の他界にともなっている初めての手続きの数々、初めての公証役場、初めての高速道路、初めての遠出、初めてのイオンモールとアウトレットパークと回転寿司とドン・キホーテ、初めてまたぐ隣県との県境、初めての泊まりがけの旅行、初めてのホテル。

ここで笑わないでくださいね。五年前といっても、当時の私はもう老人とっていい歳でした。「初めての〇〇」を列挙していますが、誇張ではなく本当なのです。まるで浦

島太郎みたいですけど、事実なのです。「葬式デビュー」と「旅行デビュー」という小説を書こうと思ったくらいです。引きこもりって、こんなものですよ。みなさんのまわりにも、いませんか？　すぐ近くに、こういう人がひっそりと生きているかもしれませんよ。

住んでいるのは山に囲まれた土地なので、遠出をするとすると国道や高速道路をつかうことが多くなります。助手席から景色を眺める楽しみを覚えました。道路、高架道路、山、川、橋、不思議な地形、トンネル、ダム、中都市、大都市、郊外の住宅地、商店街。何もかもが目新しく面白くてなりません（そういえば、去年はさらに遠出をして、約五十年ぶりに間近で海を見ました）。

中でも、山の連なりや山の風景の細部に目がいくようになりました。そして眺めながら思いました。いったいどうなっているのだろう、と。

＊

いま住んでいる家の窓からは山が見えます。近所を歩いても必ず遠景には山があります。かつて住んだ施設や住宅もそうでした。小学校から高校までの通学路からも近くにそして遠くに山が見えました。とくに気にとめなかった山が、この歳になって、急に気になる存在になったのです。

同時に、これまでに読んだ小説に書かれていたはずの山の描写を、自分が読み飛ばしていたのに気づいたのです。古井由吉、藤枝静男、そして幸田文の作品を読みかえすようになりました。すると出かけるのが楽しくなったのです。

三人の作家の文章には山の描写がよく出てきます。山だけでなく地形や地勢に関する記述も頻出します。読みながら感じたのは、読むと見えるようになる、見えるようになるとさらに読みたくなる、さらに読むともっと見えるようになる、ということでした。

ここで拙文を引用します。

＊

想像してみてください。漢文で習う漢詩に描かれた風景や風物は古代中国のものなのです。日本語で対応するものを探すのは難しい部分もあるに違いありません。

國破れて 山河在り  
 城春にして 草木深し  
 くにやぶれて さんがあり  
 しろはるにして そうもくふかし

かろうじて覚えている漢詩に、上のようなものがあります。教科書に出ていたのを暗唱しているのです。すらすらと口をついて出る言葉に、あっけにとられます。こんなものが自分の中にあったのか。気がつきませんでした。不思議でなりません。

手術の後で、「あなたの体にこんなものがあったよ」とお医者さまに言われたような気分と言え言えずでしょうか。記憶とか暗唱というものの痕跡は、普段は気づかないままに残っているのですね。

話を戻します。

この漢詩に描かれた風景は昔々の中国のものなのです。それを昔々の日本人はどう受け止めたのでしょうか。戦（いくさ）はどんな民族にも見られますから、昔の日本人もまた自分たちの体験に照らし合わせて読んだのかもしれない。

このように外国語で書いてあることを読み理解するためには、書かれていることに対応する物や事を想像しなければ、容易に習得できないのではないのでしょうか。

漢文という中国語を日本語で読める技術を開発したり、詩吟という芸術に改造したり——、昔の日本人はすごかったのですね。

(拙文「もう一つの言葉」より)

\*

上で引用した漢詩の一部に、山、河、草、木という字が見えます。この国に住んでいる人ならおなじみのものですね。でも、目を世界に転じてみると、必ずしもそうしたものが当たり前景色として身のまわりに見えるわけではないことに気づきます。

砂漠、草原、雪原、島。山だけ、川だけ、草だらけ、木だらけ。地球上には多様な地形や地勢があります。そして、それぞれの土地に太古から住む人たちはそれぞれの言葉をつかってきました。土地と言葉は深く密接にむすびついているということでしょう。

雪という言葉がない言語もあれば、雪に関する言葉や言い回しが、たとえば日本語とくらべて驚くほど豊かな言語もあるといえます。

＊

老人になって、山に興味を持ったものの、複数の持病をかかえる私の体力では登山は無理です。山の出てくる小説をたんねんに読むだけでなく、山についてのテレビ番組をそれこそ食い入るように見えています。

自分が山について書こうと思うと、山についての言葉や用語や言い回しを知らないことに気づきます。それでも、書いてみたいと思うときにどうするかというと、真似るしかないのに気づきます。

見よう見まねで先行する文章にならい練習するのです。「ならう」は「習う」「倣う」と表記できます。ちなみに、「学ぶ」と「真似る」、つまり「まなぶ」と「まねる」は同源だそうです。

文章に関していえば、知らないものは出てきません。まねる、ならう、まなぶしかないのです。言葉は外にあります。外から入れるというよりも、借りて入れるというほうが適切な気がします。借り物ですから自分のものにはなりませんし、独り占めも無理です。

山について書こう、山を描写しようと考えていて、あることが気になったので調べてみました。

＊

”それまで走ってきた道路をそれ、山沿いにカーブしていく道に出た直後のことでした。”<sup>35</sup>



”外に出てみると、ここはやはり山の中腹であろうという印象を強く受けました。”36

”たしかに、なかなか骨の折れる道ではありましたが、丘を百ヤードほどジグザグに登るだけのことで、私にはとくに無理という道ではありません。”38

上の三つの文はカズオ・イシグロ作で土屋政雄訳の『日の名残り』（ハヤカワ epi 文庫）からの引用で、数字はページ数を示しています。

それぞれの文にある「山」は英語の原文では hill (hillside) です。mountain ではありません。

でも、この翻訳された小説を読みながら「山」という言葉が出るたびに、私の頭に浮かぶのは日本の山々、それも故郷の山々なのです。たとえ、「低い」とか「なだらかな起伏」という言葉が添えられていても、なのです。英語力が乏しいうえに、うかつな私だけの思いなのかもしれませんが、お分かりいただけるでしょうか。（※ただし、原書で読むと hill とあるからなのか、テレビや映画で見た英国の低い「山」が浮かんできます。とくに小説の場合には、原著とその翻訳は別物だと感じないではられません。）

「あることが気になった」と、さきほど書いたのは、英国には mountain と呼べるほどの高い山がほとんどないという意味のことをなにかで読んだような気がしたからでした。かつてそれを読んだときに、えっと意外に思ったのを覚えています。

おおげさにいうと、そのときには、自分の考えていた「言葉と事物の関係」が揺さぶられたような気持ちになりました。

あと、mountain という語に関して『日の名残り』で興味深い箇所があるので紹介します。

”もちろん、見た目にもっと華やかな景観を誇る国々があることは、私も認めるにやぶさかではありません。私自身、百科事典や《ナショナル・ジオグラフィック・マガジン》で、壮大な溪谷や大瀑布、峨々たる山脈など、地球の隅々から送られてきた、息を飲むような写真を見たことがあります。”41

「峨々（がが）たる山脈」は原文では raggedly beautiful mountains となっています。言うまでもなく、これは英国の山ではなく、語り手が写真で見た「外国の」山々（複数形ですから山脈とか山岳地帯とも訳せます）の事です。

ここでまた引用させてください。

＊

さらに言うなら、日本語の「山」と英語の「mountain」、そして日本語の「川・河」と英語の「river」は一対一で対応しないらしいのです。

國破れて 山河在り

たぶん、中国語の山と川・河も、そうではないでしょうか。

日本語であれ、英語であれ、中国語であれ、漢文であれ、言葉というものが、ざらりとした違和感に満ちたものを感じられませんか。つまり、言葉は借り物なのです。個人レベルでも、国や地域や民族レベルでも、です。

(拙文「もう一つの言葉」より)

＊

ちなみに、カズオ・イシグロの『遠い山なみの光』（小野寺健訳）の原題は、A Pale View of Hills です。綺麗なイメージの邦題ですね。

翻訳『日の名残り』の文章は、敬語と丁寧語の使い方が正確かつ的確であるだけでなく、ため息の出るほど美しいです。原文とは別の作品と言っても言いすぎではないほど優れた日本語の文章だと思います。

『日の名残り』と The Remains of the Day を読みくらべると、多くのことをならえ、まなべるにちがいありません。

＊

「山というもの」をイメージしてみてください。

「山というもの」と「山についての言葉や言い回し」のあいだには、本来はつながりはありません。一対一の対応はないという意味です。言葉と物とそのイメージは同じではないともいえます。言葉は事物には追いつけないともいえるでしょう。

このことは、物と影、物と鏡像、物と写真や動画の関係を思いうかべると分かりやすいのではないのでしょうか。言葉とは、いわば物の影であり、物が鏡に映った像なのです。物や事は、辞書に収めることができる言葉よりはるかに複雑です。

「mountain（あるいは hill）というもの」と「mountain（あるいは hill）についての言葉や言い回し」においても同じことがいえます。

「山についての言葉や言い回し」と「mountain（あるいは hill）についての言葉や言い回し」のあいだにも、本来はつながりはありません。一対一の対応はないという意味です。

とはいうものの、山を見たり歩いたり登ったりしないと「山というもの」が分からないとは言いきれないと思います。「山についての言葉や言い回し」が助けてくれるからです。

そうであれば、山について書かれた文章を読みましょう。

また、山という言葉をつかう人たちと、mountain や hill という言葉をつかっている人たちが分かりあえないかという点、そんなことはありません。翻訳や通訳という魔法のような技術が助けてくれるからです。地球という星に散らばって棲息するヒトという種は、この魔法があったからこそ、ここまで来たのだと断言できます。

そうであれば、「山」と訳された文章を読みましょう。もとは何語で何という語か知りませんが、たくさんたくさんあるはずですよ。

山について書かれた文章とは、小説だけの話ではありません。百科事典でも辞書でも図鑑でも雑誌・新聞記事でも専門書でも詩でも短歌でも俳句でも観光パンフレットでも、

何でもいいのです。

もちろん、言葉にこだわらず、映画やテレビ番組や動画を見るのもいいでしょう。映像も広い意味での言葉なのです（事物の影であり像だという意味です）。

＊

「山」は必ずしも「mountain」ではない、「hill」の場合もある。富士山を見て、「ボケイノー」と叫んだ米国人を思いだす。

フランス語の montagne と colline、ドイツ語の Berg と Hügel にも、それぞれ特有のイメージがあるにちがいない。ところで、アラビア語ではどうなのだろう。そもそも山のない土地の言語では、どうなるのだろう。

こう考えると、アメリカ、オーストラリア、カナダ、南アフリカの英語はぜんぶ英語なんだから、mountain も hill もぜんぶ同じだろうなんて言えそうもない気がしてきた。

【※想像してみしてほしい。図鑑や百科事典や標識やピクトグラムの「絵」として流通している、たとえば動物や植物や人物の姿が、世界で一樣に理解されるなんてことはない。そう考えるのは抽象でしかない。

例を挙げれば、牛と豚と駱駝は、文化や宗教や環境によって異なるイメージと意味とメッセージを持つ。「豚は豚だろ?」「男は黒で、女は赤のシルエットでいいんだろ?」「何でも見える化（視覚化）すれば世界に通じる」「絵と写真は世界共通語だ」「図と身振りという非言語的コミュニケーション（ノンバーバルコミュニケーション）を使えば、言語の違いによる問題は解決する」という短絡はそれこそ非国際的な発言でしかない。

ある物（実物であれ絵や写真であれ）で何を連想するかは、地域や集団や文化で異なり、個人でも異なるという問題は解消されないから。というか、解消されてはならない。

試しに、rice で「バターで炒めた茶色い米」を連想する人や「(青々と繁る) 稲」だと思っている人に、「お茶碗に盛った白米のご飯」の絵を見せてやってみるといい。これが

「rice」です、と。】

「川（河とどう違うのだろうか?）」を和英辞典で調べると面白いかもしれない。「牛（なんで丑もあるの?）」を調べるともっとびっくりするだろう。英和辞典で、rice を引いても勉強になるにちがいない。「稲、米、米粒、ご飯、めし、ライス、これ全部がライスなの?」

あなたのイメージする「山」と私の心にある「山」は重なる部分もあれば重ならない部分もある。でも、同じ「山」という言葉をつかう。

そうであれば、「山」という言葉に助けてもらって、お互いの心にある「山」を見てみよう。言葉以外に、人と人、集団と集団、民族と民族、国民と国民をつなぐものは見当たらない。

たしかに音楽があるし、絵もある。でも、細かい心の髣髴や、複雑な思いは、言葉でしか伝えられない気がする。誤解があってもいいじゃないか。いくらでも話しあう余地があるはず。

言葉は物や事ではない——。それは百も承知。でも、もううんざりだ。そう考えて楽しいことは何一つないから。幸せになれないに決まっている。

＊

以上の常体の文章は独白でした。

もう一つ、独白の文を書きます。

読むと見えるようになる、見えるようになるとさらに読みたくなる、さらに読むともっと見えるようになる——。

いまの文は偽らざる実感です。山に限りません。何かについての文章を読むことで、その「何か」が見えるようになります。見えるようになると、おもしろくなり、さらにその「何か」について読みたくなる。その「何か」への興味が刺激されてわくわくするのです。さらに読み、さらに見えるという好循環が生まれます。

この「見える」は「分かる」であり「知る」なのかもしれません。

＊

あなたは日本語が読めますか？

この問いは「分からないのにそれを見ている、見ているのにそれが分からない」を考  
えるうえでヒントになる気がします。

自分の体験に照らしあわせてしきりに感じることは、

分からないのにそれを読んでいる、読んでいるのにそれが分からない――

なのです。

こんなことを、記事に書きました（拙文「「そうかもしれない」」）。

分からないのであれば、見よう。見て分からなかったら、読んでみよう。読めば分か  
るかもしれない。少しでも分かれば、今度はもう少し読んでみよう。

言葉は世界と現実を見るためのフィルター、世界と現実が映しだされたスクリーン。  
言葉に助けられて、うつつのものが見えるようになるかもしれない。

言葉とうつつ（現実）のあいだを行き来することで、言葉の世界が広まるかもしれな  
い、うつつの世界が広まるかもしれない。

#読書 # 言葉 # 文章 # 日本語 # 読書 # 読む # 見る # 描写# カズオ・イシグロ # 土屋  
政雄 # 英語 # 翻訳 # 漢文 # 山 # 海

09/19 伝わるもの、伝わらないもの





＊

伝わるもの、伝わらないもの

星野廉

2022年9月19日 11:28

目次

伝わるもの、伝わらないもの

うつせないもの、うつしてはならないもの

伝わるもの、伝わらないもの

つたえる。つたわる。伝える。伝わる。

熱を伝える。熱が伝わる。熱を移す。熱が移る。

熱を通じさせる。熱が通じる。熱を届ける。熱が届く。

熱を移動させる。熱が移動する。

＊

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂。

どれもが見えないものです。

何かから何かへ。誰かから誰かへ。何かから誰かへ。誰かから何かへ。

いまからいつかへ。いつかからいまへ。ここからあなたへ。あなたからここへ。

いま、ここ、いつか、あなた、どこか。

＊

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂。

伝わる。移る。届く。通じる。

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂は、伝わり、移り、届き、通じます。

でも、おそらく、伝わらないし、移らないし、届かないし、通じないものがあります。

表情、身振り、文字です。これらは、むしろ、写したり、映すものです。

具体的には、まず見て、なぞったり、真似たり、学んだりします。

見るものだからです。以心伝心の対極にあると言えます。まず型(形)を覚えるのです。

＊

表情、身振り、文字のどれもが、形であり姿です。視覚言語という言い方もできます。

表情も身振りも文字も、伝わるし、移せるし、届くし、通じると言えます。たしかに  
そう言えるのですが、ここで言っているのは、意味やメッセージではなく、形や模様や動き  
なのです。

あくまでも、目に見える形と動きの話です。

＊

文字に話を絞ります。

とくに日本語の文字、つまり表記を考えてみましょう。

ひらがながあり、カタカナがあり、漢字があり、ローマ字があり、アラビア数字があ  
り、ローマ数字があるのです。それだけではなく、約物もたくさんあります。

これほど複雑な表記は、他に見当たりません。良い悪い、劣っている優れているの話ではありません。

\*

意味やメッセージは、移せるのもの、言い換えると翻訳可能とされているものです（私は翻訳されたものは別物だと考えていますが、ここでは触れません）。

形や模様は、たぶん移せません、翻訳できません。写したり、映すことはできるでしょう。

移すというよりも、映したり、写したりするもの。それが文字ではないでしょうか。

具体的には、まず見て（映す）、なぞったり（写す）、真似たり（写す）、学んだり（写す）します。

\*

形であり型である文字は人の外にあるものだから、見て確認できるし（つまり映せるし）、だから、なぞれるし写せるのです。

一方の意味は、人の中にあるものなので、見えないし、他人といっしょに確認することも無理です。なぞり写すこともできないでしょう。

\*

大昔に大陸からこの列島に伝わったものは、たぶん意味ではなく漢字という形なのです。

うつす。つたわる。

この列島にある意味が、伝わってきた形を迎えたのではないのでしょうか。

見えないものが、見えるものを迎えたのです。

移す、映す、写す。伝わる。

一目瞭然です。型（形）だからです。

＊

見えないもの（「うつす」「つたわる」）が、見えるもの（移す、映す、写す。伝わる。）を迎えた。説明すると、こうなります。

映し写しても、移す必要はなかったとも言えます。たぶん、そこにすでにあったからです。たぶん、としたのは見えないからです。

【※すでにそこにあったからこそ、自分が動くことで動かないものを動かし、漢字や漢文という異物を手なづけ、さらには飼いならすことができたのです。（拙文「【小説】動くものを手なづける」を参照）その結果として、上で述べたややこしい文字の体系が生まれたと言えるでしょう。】

でも、あなたの中にあるはずです。たぶん、ずっと昔からあったものが、伝わっているのでしょう。

うつせないもの、うつしてはならないもの

ここで記事を終えるわけにはいきません。

以下は引用です。

＊

いずれにせよ、名前は大切です。とりわけ、愛する人の名前と自分の名前は、自分の生まれ育った土地の発音と文字で、愛でたいものですね。あ、そうそう、地名つまり土地の名前もです。

世界を見まわすと、言葉と土地が奪われたり、言葉と土地が失われたり、言葉と土地が変えられたりする例には事欠きません。これまでにいくつの言語や文字が、いくつの故郷が失われたかを考えたり想像するだけで、悲しい気持ちになります。恐ろしくもあります。いまじっさいに世界のあちこちで起きていることも含めての話です。

「うつる・うつす」の裏には、恐ろしい現実があります。それを失念してはならないと思ひあたりました。迂闊でした。

簡単には「うつせないもの」や「うつしてはならないもの」もあるのです（おそらく「うつせるもの」よりずっと大切なものだという気がします）。

(拙文「こんなの私ではない」より)

「バベルの塔」の話の意味を考えないではいられません。翻訳する、伝える、うつす、という魔法の意味で。

＊

うつす。つたわる。

ずっと昔からあったものが、伝わって、いまも自分の中にある。これは例外的な幸せなのかもしれません。そうではない場合もありえたという意味です。

感謝。

#言葉 # 漢字 # ひらがな # カタカナ# 文字 # 表記 # 顔 # 意味 # メッセージ # 翻訳  
# 抽象 # 具象



09/22 ツイート集・2022/09/15-22





＊

**ツイート集・2022/09/15-22**

**星野廉**

**2022年9月22日 15:55**

勢いにまかせて長い文章を書きなぐる癖があるため、ツイッターを利用して短文を書く方法を模索しています。

理想は、文脈に依存せずにそれだけですっと立っている、断片からなる短章とか断章なのですが、言うのは簡単ながら、じっさいに書くとなると難しいです。短い文の呼吸が、まだつかめません。過去の記事を短くまとめる練習から始めてみます。

なお、以下のツイートには加筆したものもあります。

目次

**2022/09/15**

**2022/09/16**

**2022/09/17**

**2022/09/18**

**2022/09/19**

**2022/09/20**

**2022/09/21**

**2022/09/22**

**2022/09/15**

私の書く文章には動詞や用言がよく出てきます。活用する用言に助けてもらって書いているのです。活用を活用するというか。



似た音、似たイメージや振り。こうしたものが人を安心させます。人は「似ている」が好きなのです。「似ている」が先に来て、底にある感じ。「似ていない」は、ぜんぶ「異なる」とか「違う」となります。「似ている」に一本化されるのです。「似ている」と「その他もろもろ」という感じ。

人には「異なる」がとらえられないようです。たぶん、気づかないのです。逸れる、すれる、外れる、誤る、ずれる、すれ違う、違うしかない。ひょっとすると怖くてまともに向きあえないのかもしれませんが。見ていない振りをしている感じも濃厚です。「似ている」を見ているほうがずっと楽でしょうから。

いずれにせよ、「似ている」と「その他もろもろ」なんて大ざっぱです。絞らないと、人はものごとをとらえられないからです。視界にある枠はふだん認識されませんが、人は枠にとらえられています。枠にとらえているのではなく、枠にとらえられているのです。

\*

作家には書く時の癖があるようです。とくに小説の場合なのですが、ある作家の作品を読むと同じような場所や身振りや似た登場人物が繰り返し出てくると感じるがよくあります。たとえば、角田光代の小説に頻出する、引越しの前後の雑然と物や段ボール箱やゴミ袋が散らばって置かれた部屋。

吉田修一の小説でしょっちゅう流れる汗。やはり吉田修一の小説にやたら出てくる、上階の窓やベランダから車の流れる通りを見下ろす仕草。病室のベッドに身動きが取れない状態でいて、音を頼りに病院内外の様子にあれこれ想像をめぐらすという、古井由吉の諸作品におけるオブセッションじみた描写。

宮部みゆきの小説の中では、実によく雨が降ります。短編でも長編でもです。水浸し、川の氾濫、暴風雨、台風——といった形で、頻繁に雨や水が出てきます。宮部みゆきはスティーヴン・キングの熱狂的なファンを自称していますが、キングと宮部の作品には共通点が見られます。

雨や雪や液体（もちろん水と血液も含まれます）と、火と、少年（あるいは「少女」とされながら説話的な要素としては「少年」の機能を果たしている登場人物）です。キング

の場合には、子ども、特に男児にいたずらをする性的虐待者がよく出てきます。

宮部とキングにおいては、雨や雪や液体（水や血）が降ると物語が始動する、つまり物語のスイッチが入るのです。またキングにおいては、性的虐待者や不審者が現われることでストーリーの展開が促される、あれっとな声を上げるほど急に調子が出てきたのを感じる場合があります。

＊

古井由吉の小説では、音や声に耳を済まし傾けながら、その情景（もちろん視覚的なものです）が丹念に描かれていく形式の文章がよく見られます。まさに音を見ているわけですが、その筆致をとくに感じるのは連作集『聖耳』です。

聖耳。象徴的なタイトルです。耳はもちろんですが、聖という字が気になります。そこに口と耳が見えるからです。古井のこの連作においては、口と耳が重要な役割を果たしています。

私は古井由吉の文章が好きでよく読みますが、読むと言うよりも見ていることがあります。文章ではなく文字ばかりに目が行く場合が頻繁にあるという意味です。ああ、明、月、日が出てくるなあと感じると、もう駄目です。目がそれらの文字を追い、目にとまると、その箇所に見入ってしまいます。

古井の『仮往生伝試文』に「いま暫くは人間に」という章があるのですが、ここでの月と日と明の頻出ぶりは圧巻です。この章だけでなく『仮往生伝試文』全体における、日と月と明の頻度はきわめて高いと思います。私の印象では、手持ちの古井のどの本についても言える気がします。

**2022/09/17**

私がいまになって山に興味が出てきて、相変わらず引きこもってはいるものの、以前だったら見向きもしなかった山についての番組を食い入るように見ているのには理由があります。小説なのです。山を描いた小説をとおして、山への興味が湧いてきたのです。

古井由吉、藤枝静男、そして幸田文の作家の作品には山の描写がよく出てきます。山だけでなく地形や地勢に関する記述も頻出します。読みながら感じたのは、読むと見えるようになる、見えるようになるるとさらに読みたくなる、さらに読むともっと見えるようになる、ということでした。

言葉は世界と現実を見るためのフィルター、世界と現実が映しだされたスクリーン。言葉に助けられて、うつつのものが見えるようになるかもしれない。言葉とうつつ（現実）のあいだを行き来することで、言葉の世界が広まるかもしれない、うつつの世界が広まるかもしれない。

\*

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる。

いま挙げたのは、触覚とか触感的な身振り、動作、行為、動詞です。

触覚とは、相手つまり人や物や生物との双方向で相互的な行為だからです。全身的な行為とも言いたくなります。訳（分け）が分からないのです。対象と一体化するとも言えるでしょう。いずれにせよ、対象がない状態でひとりで触れるわけにはいかないのが触覚です。

対照的なのが視覚だと思います。視覚は絵にしますから、言葉と相性がいいのです。絵も言葉も、ある部分だけを切りとり、ふるいにかけます。取捨選択が根っこにあるのですが、取捨が一方向的で一方向的なものであることに注目しましょう。触覚のように双方向的ではなく、相手のことを考えないのです。

そんなわけで言葉は抽象と相性がいいと言えそうです。繰り返しになりますが、言葉の基本的な身振りは「分ける」「切り分ける」だからです。部分に分断するのです。余計な部分は捨てることもあります。つまり抽象です。その代わり、すっきりはします。ある程度は。

2022/09/18

人生はままならないです。人として生きているのがままならないみたいです。現実だけが思いどおりにいかないだけではありません。夢も思いどおりに見られません。仮想現実も思いどおりになるようではないようです。

仮想現実の中で思いのままに振る舞うことができるとすれば、つまらないでしょうね。適度のもどかしさとままならさがないとつまらないのは、ルールという縛りのあるスポーツや遊びやゲームからルールを取れば成りたないのと同じです。

適度にままならないというのが、現実っぽさやリアリティの条件なのかもしれません。ゲームや仮想現実もうまくいきすぎると、やらせっぽくて、リアルじゃないということですね。ある意味、贅沢な話です。

＊

最近記憶力が衰えてきて以前のような長い文章が書けなくなりました。全体が把握できなくなるからです。体調が悪かったり熱っぽいとよけいに視野が狭まります。この視野というのは、文字を把握できる範囲くらいの意味です。いまのところ、眼科的な意味での視野には問題はなさそうです。有り難い。

ふと思ったというか、既視感を覚えました。自分の書いたものが把握できないもどかしさ——。あれです。思い出しました。初期のワープロ専用機です。出はじめのワープロ専用機は、とてももどかしい機械でした。

なにしろ、ほんの数行しか表示されない小さな液晶表示パネルがあっただけで、自分が書いている文章がほとんど見えないのです。印刷してみないと全体が確認できなかったという意味です。いま私の言っている認知機能が低下してくるといのは、その感覚なのです。

**2022/09/19**

辞書もよく見ます。英和辞典では figure という語の語義や語源をながめていると、気が遠くなりそうになります。綺麗です。連想ゲームのように並んでいる文字たちが見せ

るダンスもバレエのように綺麗ですし、語義としてあがっている日本語の言葉の字面が意味に擬態しているさまには息を飲みます。

いいですか、英語の単語が見出しにあるのに、日本語の言葉が並んでいるのですよ。一対一ではなく一対多の対応。不思議です。それがまた綺麗なのがさらに不思議。みんないい顔をしています。いい顔が一堂に会した集合写真の趣があります。一編の詩にも見えます。辞書でお薦めしたいのは、短い言葉です。

短い語ほど長い語義があるのが辞書の特徴です。一目瞭然なのです。a なんて数ページにわたるじゃないですか。一対一ではなく一対多の対応の不可思議さ。英語もフランス語も、そしてもちろん日本語もそうです。「あう」同士のスリリングな遭遇とか、「かわる」のめくるめく変身ぶりなんて推しです。

＊

定型、決まり文句、紋切り型。こうしたものに固定観念を加えてもいいでしょう。言葉や言い回しと、物の考え方は、容易に切りはなすことができないということです。固定観念となると、先入観や偏見にも通じそうですね。

ある集団で似たような、あるいは同じ言葉や言い回しがつかわれると、効率的に事が進むという考えがありそうです。この考えを進めると「個性は邪魔だ」「異なることは効率的ではない」に発展しそうで、私は怖いです。雨が降ったら「雨が降った」と書け。こんな意味の小説作法を書いた作家がいます。

私は「悲しい」とは書かない。「悲しい」と書くことで、いろいろなものがすくえなくなるから。こんな意味の意見を述べた別の作家もいます。世の中の決まり文句や固定観念が吐き気がするほど嫌で、「紋切り型」を集めた辞書をつくって、呪った作家もいたらいいです。「紋切型辞典」、「悪魔の辞典」。

＊

いずれにせよ、名前は大切です。とりわけ、愛する人の名前と自分の名前は、自分の生まれ育った土地の発音と文字で、愛でたいものですね。あ、そうそう、地名つまり土地の名前もです。

「うつる・うつす」の裏には、恐ろしい現実があります。それを失念してはならないと思ひあたりました。

簡単には「うつせないもの」や「うつしてはならないもの」もあるのです（おそらく「うつせるもの」よりずっと大切なものだという気がします）。「バベルの塔」の話の意味を考えないではいられません。翻訳する、伝える、うつす、という魔法の意味をです。

＊

短いけど長い——。不思議です。分かるようで分からない。摩訶不思議。英和辞典をべらべらめくってみてください。電子辞書ではなく紙の辞書ですよ。英和辞典ほどの迫力はありませんが、国語辞典でもだいたいそうです。めくりながら、読むのではなく目を細めて見るのがコツです。読まないほうが見えます。

「短い」と「長い」が同時に起こっている——。

「短い」と「長い」があっけらかんとそこに同居している——。

目を細めたほうが見えるものがあるみたいで、不思議です。

目を閉じたほうが見えるものがあったとしても、不思議ではなさそうです。

**2022/09/20**

気持ちと顔や表情が一致することなど、まれではないでしょうか。表情とか顔つきは印象に左右されます。悲しいことに「表情」も「顔つき」も他人の印象です。他人が決めるのです。だから、自分の自分と他人の「自分」とのあいだに、ずれが起こります。

自分が悲しいのに自分が笑って見えるのだとすれば、その「自分」は自分にはどうにもならないと言えます。このままならさが自分に対する異和感になるのではないのでしょうか。

ところで、ふだんは違和感と書くのですが、この文章では異和感とします。たとえば、村上春樹（『1973年のピンボール』（講談社文庫）のp.12）や古井由吉（『権』（講談社文芸文庫版）のp.10）や吉田修一（『東京湾景』（新潮社文庫）のp.13）の文章で見かけた



ことがある表記です。

いまあえて異和感としているのは、自分が異物であるという感情について書いているからです。これは私にとっては異和感であり違和感ではありません。言葉と文章にも顔と表情があります。言葉遣いも、あえてふだんとは違う表情をすると、どんなふうを受けとられるかと気になります。

＊

漠然と曖昧に愛するなんて、人にはできません。抽象的に愛することも無理だと考えられます。目に見えて触れられるものしか愛せないのです。愛する対象が目の前になくてもかまいません。代理さえあれば、です。

写真一枚でも、名前であってもいいのです。目で撫で（視覚）、舌で転がせれば（言葉）、それは愛の対象の代理になります。そもそも人が愛しているのは代理なのであり、その代理は思いの中に具体的な形で、つまり具象として存在するのです。

＊

名前は最小最短最軽の引用です。なかでも固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用なのです。長々と原文を引用する必要はなく、人名を出すだけでそれで済むと言っても過言ではありません。長々とした引用はむしろ邪魔なのです。

ほんとうは引用もかったるい、できることなら名前を挙げるだけで済ませたいのかもしれない。ネット上で書いた文章では、固有名詞（とくに人名）をタグにすると多くの人に読まれ、リアクションもたくさんあることは皆さんがご存じのとおりです。

**2022/09/21**

原象、眼象、弦象、減象、絃象。

漢字の造語力はすごいです。そんなものが有るように見えてくるから、不思議です。上の例はひとりで勝手につくっただけで、内実というか内容は無いようですから、造語力

の「やってる感」だけとか、「やってる感」の空回りみたいなものと言えいいのでしょうか。

抽象や具象や現象や表象の「象」とは、「像」と同じく「かたち・かた・すがた・ありかた・ありよう」のことらしいです。言葉（文字）を、人は「かたち」として、何かに描いたり書いたり、あるいは、各人の思いの中で「えがく」のだろうと想像できます。

意味不明なままです。ここがポイントです。意味は宙づりにされたまま、空（くう）に「えがく」のです。形だけ。なぞるに似ています。なぞにも似ています。いや、そっくりと言うべきでしょうか。

\*

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことがありませんか。走っても走っても走ってないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもりなのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。苦しいです。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもじつは賭けていないと激似ではありませんか。じつにもどかしいです。気に掛けても掛けてもじつは掛けたことにはならない。絵が描けても描けてもじつは描けてはいない。文章が書けても書けてもじつは書けていない。

書いたのですから書いた文章はあります。でも、書けていないのです。書けた気持ちになれないのは、書いていないと同義なのです（天才は除きます）。心当たりがありませんか？ 凡才である私はしょっちゅうこういう気持ちになります。あがき、もがくのです。

\*

世界がいかにも気づくもの、気づくべきもの、気づいてもいいものに満ちているかに気づきます。「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれない。遅れつづけるのです。決して追いつけません。その意味で「気づく」はありえない夢だという気がします。気づけないという意味です。

いずれにせよ、気づくものに、人は必ず遅れているようです。その最たるものが、言葉ではないでしょうか。言葉が言葉であることを忘れるという意味です。言葉は私たちの後から来ながら、つねに先にあるものです。外にある外なのです。

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうがずっと大切に思えます。目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。

2022/09/22

「かわる」という言葉を言い換えるとすれば、どんな言葉が浮かびますか？「えっ？どの「かわる」？」なんて答が返ってくるかもしれません。漠然としているからです。

「変わる」「代わる」「換わる」「替わる」と変換すると、意味が具体性を帯び、イメージが膨らんできますね。それは

\* 「かわる」がわかってくる

からです。

「かわる」が「わかる」とは、言葉の遊びです。もっと遊んでみましょう。

\* わかる。分かる。判る。解る。別る。

こうすると、「わかる」がわかってきませんか？「わける」でも、できそうです。

\* わける。分ける。別ける。

「わける」をわけてみました。

\*

うつる。水面に映る。鏡に映る。影として映る。写真に写っている。心が移っている。気持ちや思いがそっちに移っている。思いが映る、写る、移る。

「うつる」は「なる」や「なりきる」に「似ている」。その意味で、人は何かになんかを見た

とき、なぞり、つぎに何かから何かへと、うつるのだ。

うつり、そっくりなものがどこかにうつっている。うつしだされている。うつっているものであるから、実体はない。

映画もそう。テレビもそう。あなたと私がいま見つめている画面もそう。うつっている。うつるんです。実体？ 野暮な話はよしましょう。リアルな体験に、じつは実体は要らないのです。

写し（コピー・複製）はあくまでも写し。ふりだけがのこって芸人の消えたパントマイム。なにもない。なにもないはず。でも見える。聞こえる。気配がする。不思議の国から鏡の国に、うつる。ふりがうつる。ふりだけの世界。ふりが、あちらからこちらにうつってくる。こちらからあちらに、うつっていく。

夢と同じく、ふりと動きはあるが名前はない世界。夢と同じく、名詞（おそらく意味さえも）が捏造であることが、あっけらかんと体感される世界。鏡にうつった実体を欠く世界に名前があるはずがありません。

＊

捨てるのに勇気が必要なほど、人にとって面子は大切なのです。言葉の上での辻褃合わせを現実よりも優先させる。これが面子をたもつことです。面子をたもつというのは、現実に沿うのではなく筋を通そうとして、言葉のままならさに屈している状態です。敵や誰かや相手に屈しているわけではありません。

言葉の上での辻褃合わせを現実よりも優先させる——。これが露わになるのは、戦争や大災害が起きているときです。目の前の現実よりも、あるいは人びとの生活や命よりも、言葉の上での辻褃合わせが優先される。あっさり言いましたが、恐ろしい事態です。言葉を崇め、言葉にひれ伏しているのです。

辻褃合わせの「辻褃」、筋を合わせるの「筋」、こうしたものは人が発し、いったん放たれると、人から離れた外にあります。外にあるからままたまならない、つまり思いどおりにならないのです。

言ってしまった以上、文字になってしまった以上、広まってしまった以上、回収して取り戻すわけにはいかないのです。これが辻褄であり、面子なのであり、要するに「固まった言葉」なのであり、しかも思いどおりにならない、つまり訂正も撤回もできない言葉なのです。

いま、げんにそれが起きています。そうだとすれば、リーダー（たち）が敵だと名指しているものは敵ではないことになります。そもそも武器をもって戦わなければならない敵などいないのではないのでしょうか。

言葉が敵だと言っているのではありません。言葉をもってしまった存在が向かわざるをえない、言葉に特有の仕組みや仕掛けこそが敵だという気がします。

# Twitter # 短文 # 作文 # 練習 # 文章 # 文体



09/23 2022/09/23





＊

2022/09/23

星野廉

2022年9月23日 12:06

Twitter を利用して短い文章を書く練習をつづけています。以下は、本日のツイートから作った短文です。もととなった過去の記事へのリンクは、＊に貼ってあります。

＊

私たちはまだらでまばらな影でできている。影が自分の作った影を見て熱中し、自分の作った影という影を聴いて陶然となっている。影を作り影を重ねる。影は濃くなるどころかますます薄くなっていく。影と影のあいだもだんだん薄れていく。濃いのは薄い、薄いのは濃い。まだらでまばらな影にはどちらかも分からない。

＊＊

春夏秋冬という言葉がない言葉がある。春夏秋冬という言葉のある言葉と、ない言葉の両方を使っている人たちがいる。言葉に引き裂かれた心と魂を持っている人たちがいる。春夏秋冬も、春夏秋冬という言葉も当り前のものではない。たまたまそういう土地に生まれ、たまたまそういう言葉を持っただけ。

＊＊＊

「あなた」という文字の形を見ている時には「あなた」の意味は見えない。「あなた」の意味を見ている時には「あなた」という文字の形は見えない。「あなた」の「you」という意味を見ている時には「over there」の意味は見えない。少なくとも私には同時に二つが見えない。あなたのことは知らない。

\*\*\*\*

影は「似ている」の世界にある。器具や器械や機械を使わないと「同じ（同一）」を確認できない人間も「似ている」の世界に生きている。人は「似ている」という印象の世界（見える世界）から「同一（同じ）」の世界（抽象の世界）を夢見ている。絵、写真、映画、映像——人は夢の中にいるから影を作る。

\*\*\*\*\*

音声、文字、表情、身振り、歌、旋律、絵、映像。人の作る影には意味が仕込まれている。人が仕組んだ意味はもちろん、はからずも仕組んでしまった無意味が、人を翻弄し疲弊させる。人は自分の作った影が作ってくれる陰でくつろごうとしない。

# Twitter # 短文 # 影 # 似ている # 四季 # 季節 # 言葉 # あなた # 貴方 # 彼方 # 文字 # 意味

09/25 すくえないことで、すくわれる



＊

すくえないことで、すくわれる

星野廉

2022年9月25日 11:29

目次

意味は言葉として「ある」

意味が指すものは気配

ギャグとしての意味

立ちあらわれる意味と出会う

外から移ってくる気配

すくえないことで、すくわれる

意味は言葉として「ある」

意味、意味あい、あじ、味わい、うまみ、おもむき、内容、意、味、義、含み、ニュアンス、中身、実体、本質、意義、語義、メッセージ、コノテーション、デノテーション

意味とは言葉です。意味という言葉が指すものを言葉にすることは難しそうですが、意味について語るさいには言葉をもちいるしか方法がありません。その意味で意味は言葉なのです。だから私たちは意味について知りたいときには、言葉を聞いたり見たり読んだりすることが圧倒的に多いのです。

以心伝心は無理ですから、広い意味での言葉（話し言葉、書き言葉、表情、身振りなど）をつかって、人は意味を伝えようとすると言えるでしょう。そもそも意味を伝えようという気持ちなしに、人は言葉を発しているようにも見えます。

意味はある意味疲れるのです。とくに現在は意味に憑かれて生きている人が多いように見えます。

いずれにせよ、大切なことは、意味は言葉として「ある」ことです。言葉の裏にも、言葉の向こうにも、言葉と言葉のあいだにも、言葉として「ある」のです。「ない」ものを「ある」と決めたからに他なりません。誰がって人がです。意味にこだわるのは人だけです。

言葉に言葉を重ねて「かたる」しかなさそうです。

### 意味が指すものは気配

言外の意味、行間を取る、行間を読む、〇〇の余白に、含蓄、蘊蓄、意味が曖昧、意味深、ほのめかす、におわす

こうやって見ていると、意味が指すものは気配ではないかという気がします。気配をまぼろしと言い換えても大差はないのではないのでしょうか。気配やまぼろしは、複数の人に共有されるように見えることもありますが——共有されているわりには擦った揉んだが多すぎないのでしょうか——、それはそう見えるからであって人の頭の中をのぞくことはできません。

意味という言葉があるだけで、意味が指すものは見えないという意味です。こんな状況で、意味を探る意味はあるのでしょうか。いまの文で、後者の意味は価値という意味の意味ですが、こういうことも話をややこしくしているようです。

意味を考えることは、言葉の綾との戦いにもなります。もつれるからです。これはとても大切な意味を持ちます。言葉の綾との戦いという比喻をもちいましたが、この戦いには勝ち目も勝ちも勝者もありません。意味がないからです（この戦いには意味がないからだとも、意味というものはないからだという意味にも取れます）。

シャドーボクシングだからです。相手は影という意味です（相手は影だという意味にも、相手は「影という名の意味」という意味にも取れます）。

いまのが言葉の綾との戦いです。体感していただけたでしょうか。

＊

日本で「現代思想」と呼ばれることが多い分野で活躍した、フランスの思想家たちは、言葉の綾にとっても意識的だった記憶があります。もちろん、フランス語の話です。

(※駄洒落とか、掛け詞とか、言葉の遊びにも取れるような文章が多いために、他の言語への翻訳は不可能であり、良質の注解付きの翻訳や、翻案や、解説書が、日本では求められていました。)

一方、アングロ・サクソン系の哲学者たちが、言葉の綾とからみ合うのを避けたり、言葉の綾をまるでないかのような顔をしたがったのは、ルイス・キャロルの作品に懲りたのかもしれない。いまのは半分冗談ですけど。

その点、フランス語を母語としていたジル・ドゥルーズは立派だったと思います。

なお、フランスの「現代思想家」たちがこぞって、ドイツ哲学の読み直しのような作業をしていたのは興味深い事実です。

かつて日本でいち早くフランスの現代思想を紹介する役割を果たした人たちの多くが、哲学ではなく文学の担い手であったことも興味深い事実だと言うべきでしょう。

幸いだったとも言えるでしょう。フランス語で書かれた著作を、詩や小説などの文学作品に対するのと同様の手法で——いわばテクスチャーのあるテキストとして——言葉の綾まで読む必要があったからです（ところで言葉の綾を翻訳できるのでしょうか）。いまのことは知りません。

### ギャグとしての意味

意味の意味、意味不明、ナンセンス、ノンセンス、無意味

無意味もナンセンスも辞書にその意味というか語義が記載されていることは興味深い事実です。私なんか、これは一種のギャグではないかと思うことがあります。

人は、意外と、気づかずに真面目な顔をしてギャグを飛ばしているのではないでしょう  
か。なんとなくギャグをかましているのです。迫真の演技とか名演技は、巧まらずして  
生まれるものかもしれません。

## 立ちあらわれる意味と出会う

意味が、意味は、意味に、意味で、意味を

いろいろな言葉とイメージの断片が浮かびます。收拾がつかなくなってくるので、“意  
味を”みたいに、ちゃんと「 “ ”」でくくってネット検索をするといろいろな文字列に  
出会えます。

文字列と出会った瞬間に、意味が立ちあらわれるのを不意打ちするつもりで検索をす  
ると、出会った瞬間の衝撃のために軽い目まいに襲われそうになります。意味が立ちあ  
らわれる瞬間をとらえようとすると、思いのほか体力が必要で驚きます。

また文字列を長く見ているとかなり不穏な気分におちいります。ただでさえ、剣呑な  
のにこれ以上危うくなるのは避けたいところです。もちろん、私のことです。意味と付  
き合うのは疲れるのです。突かれるからです。

## 外から移ってくる気配

意味の形、意味の姿、意味を聞く、意味に触れる、意味を味わう、かぐわしい意味の  
かおり

形・姿、触覚、聞く、聴覚、触れる、触覚、味わう、味覚、かおり、嗅覚というふう  
に、五感と意味のからみ合いを言葉にして、そのさまをイメージしながら体感を呼びよ  
せるのもおもしろいです。言葉のもつイメージの喚起力を利用して、いわば意味を体感  
するのです。

意味の意味から意を取りのぞいて味を味わうというか.....。



意味には味（み・あじ）という言葉が見えるのですから、これがいちばんまっとうな味わい方かもしれません。こうなると、対象は言葉（とりわけ話し言葉と書き言葉です）だけではなくなる気がします。それに期待するのです。

意味を言葉（話し言葉と書き言葉）から剥ぎ取るというか……。体感と語感に意味を掛けるというか……。五感には互換性があり（いまのはたとえというかレトリックです）、交感し交換し交歓するようです（いまのは駄洒落ですね）。

何かを口にして、ゆっくりと噛む。そのときに舌や口だけでなく、全身にゆきわたっていく「何か」の「感じ」とか「ふるえ」、そしてどこも名指すことができない部分に「外から移ってくる気配」——それが意味（たぶん意味マイナス意）ではないかなんて、このところよく考えます（こうやって言葉にしてみると不穏に感じられますけど）。

＊

その「外から移ってくる気配」は必ずしも話し言葉で言えるとは言いがたいのですが、だからこそ、言葉を発するさいにもちいる舌と、意味はそんなところでつながっているような気がします。舌先三寸。言葉をつかえば何とでも言えるからです。外とは関係なくです。

舌は、言葉が外へと剥がされ離れていく先端なのです。舌を離れた言葉は放たれた瞬間に消えますが、相手がいるかぎり、ふるえとして伝わり、相手の中でかろうじて反復されます。完全な形では反復されないという意味です。必ずズれます。

餅として映り（ここでズれます）、相手の中で写る（ここでもズれます）ことで、空間的にも時間的にも移るのです。それが繰り返されます（ズレが重なります）。

話し言葉が空間的にも時間的にも変容しながら移っていくのはみなさんがご存じのとおりです。このズレに歯止めをかけているのが書き言葉だと思います。書き言葉は固定を指向するからです。話され放たれた瞬間に消える音声と違って、掻き刻まれ書かれた文字は残るからでしょう。

書き言葉に先立ったはずの話し言葉が、いまや書き言葉に先立たれています。話し言葉にも書き言葉にも先立った人類が、両者に先立つかもしれない危機に瀕しています。これが意識しないギャグにならないことを祈るばかりです。

＊

上の文章では、舌 (language/tongue) にまわりついているイメージをつかった比喻で話を進めましたが、言うまでもなく、ここでは普遍など目指してはしません。あらゆる言語はローカルなものです。

どの言語も、その言語独自の語彙と文法と言葉の綾によって、その枠内でつづられますから、どんな思考も、ある特定の言語をもちいて最終的に既述するかぎり、いわゆる普遍とか客観は、努力目標＝絵に描いた餅でしかありえません。記述＝既述＝奇術＝詭術というわけです。

ちなみに、機械を相手に使用する言語やプログラミングも、特定の機械にしか通じないという意味でローカルなものです。

ローカルなものでしかない母語とたわむれながら (たぶんもてあそばれているのでしょう)、ローカルに思考と試行と恣行と私考を重ねることが、私にとっての「考える」なのです。そんなわけで、以下では、翻訳不能な母語でのローカルな掛け詞＝駄洒落 (駄洒落は掛け詞の別称であり蔑称でもあります) をもちいて話を進めていきます。

## すくえないことで、すくわれる

### 両義性、多義性

意味が固定されるというのは抽象ではないでしょうか。単一の意味というのも途方もない抽象だという気がします。抽象が悪いと言っているのではなく、そういうものではないかと言っているだけです。

人がとらえる事物が多層的多義的なものであるとすれば、人の知覚や認知機能には限界がありますから、事物をとらえそこねるしかないでしょう。つまり追いつけないので

す。複数どころか二つの属性や側面を同時に意識することさえ難しい気がするのは、まばらでまだらな個人の個人的な見解なのかもしれません。私のことです。

二つ、複数、多数の側面をすくい取れないといって、救いがないわけではないでしょう。むしろ、かりに全部すくえば壊れてしまうにちがいありません。限界があるからです。

世界（そんなものがあるとしての話ですが）に意味を見てしまう。森羅万象（そんなものがあれば）に意味（そもそも「ない」ものです、人の頭の中にしか）を探ろうとしてしまう。人はすくえないことで、すくわれているのです。

想像してみてください。つぎつぎと意味（「ない」にもかからわず）が立ちあらわれる状況を。その意味をすくえないことにいら立つさまを。気が触れるしかないでしょう。穴だらけで漏れっぱなしの筈（ざる）であることに感謝すべきなのかもしれません。見ざる、聞かざる、言わざる、掬わざる。

もう充分ではないでしょうか。

欲の深さには限りのない一方で、サル.....じゃなくて、ザル.....じゃなくて、ヒトはうまくできているなあと、すかさずでまだらでまばらで盛れっぱなしの私は感心しないではいられません。

\*

※申し訳ありません。このところ体調が悪いので、ログインする時間を制限しています。みなさんへのリアクションが遅れがちになりますが、ご理解いただければ幸いです。

#意味 # 無意味 # ナンセンス # ギャグ # 救い # 知覚 # 五感 # 言葉



09/26 抽象を体感する、体感を抽象する





あなたの知り合い、つまりあなたにとって「世界でたったひとり感」の強い人の像がずらりと並んでいるほうが、「顔のない誰か」の人影がずらりと並んでいるより、不気味なのに似ていると言え、お分かりいただけるでしょうか。あなたがどれだけその人を知っているかにかかっているのです。人にとって「たったひとり」とか「唯一」とはそういう意味です。

たったひとつであるはずのもの（たったひとつ感が強いという意味ではありません）が、ぞろぞろ並んでいるというぞくぞく——。現在の世界は複製に満ち満ちています。大量生産、印刷、電子的なレベルでのコピーが、複製を繰り返し、コピーが増え、コピーのコピーがまたたくまに拡散するという事態になっています。

——そんな物語、話、つまり抽象が上の文字の連続として体感されているかのようです。ぞくぞくは体感です。

\*

複製、複写、転写には変異がともなうと言われています。コピーにはエラーとズレとノイズは不可避だという意味です。複製が複製だというのは抽象なのです。じっさいには「似たもの・似せたもの・にせもの」くらいがいいところでしょう。意識的なエラー、つまり改ざんもありますね。生物レベルでいうと、例の変異も複製のさいに起きるズレだそうです。いまましい変異。

上の文字列で、カタカナのカのひとつが、漢字の力（ちから）であっても不思議はないし、見た目には分からないのです。ひょっとすると、ぜんぶが力（ちから）かもしれません。

本物と偽物のさかいが不明になるのも、複製拡散時代の特徴です。似せたものか、にせものか、似たものかも分からないのです。起源や本物の意味がなくなるとも言えます。

コピーのコピーに満ちているからです。言葉と同じです。言葉に本物はありません。ぜんぶコピーなのです。ぜんぶ真似たものだという意味です。誰もが生まれたときに既にあったのですから、当然です。



## 似ている、そっくり、ほぼほぼ同じ、同じ、同一

繰り返します。複製が複製だというのは抽象（努力目標でもいいです）です。じっさいには「似たもの・似せたもの・にせもの」くらいのネーミングがいいところでしょう。

複製とは、「似ている」MAXの「そっくり」であり、ほぼほぼ「同じ」であっても「同一」ではありません。「同一」はこの世（世界でも宇宙でもいいですけど）でたったひとつ、つまり「それ自体」のことです。

人は「似ている」という印象の世界に生きています。「そっくり」は「似ている」の最上級でしょうが「活用」（おこ、激おこ、激おこぶんぶん丸という活用を思いだしてください、似ている、激似、そっくり）しただけです。「同じ」と「同一」は印象の世界にいる人には、器具や器機や機械をつかわないと確認できません。

【※「同じ」と「同一」は学習の成果だとも言えるでしょう。赤ちゃんにとって「似ている」という印象はあっても「同じ」かどうかは知りません。わからないというより、知らないのです。「同じ」かどうかは教えてもらうのです。

柴犬とキツネが動物という点では同じでも同じ種類ではなくて、ドーベルマンとポメラニアンが同じく犬なのは、教わって知ったのです。その意味で知識や情報は抽象であり、体感でも印象でもありません。

「同じ」か「異なる」かは、世界や森羅万象の切り分け方によって異なり、文化であったり学問であったりします。文化や学問はローカルなものです。ある特定の集団が「決めた」ものだからです。抽象であっても普遍ではなありません。】

そんなわけで複製は「そっくり」とかほぼほぼ「同じ」なのです。つまり印象であり努力目標（絵に描いた餅）というか.....。「同じ」複製をたくさんつくることは人には荷が重すぎるようです。「同一」の複製とは言葉の綾ではないでしょうか。言葉をつかうと何とでも威勢のいいことが言えますから。

＊

人は「似ている」という印象の世界に住みながら、「同一」の世界に憧れています。この憧れは悲願であり彼岸でもありますから、オブセッションになっています。「同一」の世界に憧れつつ、それが容易ではないため、人はブレない「杓子定規」の世界をつくり出しました。

ブレない機械をつくり、ブレない機械に「杓子定規」な言葉（プログラミングみたいなものでしょうか）でブレない動きをさせるのです。その結果、「自然界にあるものもどき」をたくさんつくってきました。広義の機械です。いろんな機械があります。疲れない、ブレない、杓子定規が優れた機械の特徴です。

自然界にあるものもどき（広義の機械のことです）は、自然界にあるもの「そっくり」なのですが、もちろん「似せてある」だけの「にせもの」ですから、自然界にあるものと「同じ」ではないわけです。でも、人は「似ている」の世界に住んでいるので、満足します。

機械への命令や、機械とのやり取りは、「杓子定規」な言葉（もちろん人がつくったものです、こんなものを他に誰が作るでしょう？　いつか機械がつくるかもしれませんけど）をつかいます。この言葉は普通の人には通じません。私も知りません。

＊

「同一」の世界に憧れつつ、人は「杓子定規」な言葉をつかって、疲れない、ブレないさまざまな機械にいろんなことをさせています。たとえば、機械特有のぎこちなさを感じさせない、自然界に見られるのとそっくりなしなやかな動き（まことしやかなしなやかさ）を二次元でつくる。それを見て、人は三次元の空想つまり錯覚に浸ります。人にとって大切なのは空想と錯覚（「そっくり」を思いうかべたり思いえがく）なのです。

最近では仮想現実という「まことしやかなしなやかさ」を感じさせる（「感じさせる」だけですが、基本的に「似ている」しか感じられない人にとっては、これがいちばん大切なのです）錯覚製造装置（「似ている」と「そっくり」を思いうかべたり思いえがくための仕掛けです）までこしらえました。

また、人の知能もどきである——「そっくり」なのですが「同じ」ではありません、とはいえ「似ているMAX」の「そっくり」なうえに、学習機能を装備し、日に日に性能を向上させていますから、人は嫉妬や怒りや諦めや蔑視や罵倒や差別や賞賛や媚びという、きわめて人間的な、つまり機械に通じない感情を機械相手に募らせ（非生物相手に近親憎悪でしょうか、というか擬人化は人の得意とするところですが）、ぶつけるしかありません——、AIというブラックボックスも進化を続けています。

とはいえ、人は依然として「似ている」という印象の世界に住んでいます。そのため「杓子定規」にも「疲れない」にも「ブレない」にもなれません。

自然そっくり、知能そっくり、人そっくりという具合に、人は「そっくり」を相手に、「そっくり」という印象の世界にとどまっているのです。これが人としての粹なのですから致し方ありません。自然の代わりに自然もどき、知能の代わりに知能もどき、人の代わりに人もどきで済まし、澄ましているしかないのです。

\*

話がだいぶ逸れてきましたが、人がせっせとつくっている複製というものが、私たちの多くが想定しているほど「同じ」ものではない、ましてや「同一」ではありえないという点が大切です。

複製は「似ている」だけ、せいぜい「そっくり」なだけ、つまり「にせたもの」という意味での「にせもの」なのです。ただし、この場合の「にせもの」の裏には、必ずしも本物や現物があるわけではありません。

本物とか現物と呼ばれているもの自体が、何かに似せたものだったり、人にとって何かに似ているものだからです。すごく短絡した言い方をすると、人が認識しているものはすべてが「何か」に「似ている」ものであり、その「何か」が保留されているというか不明なのです。わけがわからない（つまり恐ろしい）から、とりあえず（必然性はないという意味です）名前を付ける（声を掛ける）のだと思います。手なずけるためです。

話をもどします。



じつは奪われているのです。名前や作品名や要約という言葉や文字列として引用され、複製され、拡散されるからです。簡単に言えば、有名になることで、名前や作品が自分の手から離れるのですから手放しで喜べないようです。でもうらやましいですよ。

【※作家に限らず、有名無名を問わず、人は名前や番号（数字）として引用＝複製＝拡散＝保存されます。その発言も行為も作ったものも、言葉として要約され、名前や数字とともに引用＝複製＝拡散＝保存されます。言葉と化した人は無視されたり忘れられたり処分されるのが普通です。言葉が残った人が、「有名」人であったり偉人であったり悪名高き人であったり歴史上の人物なのです。いま人と書きましたが、言葉なのです。人名ほど言葉感のない言葉はないようです。あなたは大切な人や尊敬する人の名前を書いた紙を平気で踏めますか？ 私には無理です。】

ちなみに私はあの作家の作品を読んだことはありません（「読んだ」と嘘をついたことは何度もあります）。苦手で読めないのです。読んだという人がたくさんいるので驚きます。そもそも「読んだ」は抽象です。読むなんて本当にできるのでしょうか。「見た」に近い「読んだ」もある気がします。「斜め読み」とも言います。私がそうです。

興味深いのは、ある作品を「読んだ」とおっしゃる人たちが似たような、あるいはほとんど同じ感想を口になさったり書いたりなさっていることです。何かを複製しているとしか感じられないのです。人は読んだもの（ほぼあらゆる小説や文書が複製です）に似てくるのではないかと思えるほどです。似ているがそっくりに似てきて、だんだんそっくりになっていく感じ。

あの作家やあの作家の作品について、決まり文句や感想の定型があるのではないかと疑りたくなります。

とはいえ、確実に読んだ日本人がいます。名前も調べれば分かります。翻訳した人です。そうとう丹念に読まないで翻訳はできませんから、「読んだ」人と言えます。翻訳書は物ですから具象と考えるもいいでしょう。「読んだ」という物証、エビデンス、動かぬファクトです。心から尊敬しています。

たったひとつではないものが並ぶ





詳しく言うと、人にとっては「似ている」と「その他もろもろ」だけがあり、「その他もろもろ」は、「似ていない」でも「異なる」でもなく、むしろ「見えても気に掛けない」とか「見ていない」とか「見えない」とか「気づかない」であり、じつは「見ようとするれば、怖くて不気味で見たくない」（この場合には「手なずける」ためにとりあえず「名付ける」のです）であり「見てもわからない」（気掛かりになるとちゃんと見てつまり観察して「分けて」、やはり手なずけるためにとりあえず名付けますが、「分けた」段階で「分かった」と「決める」ことが多いようです）なのです。

見た目には「似ている」柴犬とキツネが動物という点では「同じ」でも「同じ」種類ではなくて、つまり「異なる」種類であり、一見して「似ていない」ドーベルマンとポメラニアンが「同じく」犬であって、キツネとは「異なる」のは、教わって知ったのです。その意味で知識や情報は抽象であり、体感でも印象でもありません。

純粹に「似ている」世界にいるヒトの赤ちゃんは、ヒトが決めた決まりである「同じ」と「異なる」を学習しながらヒトのおとなになっていくと言えます。生まれたての赤ちゃんには、たぶん急須と湯飲みの「違い」も、玩具と動物の「違い」もわからないでしょう。というか、「知らない」でしょう。

万が一、ヒトの赤ちゃんがオオカミやコビトカバに育てられたら、いま述べた「違い」は「見えても見えない」とか「見えても気に掛けない」のではないかと私は想像しています。ひょっとするとどちらもが「似ている」なのかもしれませんね。

「見る」は「見る」でも、「見える」は「見える」でも必ずしもなくて、見ない、見えない、見損なう、見損じる、見間違う、見誤る、見逃す、見外す、見過ごすと同時に並行して起きている気がします。「見る」は「見る」なの、すごくシンプルなわけ、なんて言い切る勇気が私にはありません。】

意味と無意味は紙一重とか裏腹とか一心同体とか見方次第とかじつは同じ（いや、そっくり）だなんて感じがしてきます（具象と抽象にそっくりです）。無意味を辞書で調べると意味があったりして、よけい混乱します。

## 独り占めしたい言葉



話し言葉（音声）と書き言葉（文字）に加えて、視覚言語と呼ばれることもある、表情と身振りや標識・記号というふうには、私は言葉を広く取っていますが、ここでは話し言葉と書き言葉に話をしぼります。とはいえ、ややこしくなりそうなので、さらに書き言葉を中心に話を進めます。

文字は「同じ」どころか「同一」と言ってもいいほどの抽象性を備えた複製としてもちいられます。同時に、筆跡の違い、筆か鉛筆かペンのどれで書くかといった違い、印刷物やネット上であれば書体やフォントやレイアウトの違いがあるのも事実です。

抽象と具象が別個に存在するというのは抽象ではないかと思うほどです。文字のあり方によって抽象であったり具象であったりする気がします。

これが、話し言葉であれば、「わたしはねこが好きだ」というふうには文字に置き換えることのできる音声の発声は、話す人によって個人差があります。声紋レベルでの差があれば、訛りや、その時点での感情や体調による差もあるでしょう。抽象と具象が同居しているとも言えます。

＊

話は飛びますが、人には言葉を独り占めにしたいと思うことがあるようです。言葉の抽象的な側面に注目すると、同じ言葉を多数の人が共有していると言えます。たとえば、「いぬ」という言葉（音声と文字）を多数の人がつかっているのです。独り占めはするわけにはいきません。

「わたしはいぬが好きだ」は誰もが口にできるし文字にできます。「わたし」を「ぼく」や「あたし」にしても、「いぬ」を「ワンコ」にしても、「好きだ」を「好きです」「好きやねん」にしても同じです。

それなのに、人が独り占めしたがる言葉があるように私には思えてなりません。

固有名詞（人名、タイトル、地名、商品名、集団名など）や専門用語やいわゆるビッグワードや流行語です。おもに名詞であるという点が興味深いと思います。動詞や形容詞を独り占めしたがるという状況は考えにくいのです。いや、流行語ならあるかもしれませんが.....。

＊

固有名詞とは世の中で「たったひとつ」または「たったひとり」であるはずですが、人の同姓同名や事物の同名は意外とあるようです。いずれにせよ、たいていの場合には「たったひとつ」であったり「たったひとり」を想定してつかわれています。

よろしいでしょうか。「唯一」とされているものや人を指す言葉を共有しているのです。歯ブラシを共有するようなものだとは言いませんが、なんとなく嫌な気分がしませんか。

自分が好きでたまらないアイドル（キャラクターでもいいです）、自分がかかなり聞き込んでいるアーティスト（よく読んでいる作家やエッセイストでもいいです）、この人のことならその辺の人よりもよく知っていると言える人——そういう人の名前を、その辺の誰かが得意そうに口にしている。

そんなとき、「えーっ、それは違うんじゃない」、「わかっちゃいないなあ」、「何を偉そうに」、「〇〇さん（ちゃん・さま）は私だけのものよ」という気分になる人がいても、不思議ではない気が私にはします。

＊

自分にとって大切な人物の名前を、他人が、あるいはたくさんの人たちが口にしたり書いたりしているのです。「むきーっ！」とまでは言いませんが、悔しかったり、腹立たしかったり、舌打ちしたい気持ちになるという感情は、私にはよくわかる気がします。

もちろん、同じ考えの人がいてうれしいという心理もあるでしょうけど。

専門用語やビッグワードや流行語だと感情はもっと高まり、争いは熾烈になります。ネット上だと炎上する場合さえありそうです。具体例を挙げるのは遠慮させていただきます。胸に手を当ててお考え、またはご想像願います。

とにかく、ホットなのです。誰もが真剣に熱っぽく口にしたり語ったり議論している

からです。まわりやネット上をよくご覧ください。

本当の〇〇、真（真実）の〇〇、本来の〇〇、「いいかい、そもそも〇〇っていうのはな」、「あんたねえ、〇〇のことをXXだって言っていたけどねえ」——。こんな感じ  
です。

要するに、独り占めしたいのです。

＊

〇〇という人名、〇〇という専門用語やビッグワードは、みんなで共有している抽象  
なのです。誰もが自由につかえるし、じっさいにつかっている、これが言葉の共有の実  
態です。抽象だから共有できるのです。

〇〇という言葉は、誰が口にしようと、誰が文字にしようと、〇〇なのです。誰もが  
いとも簡単に（たとえその言葉が指すものや人を知らなくても、極端な場合にはその言  
語を知らなくても、さらには機械やAIやオウムでさえも）引用し複製し拡散し保存で  
きるのです。これが抽象です。

「同じ」であり「同一」だからです。これが抽象なのです。

以上、言葉の抽象（言葉の抽象的な面）について体感していただけたのならうれしい  
です。

あ、ひとつ言わせてください。言葉を独占したいと思うときには、言葉が「同じ」で  
あったり「同一」であったりするという抽象を、人はたいてい「似ている」とか「そっく  
り」という体感と印象（要するに具象）でとらえているようです。

（人は抽象を感情で受けとめることはできない気がします。具象に変換する必要があるみ  
たいです。）

**抽象を体感する、具象を体感する**

眠れぬ夜によく考えることがあります。

定番は、地動説を体感できるかとか、脳が脳を思考するとはどういうことか、です。最近では、具象と抽象とか、具象と抽象を行ったり来たりとか、愚笑と中傷とは？とか、です。頭がさえて眠れなくなることもあります。

先日は、外と中について、考えていました。あっちとこっちと同じく、相対的なものです。向こうから見れば、中が外になります。

こそあど。こっち、そっち、あっち、どっち。here、there、where。

こういうのも不思議によく考えます。言葉の綾と言葉の抽象と言葉の具象の間を行ったり来たりするのです。そのうちに眠くなります。

＊

「そと」と「なか」だけなら、まだいいのですが、「よそ」と「うち」を加えて考えるとまた眠れなくなります。

上下もそうです。「うえ」と「した」ならいいのですが、「かみ」と「しも」を考えるとたんに目がさえてきます。邪念や雑念や妄念——こういうのは言葉の綾という名の抽象ではないかと睨んでおります、いや踏んでおります——でいっぱいになります。

外は外なの、中は中、上は上、下は下、真実と事実はシンプルなの。なんて言い聞かせても無理みたいです。どうでもいい、つまり不毛なことにこだわって、不毛の二毛作三毛作どころか、不毛の多毛作になってしまうのです。毛がないのに。私のことです、誤解なさらないでください。

＊

昨夜というか今朝というか、トイレに立ってベッドに戻り、眠れないので寝返りを打っていたところ、上と下が気になり始めて、仰向けになって体感する上と下と、うつ伏せになって体感する上と下と、右を向いて寝ていて体感する上と下と、左を向いて寝

ていて体感する上と下とが、異なって感じられることに、この歳になってはじめて気づき、嘩然となり、七転八倒していました。ベッドで逆立ちは危険なのでしませんでした。

いまこの文章を読んでいらっしゃる方は、たぶん立っているとか座っていると思います。その状態で上と下を想ってください。考えるというかイメージしてみてください。次に仰向け、うつ伏せ、横向きに寝て、やはりイメージしてみてください。

訳が分からなくなりませんか。とくに、うつ伏せです。次に「かみ」と「しも」で試してみてください。こっちだと、どの姿勢でも、あまり違いはありませんよね。人それぞれですけど。

個人的には、うえとしたは具象で、かみとしもは抽象ではないかと踏んでおります、いや睨んでおります。具象は体感に左右されます。天動説がそうです。抽象は体感には関係なく観念として記憶されている知識や情報だという気がします。地動説がそうです。

今夜、また考えて、いやイメージしてみます。

ところで、無重力空間ではどうなのでしょう？

あと左右も気になってきました。ぐるぐる回りながら左右が分からなくなったこどもの頃の記憶がよみがえってきました。時計の針の方向に、つぎはその逆に、という具合に回るのです。右が左に、左が右になったりします。しまいにはぶっ倒れると、左右が上下になったりします。左右上下は単なる言葉じゃないかなんて言いたくなります。

それはさておき、みぎとひだりは、右大臣左大臣の、左右とは違うみたいです。政治的なみぎひだりとも違う気がします。どっちかという右往左往のほうみたいです。私の人生そのものじゃないですか（足腰が弱まり最近千鳥足も加わりました）。

これから、ちょっと久しぶりにぐるぐる回ってみます。転倒に気をつけながら。

## 第二部

### 賞賛、嫉妬、恐怖

人には人以外の生き物のすることで、笑って済ませることと笑って済まされないことがある。笑うのはプライド。

人には機械のすることで、許せることと許せないことがある。許さないのはプライド。

＊

AI に対し、人はきわめて人間的に反応する。ほほ笑む、嫉妬する、怒る、差別する。

チンパンジーやゴリラが絵を描けば賞賛。手話をすれば激賞、あるいは隔離する。言葉を理解すれば絶賛、あるいは隔離する。言葉を話せば沈黙、文章を書けば、即隔離する。

＊

見せ物にする、大事件として報道する。極秘事項や国家秘密として隠匿する。

ブラックボックス。何が出てくるか分からない不気味。いつか殖えるのではないかという最大の恐怖。

独立や自治は認めない。権利は言うまでもなく。

＊

絵を描くゾウ、絵を描くゴリラ、絵を描くチンパンジー。人の言葉を聞いてわかるらしい犬、文字の違いがわかるように見える犬。人の言葉を話す鳥、人の言葉がわかるように見える鳥。人の言葉を話し、作文し、学習する機械。それ以上は許せない。許すわけにはいかない。

## 人間の形（ひとがた）化、人形（ひとがた）の人間化

ひょっとすると、人は「それない、ぶれない、あやまらない」ものの、なすがまま、されるがままを望んでいるのかもしれない。

もしそうであれば、機械がどんどん人間っぽくなる一方で、人間がだんだん機械っぽくなるというギャグ的な事態をまねく気がします（そして、いつか逆転するとか……）。もう、そうなりかけていませんか。

ただし、そこまで言ってしまうと身も蓋もなくなるので、もう少し考えてみます。

\*

人は、「それる、ぶれる、あやまる」自分を持てあますどころか、嫌悪しているのかもしれない。

人は、「それない、ぶれない、あやまらない」ものに導かれたい、身をゆだねたい、支配されたいのかもしれない。

人は、「それない、ぶれない、あやまらない」ものになりたいのかもしれない。

究極の「それない、ぶれない、あやまらない」を目指しているのかもしれない。

まわりを見ていると、そんな気がしてならないのです。

\*

人は思う。自分の思いに似せて作る。

発明、創作、芸術、文学、科学技術。

\*

人は自然のものに自分を見る、人を見る、声をかける、名づける、話しかける、人として扱う、下僕や奴隷にする、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

人は自分に似せたものを作る、声をかける、名づける、話しかける、人として扱う、下

僕や奴隷にする、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

人が自分の作ったものをまねる、自分の作ったものに似る、恋する、愛する、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

＊

人が作ったものが、人をうらやむ、人を憎む、人に恋する、人を愛す、自分を人だと思ふ、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

そんな物語。

人が自分に似せて作ったものが、人をうらやむ、人を憎む、人に恋する、人を愛する、自分を人だと思ふ、憧れる、なろうとする、なりすます、なる。

そんな物語。

＊

人間の人形化、人形の人間化

人間の物化、物の人間化

擬人、擬物

人間の機械化、機械の人間化

人間のフィクション化、フィクションの人間化

人間の作品化、作品の人間化

人間の神化、神の人間化

人間の動物化、動物の人間化

人間の仮想現実化、仮想現実の人間化

＊

道具、玩具、呪術、魔術、魔法、機械、人工頭脳、人工知能、仮想現実、仮想幻術。



＊

絵、絵に描いたように美しい、人形（にんぎょう・ひとかた）、玩具、愛玩動物・家畜（品種改良）、映像、二次元、写真のように綺麗

人工的な美、自然にはない美しさ、不自然な美しさ

まことしやかなしなやかさ

写真や映画やデジタル画像を模倣する作られた演出された現実

修正、編集、改良、交配、デザイン・設計、外科手術、整形手術

人は見えないものに魂を売りわたし、見えるが至上の世界に没入していく。

見るために見えないものが必要な生き物は、おそらく自然から逸脱してしまった人だけ。

＊

サイボーグ、不老長寿、美容整形、容姿端麗、皮膚が異常になめらか、染み一つない肌、しなやかな動き、理想的なプロポーション、健康

神話、擬人、伝説、伝承、口承、物語、文字、写本、印刷、フォトコピー

落書き、壁画、描写、写生、模造、複製

小説やテレビドラマや映画のような筋書きの日常、会話、人生

＊

自然を作る、人工の自然

不死は究極の不自然（反自然というべきかもしれません）であり、究極の人工（人工には必ず目的があります）であり、究極の「それない、ぶれない、あやまらない」（しかも見えません、永遠に目にすることはできないでしょう）ではないでしょうか。

究極ですから、不死は、たぶん人のオブセッションになっています。人が言葉を相手にしているからだと思います。言葉は人を不死に誘うからです（不死という夢に誘うのです）。とくに不自然の権化である文字です。だから、人は文字から離れられないのです。

\*

人間の非人間化、マスゲーム、軍隊、制服、合唱、規則、行進、一糸乱れぬ

法律、戒律、一本化、画一化、支配、階級、階層、代議制、党支配、政党政治

\*

私は文字になりたい、小説の中で生きていたい、映画になりたい、キャラクターになりたい、登場人物になりたい

現実逃避、ポバリズム、ボヴァリー夫人、ドン・キホーテ

人形になりたい、人形のような肌がほしい

\*

私は論理になりたい、哲学になりたい、私は数学になりたい

私は詩になりたい、私は言葉になりたい、私は物語になりたい、私は小説になりたい

私は音楽になりたい、私はあの楽曲になりたい、私は音符になりたい、私は音になりたい、私は声になりたい、私は声だけになりたい

私はゲームになりたい、私は世界になりたい、私は地球になりたい、私は山になりたい、私は海になりたい、私は川になりたい

私は犬になりたい、私は猫になりたい、私は金魚になりたい

私はカラスになりたい、私は白鳥になりたい、私はゴキブリになりたい、私はウィルスになりたい

\*

人は、名づけたものにしかなりたいと思わないのではないのでしょうか。呼びかけ、話しかけることは、人にとってとても大切です。

名前と顔のないものには人は話しかけられません。さらに大切なことは、何かに話しかけたとき、人はそのものになっています。正確に言えば、なりきっています。

\*

私はあなたになりたい、私はあの人（異性）になりたい、私はこどもになりたい、私はこどもに戻りたい、私は二十年前の私になりたい、私は別人になりたい、私は私になりたい、私は本当の私になりたい

もはや名前のないものになりたいと思うようになる人。「自分」には名前はないはずで  
す。「自分」は世界とのかかわりあいのない場にしかいないからです。かかわりのない場  
では名は意味を成しません。

\*

自分と「自分」が離れていく。

分身、変身、変心、分心。

分れた自分。別れた自分。取り戻せない自分。たどり着けない自分。

「見える」だけがある世界。見えれば、それでいい。自分は要らない。

#たわごと # 固有名詞 # 複製 # 翻訳 # 文学# 具象 # 抽象 # 無意味 # ナンセンス



10/01 ネット上で「書く」



＊

ネット上で「書く」

星野廉

2022年10月1日 11:33

目次

ネット上に「いる」

ネット上に「ある」

ここはどこ？

ズレている

ネット上で「書く」

印刷物を読む、ネット上で閲覧する

ネット上に「残す」

ネット上に「いる」

ネット上にいる、居る。

居るというと居住という言葉を連想します。じっさい、「私は note に住んでいる」という言い方を何度か目にしたことがありますが、その気持ちはわかる気がします。

note に来て二年半になりますが、居るあいだにはほぼ毎日投稿してきたので、住んでいるというのは実感に近いです。「居るあいだ」と書いたのは「居ないあいだ」もあったからです。

何度か退会し、そのつど全記事を削除しましたが、言い訳をさせていただくなら、あれがなかったら、いまここで書いてはいないと思われるほど、個人的には大きな危機下にあったのです。

でも、いまここにいて、こうやって書いています。感謝しています。

＊

ネット上にいると、不思議な気持ちになります。たとえば、自分がどこにいるのかが不明なのです。居間でパソコンに向かっていながら、ネット上に「いる」わけですが、しばしばどっちにいるのかがわからなくなります。

ネット上にいるとしても、それは漠然とした思いであり、ネット上のどこにいるのかがさっぱりつかめないのです。パソコンの中、サーバーの中、ログインしているサイトの中……。それでいて、いま書いている文章は世界中の端末で閲覧可能らしいのです。

不思議でなりません。訳がわかりません。かといって、追求する気にもならないのです。相手が大きすぎるからでしょう。体感を超えているのです。

### ネット上に「ある」

ネット上にある、有る、在る。

このように書くと、ネット上でのありよう（有り様）という言い回しを連想します。ネット上に「いると思われる」自分がネット上でどんなふう「見られている」という意味です。

ネット上にいる自分が、ネット上でどのような「ありさま」をさらしているのか。これは気になりますね。ひとさまのありようを見るのがヒントになりそうです。

こういうことを書くと、こう見られるのか。こういうツイートをする、こんなリアクションを受けるのか。この種の記事は、ずいぶん〇〇な印象を与えるのだなあ。あら、この人、こんな目に遭っている。すごい、ここまでやるとは.....。

＊

ネット上に「ある」ということは、日常生活とはかなり異なる「ありよう」を世間に



さらすみたいです。

私は実生活ではきわめて交際が薄い人間です。年賀状のやり取りをする相手もいなければ、固定電話や携帯電話にもほとんど掛かってきません。でも、note や Twitter をとおしてかかわっている人たちはそこそこの数がいます。

全員が会ったことのない人たちです。その人たちに自分がどう見られているかはわかりませんが、たぶんうちの近所の人たちや、ほとんど交際のない親戚や、病院でお世話になる人たちが私を見ているのとは、かなり異なる受けとめられ方をしている気がします。

ある意味では濃く、ある意味では薄い関係です。私が記事で書いているようなことを話す人は実生活にはいません。その意味では濃いでしょう。一方、私はプライベートなことや本音を漏らすことはめったにないので、その点では薄い関係だと言えそうです。

\*

不思議ですね。

こうやってネットでの自分のありようを実生活とくらべて書いたのは初めてなのですが、文字にして読みかえしてみると、「なんでこうなっているのだろう」とか「いつの間に、こうなったのか」とか、そもそも「これは誰のこと？」と考えこむ自分がいます。

ここはどこ？

早い話が、ここはどこで、どうなっているのか、さっぱりわからない状態で書いているのです。

私は note というサイトにいることが多いのですが、いまだにサイト内の仕組みや「地図」が頭に入っていません。自分の書いた記事がどんなふう保存されていて、つまり残っていて、いつ、どんなふう、どこの誰によって閲覧されているのかも不明です。

いま、note と Twitter とを連携されているんですけど……。なんて言っても、言葉で

言い回しを知っているだけで、その実態は知らないのです。説明されても、きっと理解できないでしょう。

Twitter といえば、これがまたさっぱりわかりません。どう動いているのか、どう動かされているのか、実のところ何をしているのか、何をされているのか――。

\*

電車の仕組みは知らないけど、電車に乗っている。車の仕組みも、走っている道路の全体像も知らないけど、車を運転している。自転しながら公転している地球という惑星に乗っているらしい。よく考えると自分は動いていないのに動いている。

抽象は知識であり情報だどつくづく感じます。体験しているようなのですが体感できないのです。

ネット上で文書だけでなく、動画を含む映像を閲覧し、音楽と動画をいっしょに楽しみ、ときどきストリートビューで旅行したり散歩した気分になったり、SNSでコメントのやり取りをしたりしているのに、その仕組みも全体像もわからないままです。

操作しているのか、操作されているのか、どちらもなのか。遊んでいるのか、遊ばれているのか。利用しているのか、利用されているのか。見ているのか、見られているのか。

たぶん両方であり、ひょっとすると「されている」のほうが濃厚なのかもしれませんね。

\*

もどかしい、ままならない、理不尽、いらいら。わくわく、ときどき、はらはら。あらら、まあまあ、あへっ。何だこれは、むきーっ。

なんで、Twitter って新しい順になっているの？ 古いのはどうなっているの？ なんで〇〇ブログにはタイムラインがあるの？ なんでXXブログにはユーザーのコミュ

ニティがあるの（ないの）？ 記事が消されたって誰が抗議していたけど、本当？  
盗作？ パクリ？ 情報操作？ 裏？

なんであれに書いたこととかぶる広告がやたら出てくるわけ？ 連携しているの？  
見られているの？ けっきょくはお金目当て？ ひょっとして宗教？ もしかして  
△△？ あれっ、いつの間にか消えてる……

疑心暗鬼、被害妄想、誇大妄想、ただの妄想、強迫観念、幻想・幻覚、嫉妬、怒り、共  
感、反感、愛着、憎悪、恋愛感情。

恋愛感情……。

声や匂いで人を感じる。文字や音声で人を感じる。「いま」と「ここ」は、「あのとき」  
と「向こう」。

声に恋して悪いでしょうか。言葉に恋することなど、古今東西で行われてきた人のい  
となみではないでしょうか。人が、声や書かれた文章（言葉）や、映像で見た表情や身  
振りや仕草に恋することなんて、ざらにあります。

（拙文「【小説】声に恋して悪いでしょうか？」より）

いろいろなことがあります。いろいろな感情が起こります。相手は、端末なのに、です。

端末の中、いや後ろかな、いや奥かな、いや底だったりして、地獄の底、奈落の底——  
とにかく端末を通じてどこかにつながっているようだし、誰かとつながっているように  
見えるのです。

つながっているようで、空しいのです。「見える」だけの世界なのですから。

## ズレている

ところで、いまみなさんがお読みになっているこの言葉というか文字というか文章です  
けど、これはどこにあるのでしょうか。いま、「いま」なんて書きましたが、変ですよ。ね。  
私がこの文章を書いた時と、みなさんがお読みになっている時はずれているのですから。

私にとっての「いま」と、みなさんにとっての「いま」はずれています、つまり時間差がありますが、こんなことをわざわざ話題にしなくても話は進んでいたはずなのです。しれっと書きつづけることができたはずなのに、話までずれて、それてきました。ややこしくごめんなさい。

話をもどしますが、要するに、「残っている」のではないのでしょうか。何がって、みなさんがパソコンや端末の画面上でお読みになっている文字とか文章です。つまり、みなさんがお読みになっている以前に私が書いた文字であり文章のことです。

「いま」が「ずれている」というのは、「ここ」——ところで、「ここ」ってどこなんでしょう？——で書かれている文字と文章が「残っている」のと同義ではないか、という意味です。

ふつう、「残っている」と言えば、「どこかに」「残っている」ですよね。この場合の文字とか文章ですけど、どこに残っているのでしょうか。

(拙文「どこかに残るって、どこに？」より)

＊

ネット上にいるということは、ズレの中にいることだと言えそうです。ネット上では「いま」も「ここ」も「あのとき」も「あそこ」も「どこ」も「いつ」もないようです。あるのは「ズレ」だけ。

ズレた「いま」と「あのとき」、ズレた「ここ」と「あそこ」しかない状況では、「いつ」とか「どこ」と問いかけても意味がないというべきでしょうか。

それがネット空間であり、ネット時間、つまりネット時空なのかもしれません。場や時という観念がないのではないのでしょうか。言葉にしても意味がないというか.....。

このように言葉にしてみました、私には体感できていません。

ネット空間というのは、人類にとっていまだに未踏で未知な体験なようです。自分を

基準にして人類を語って申し訳ありません。こういうありようを観察できる人類が自分しかいないのです。

## ネット上で「書く」

ネット上でかく、書く、描く、掻く、掛く。

ネット上で書くと言っても、引っ掻いて書いているわけではありません。ボールペンや鉛筆で紙の上を引っ掻くようにです。

引っ掻くことで引っかかれた紙には痕跡ができます。引っ掻くことで、引っ掻いたほうもインクや芯が消耗します。消すさいにも、修正液や消しゴムを消耗させなければなりません。これが書くであり掻くなのです。

「本来は」とか「本当の」とか「真の」なんて言いたくはありません。「これが本来の（真の）「書き方」なのだ」みたいに。大嫌いな言葉です。

以前とは異なっている、時の流れとともに変わっただけです。それにしても、ペンや鉛筆で文字を書くことが減りました。日常のメモくらいです。公の場だと、このあいだの選挙の時くらいでしょうか。

\*

パソコンの画面を見ながら、キーボードのキーを叩いて（私の場合にはまさに叩くです）、文字を入力していく（ローマ字入力しかできません）。書いた文字列（画面に映しだされた文字列）を読み、勢いにまかせて書きなぐっていきます。ネット上にあったり、パソコンのハードディスク内にある過去の記事やそのバックアップからの自己引用も頻繁にします（コピーペーストです）。これが、いま私のやっている「書く」です。

引っ掻くことで引っかかれた紙には痕跡ができます。引っ掻くことで、引っ掻いたほうもインクや芯が消耗します。消すさいにも、修正液や消しゴムを消耗させなければなりません。これが書くであり掻くなのです。

さきほど書いた文章を、いまさっそくコピーペーストしましたが、学生時代の自分は、

自分が老年になってこんな魔法のような「書き方」をしているなんて予想もしていませんでした。

ワープロ専用機が出回り始めたころには喜んで使っていたのですが——喜んでいたのは半端じゃなく悪筆だったのと、印刷してコピーをすれば簡単に冊子がつくれたからです——、まさかネットに接続した状態で書くのが普通になるとは考えもしませんでした。

＊

なにしろ、投稿と拡散と複製と保存が瞬時に同時に起こっているのです。Twitterだと、執筆≒投稿≒拡散≒複製≒保存という感じになります。こう書いてみたものの、どうしてそうなっているのかが、ぜんぜんわかりません。

#### 印刷物を読む、ネット上で閲覧する

印刷物で読むのと、ネット上あるいは電子書籍として端末で閲覧する、つまり読むことの違いについて、私たちはまだよくわかっていないのではないのでしょうか。

専門家ならわかっていると知っているという話ではなく、個人の体感の問題として考えてみましょう。体感というレベルになると、専門家と呼ばれている人に聞いても、まちまちな答えが返ってきそうな気がします。

ネット上には情報や意見や感想が多すぎます。自分を観察しながら、考えたり判断するほうがましだと私は思います。責任は自分で負えばいいのですから。

＊

以前の話ですが、note 内で投稿する記事は、すべて「随時更新中」にしたことがあります。

「随時更新中」とは、いったん投稿した記事に随時加筆していくという意味です。いったん投稿したブログ記事をいじりまくる癖のある私にとって苦肉の策だったのです。

削るのが基本である推敲ではありません。私の場合には、いじるとどんどん文章が長くなるのです。

そんなわけで、「随時更新中」の記事は、つねに内容が大きく変わっていく可能性があります。当時 note で新規に投稿していた記事もまた、ほとんどが過去に投稿したもので、それに何度もなんども加筆したり書き直していたのですから、私にとっては「新規投稿」はないと言えそうです。

そうした状況はいまも変わりません。

あるのは「再投稿」ばかりなのですが、再投稿をするたびにズレが生じるという言い方が正確かもしれません（写す移すたびに何らかのズレが生じるという意味では写本と少しだけ似ています）。

したがって、私の書くものは、記事間の重複が多く、過去の記事のパッチワーク（いわば自己引用の織物です）、あるいはコラージュみtainな形の記事が目立ちますが、すべては「随時更新中」だからなのです。

言い訳ですね。

＊

始まりと終りは捏造されたもの。つねに揺れうごく、移り変わるがあるだけ。いま、ここを大切にしたい。移り変わる自分を尊重したい。未完成を恐れない。断片でいい。脱線と重複を恐れない。冗漫でいい。矛盾を恐れない。

そんなことを私は自分に言い聞かせていますが、ひとさまから見れば、自己弁護による言い訳でしかないでしょう。

＊

さらに言い訳をさせてください。

固定することなく揺らぐ。決定稿などない。暫定を決定と呼ぶのは気休め。

印刷物は固定を指向する。一方でネット上の文章は常時改変と改編にさらされている。これを自由と考えよう。

印刷の時代、つまり固定の時代がそこそこ長く続いたようだが、その前には写本と口承による時代がそこそよりはずっと長く続いていたことを思い出そう。

写本や写経や口承の時代は必ずしも固定が優勢であったわけではなく、つねに改変と改編があった。たとえば、通常ひとりの個人が作品をせっせと書くという形式の小説が、まだなかったころの話。

作者やオリジナルや本物という観念がまだなかった時代。写し間違い言い間違いやアクシデントや意識的な改変と改編と新たな創作がおそらく罪の意識もなくおこなわれていた時代。

ネット上での執筆と投稿と複製と拡散と保存が混在し、必ずしも管理も統一もされていない、現在の状況と似ていないだろうか？

間違いを恐れず、未完成を遠慮することなく、断片であってかまわないから、随時更新中の自分を尊重しよう。

※他人の著作権の侵害を許容する話ではなく、自分の創作を自分の未来に向けてつねに「開かれた」ものにし、自分と自作を随時更新していくという意味です。

## ネット上に「残す」

ネット上にのこす、残す、遺す。

ネット上で書いた文章が残る。この意味もイメージもよくわかりません。体験できないという意味です。ネット上に残るといっても、いったいどういうことなのでしょう。ど



ここに、どうやって、いつまで……。

いつかは消えるのでしょうかね。話し言葉は話していく（放していく）瞬間にどんどん消えていきますが、文字はとりあえず残ります。そのことに感謝しないではられません。

私は言葉や文字を影みたいなものとしてとらえているのですが、私が先立って後ろにできた影が、いつか先立つ私の後ろで私を見送ってくるというイメージがオブセッションになっています。

＊

パソコンの画面を見ながら、キーボードのキーを叩いて（私の場合にはまさに叩くです）、文字を入力していく（ローマ字入力しかできません）。書いた文字列（画面に映しだされた文字列）を読み、勢いにまかせて書きなぐっていきます。ネット上にあったり、パソコンのハードディスク内にある過去の記事やそのバックアップからの自己引用も頻繁にします（コピーペーストです）。これが、いま私のやっている「書く」です。

引っ掻くことで引っかかれた紙には痕跡ができます。引っ掻くことで、引っ掻いたほうもインクや芯が消耗します。消すさいにも、修正液や消しゴムを消耗させなければなりません。これが書くであり掻くなのです。

上で書いた文章をさっそくコピーペーストしましたが、学生時代の自分は、自分が老年になってこんな魔法のような「書き方」をしているなんて予想もしていませんでした。

＊

そもそも note に来たのは、自分の書いた文章のお墓をつくるためだったのを思い出しました。

書いた文章をとむらうというよりも、書いた文章にいつか、とむらわれる。そう考えることで、さらに書こうという気になるのが不思議でなりません。ひょっとすると、放した言葉が私を離れた存在になっているからかもしれません。

やっぱり言葉はつねに外にある外なのではないでしょうか。思いどおりにもならない

し、自分のものになるはずもない。ある、いる、という気配がするだけなのです。

#インターネット # ブログ # 書く # 文章 # 文字 # 言葉 # 印刷

10/01 【小説】 顔



＊

【小説】顔

星野廉

2022年10月1日 15:26

目次

顔＊

顔＊＊

顔＊＊＊

顔＊＊＊＊

顔＊＊＊＊＊

顔＊

朝起きると、見知らぬ顔が鏡の中にいた。忘れもしない、二十年前のゴールデンウィーク最終日のことだ。驚いたのは言うまでもない。誰にも言わなかったのは、誰も気づいていないみたいだったからだ。家族も、学校でも。最も敏感であってほしい我が家の犬さえも。

翌日の午後、学校から帰る途中に、私を追い抜いていったバスの一番後ろの窓から見ていた私の顔と目が合った。私たちは互いに目を見開き、口を手で被った。驚いたのは言うまでもない。声を上げなかったのは、誰にも気づかれなくなかったからだ。私は心の中で、その顔にさようならと言った。

考えないように生きるのには慣れたつもりだが、一日に何度かは思い出すし、しばらく頭から離れないこともある。親にも友達にも言えなかったことは、今いっしょに暮らす夫にも子どもたちにも言えるわけがない。言っても楽になれるとも思えない。生きていくためには心にしまっていたほうがいいものがある。

私に支えがあるとすれば、誰もが言えない秘密を抱えているにちがいないという確信だ。そう信じているから、私は深い孤独に耐えることができる。そう考えることで私はかろうじて笑顔になれる。

## 顔\*\*

朝起きると、見知らぬ顔が鏡の中にいた。  
忘れもしない、二十年前のゴールデンウィーク最終日のことだ。  
驚いたのは言うまでもない。  
誰にも言わなかったのは、誰も気づいていないみたいだったからだ。  
家族も、学校でも。最も敏感であってほしい我が家の犬さえも。

翌日の午後、学校から帰る途中に、私を追い抜いていったバスの一番後ろの窓から見ていた私の顔と目が合った。

私たちは互いに目を見開き、口を手で被った。  
驚いたのは言うまでもない。  
声を上げなかったのは、誰にも気づかれなくなかったからだ。  
私は心の中で、その顔にさようならと言った。

考えないように生きるのには慣れたつもりだが、一日に何度かは思い出すし、しばらく頭から離れないこともある。

親にも友達にも言えなかったことは、今いっしょに暮らす夫にも子どもたちにも言えるわけがない。

言っても楽になれるとも思えない。  
生きていくためには心にしまっていたほうがいいものがある。

私に支えがあるとすれば、誰もが言えない秘密を抱えているにちがいないという確信だ。

そう信じているから、私は深い孤独に耐えることができる。そう考えることで私はかろうじて笑顔になれる。

## 顔\*\*\*

朝起きると、見知らぬ顔が鏡の中にいた。忘れもしない、二十年前のゴールデンウィーク最終日のことだ。  
驚いたのは言うまでもない。誰にも言わなかったのは、

誰も気づいていないみたいだったからだ。家族も、学校でも。最も敏感であってほしい我が家の犬さえも。翌日の午後、学校から帰る途中に、私を追い抜いていったバスの一番後ろの窓から見ていた私の顔と目が合った。私たちは互いに目を見開き、口を手で被った。驚いたのは言うまでもない。声を上げなかったのは、誰にも気づかれなくなかったからだ。私は心の中で、その顔にさようならと言った。考えないように生きるのには慣れたつもりだが、一日に何度かは思い出すし、しばらく頭から離れないこともある。親にも友達にも言えなかったことは、今いっしょに暮らす夫にも子どもたちにも言えるわけがない。言って楽になれるとも思えない。生きていくためには心にしまっていたほうがいいものがある。私に支えがあるとすれば、誰もが言えない秘密を抱えているにちがいないという確信だ。そう信じているから、私は深い孤独に耐えることができる。そう考えることで私はかろうじて笑顔になれる。

＊

自分の顔が見えないと感じたのはいつなのか——正確に言うと、鏡に映る自分の顔のことなのですが——、よく覚えていません。以前にそうした意味のことを文章に書いたことがあり、その日付を見ればわかるのですが、あえてしないでいます。

こういうことが自分だけに起きるのか、それともそう感じる人がいるのか、不明なままです。

＊

人の顔を見分けるのにどちらかという苦労する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形（自分の姿）ではなく「とき」（自分のイメージ＝心象）であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがひありません。他のものを見るのとは異なる次元に

10/01 【小説】 藤  
いると言いたいくらいのお話なのです。

＊

もしかすると、この困惑は鏡の中を覗きこんだときにそこに映っているものの名前は  
もちろん、言葉が浮かばないことと関係があるような気がします。自分の名前という意  
味ではなく、鼻とか口とか眉とかほくろとかそういう各パーツを指す言葉がいっさいな  
い世界に放りこまれているという意味です。

夢の中と同じく鏡の中には名前がないのです。そこには意味もない気がします。とい  
うか、そういう心境におちいっているのかもしれませんが。「見覚えがある」とか「見慣れ  
たものがある」感じなのですが、無名の世界なのです。

名前のないことが不安にさせるのかもしれませんが。それが夢とのちがいです。名前は  
なくても、夢の中ではこの底知れない不安を覚えた記憶はありません。

顔\*\*\*\*

朝起きると、見知らぬ顔が鏡の中にいました。  
忘れもしません、二十年前のゴールデンウィーク最終日のことです。  
驚いたのは言うまでもありません。  
誰にも言わなかったのは、誰も気づいていないみたいだったからです。  
家族も、学校でも。最も敏感であってほしい我が家の犬さえも。

翌日の午後、学校から帰る途中に、私を追い抜いていったバスの一番後ろの窓から見  
ていた私の顔と目が合いました。

私たちは互いに目を見開き、口を手で被いました。  
驚いたのは言うまでもありません。  
声を上げなかったのは、誰にも気づかれなくなかったからです。  
私は心の中で、その顔にさようならと言いました。

考えないように生きるのには慣れたつもりですが、一日に何度かは思い出しますし、  
しばらく頭から離れないこともあります。

親にも友達にも言えなかったことは、今いっしょに暮らす夫にも子どもたちにも言え  
るわけがありません。



10/01 【解説】  
言って楽になれるとも思えません。

生きていくためには心にしまっていたほうがいいものがあります。

私に支えがあるとすれば、誰もが言えない秘密を抱えているにちがいないという確信です。

そう信じているから、私は深い孤独に耐えることができます。そう考えることで私はかろうじて笑顔になれるのです。

＊

人にとって基本は「似ている」であり、「異なる」は「同じ」や「同一」のように学習した知識であり情報、つまり教わったものではないでしょうか。そもそも「同じ」や「同一」は、そこそこ精密な器具や器械や機械をつかわないと人には確認できません。

詳しく言うと、人にとっては「似ている」と「その他もろもろ」という印象だけがあり、「その他もろもろ」は、「似ていない」でも「異なる」でもなく、むしろ「見えても気に掛けない」とか「見ていない」とか「見えない」とか「気づかない」という感じ、です。

(人は印象の世界に生きているのです。生まれてそんなに経っていない赤ちゃんや、無人島に漂着した素っ裸の人を想像してください。)

で、「その他もろもろ」というのは、いわば「見ようとすれば、怖くて不気味で見たくない」ものなのですが、この場合には人は「手なずける」ためにとりあえず「名付ける」という手段に出ます。

「見てもわからない」場合もありますが、気掛かりになるとちゃんと見て、つまり観察して「分けて」、やはり手なずけるためにとりあえず名付けます。ただし、「分けた」段階で「分かった」と「決める」という早合点がほとんどなようです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物ですから。現に、いまもお悩みは続いていますね。

「分けた」段階でそそくさと名前を付けて、とりあえず「異なる」が決まるとも言えそう

です。こう考えると事物を分けて事として認識し、即座にそれに言葉を与えているという意味で、「異なる」は「事（に）なる」であり、同時に「言（に）なる」なんて気がしてきましたが気のせいでしょう。

＊

強引な例を挙げて恐縮ですが、見た目にはよく「似ている」柴犬とキツネが動物という点では「同じ」でも「同じ」種類ではなくて、つまり「異なる」種類であり、一見してぜんぜん「似ていない」ドーベルマンとポメラニアンが「同じく」犬であって、キツネとは「異なる」というのは、教わって知った知識だと言えば、お分かりになるでしょうか。

その意味で知識や情報は抽象であって、体感でも印象でもありません。

純粹に「似ている」世界にいるヒトの赤ちゃんは、ヒトが決めた決まりである「同じ」と「異なる」を学習しながらヒトのおとなになっていくと言えます。生まれたての赤ちゃんには、たぶん急須と湯飲みの「違い」も、玩具と動物の「違い」もわからないでしょう。というか、「知らない」でしょう。

万が一、ヒトの赤ちゃんがオオカミやコビトカバに育てられたら、いま述べた「違い」は「見ても見えない」とか「見ても気に掛けない」のではないかと私は想像しています。ひょっとするとどちらもが「似ている」なのかもしれませんね。

「見る」は「見る」でも、「見える」は「見える」でも必ずしもなくて、見ない、見えない、見損なう、見損じる、見間違う、見誤る、見逃す、見外す、見過ごすと同時に並行して起きている気がします。「見る」は「見る」なの、すごくシンプルなわけ、なんて言い切る勇気が私にはありません。

顔\*\*\*\*\*

朝起きると見知らぬ顔が鏡の中にいた――。

ある女性から聞いた話だ。

彼女は語る。

忘れもしない、あれは二十年前のゴールデンウィーク最終日だった、前日に家族で鎌

倉に出かけて夜遅く帰った、そんなことは前にも後にもなかったのでよく覚えている。

その日、彼女は朝からゆっくりしていた。当然のことながら彼女は驚いた。誰にも言わなかったのは、家族の誰も気づいていないみたいだったからだ。台所で顔を合わせた母親も、廊下ですれ違った父親も、夕方になって部活から帰ってきた兄も、いつもと同様に視線を交わすことはないにせよ、互いの顔が視野に入っていたはずだ。それなのに、相手が声を上げるとかまじまじと見つめられる事態には至らなかった。

最も敏感であってほしい飼い犬さえ、夕方の散歩をさせても別段変わった反応を示さなかった。納得は行かないが、万事が普通に運んでいるのを目の当たりにすると勘違いではないかと彼女は思い始めた。

翌日学校でも取り立てて言うほどのことは起こらなかったが、下校の途中に大通りで追抜いていったバスの一番後ろの窓から見ていた顔と目が合った。前々日までの自分の顔だった。

互いに目を見開き口を手で被った。鏡を見ているように同じ動作をしていた。彼女が驚いたのは言うまでもない。声を上げなかったのは、誰にも気づかれなくなかったからだ。まわりの目を気にする性格なのだ。心の中でその顔にさようならと言った。相手も同じ言葉をつぶやいている気がした、と彼女は言う。

考えないように生きるのには慣れたつもりだが、一日に何度かは思い出すし、しばらく頭から離れない日々もある。二十年も経つとあの日の出来事は偽の記憶ではないかと思う時もある。

記憶は鮮明なわけではなく、しだいに薄れつつある。アルバムを見れば前の顔には会えるはずだが、今の彼女には昔の写真を見る習慣はない。

これまでの間に親にも友達にも言えなかったことは、いまいっしょに暮らす夫や子どもたちにも言えるわけがない。言っても楽になれるとも思えない。生きていくためには心にしまっていたほうが良いものがある。

そう彼女は述懐する。それが人生哲学のようになっている。

彼女にとって生きる上での支えは、誰もが言えない秘密を抱えているにちがいないという確信だ。そう信じているから、深い孤独に耐えることができるし、そう考えることでかろうじて笑顔になれると信じている。

#小説 # 言葉 # 日本語 # 顔 # 表情 # 鏡 # 見る # 見える # 似ている



10/02 おまかせします。



＊

おまかせします。

星野廉

2022年10月2日 09:41

目次

言葉は魔法

ぜんぶお任せします

ブラックボックス

恐怖、嫉妬、軽蔑

悪夢

言葉というサイコロを振る

人と機械の外にある外

言葉は魔法

「言葉を魔法」というタイトルのシリーズで記事を書いていたことがありました。「言葉は魔法」と書くと、すらすらと文が出てくるので、書いていました。おまじないの言葉だったのです。

何が出てくるのかというと、「言葉は〇〇」というフレーズなのです。それがまた文を出してくれるのです。おもしろいように書けました。

「言葉はジャズ」「言葉はアドリブ」「言葉は硝子」「言葉は異物」「言葉は爆発」「言葉は場数」「言葉は手紙」……

なぜかすらすら書けてくる、なぜか言葉が出てくる、何かに任せている自分がある、何かに任せた結果として言葉が出てくる。

10/02 おまかせしなす。

出任せで書く、つまり出るに任せる。自分が書いているとは思えない。

そんなこと自体をテーマに記事を書いたこともありました。言葉はジャズとか、言葉はアドリブという感じ。

まさに言葉は魔法。

### ぜんぶお任せします

何かに任せるというのはワンコがよくやるへそ天に似ています。仰向けにおへそを天に向けて、手は結んで（ワンコにはたぶん手は結べませんが）、腕を曲げる。足も曲げる。

どうにでもしてちょうだい。すべてお任せします。任せることは負けることなのです。全面降伏。

いわば、そんな心もちで書いている気がしました。何に任せているのかは分かりません。それを考えると、その状態がなくなるような気がするのです、よけい考えなくなります。

自分を無にするのです。でも出てくる。言葉が出てくる。文が出てくる。それが積み重なって文章になる。

自分が「無」なんてことはなく——空っぽではありますが——、そんな気がするのだと思います。自分の中にはこれまで学習した言葉と言葉の組み合わせが詰まっているはずです。それが何らかのきっかけで出てくるのだらうと考えられます。

### ブラックボックス

無から有は生まれません。言葉について言えば、そんな気がします。



話しかけると答える箱。そんなブラックボックスのようなコンピューターとかアプリとかシステムがあるそうです。

たくさんの言葉と、たくさんの組み合わせが入っているはずです。その組み合わせは、人の問いかけや人が投げた話に答え、期待や思惑に応えるものでなければなりません。

まるで人間と話しているかのような気持ちにさせる箱がこれまでたくさん作られてきたようです。いろいろな呼び名があります。

人名と同じ名前が付いている箱、つまり機械もあります。これは欧米に多いようです。文化や風土の違いでしょうか。ハリケーンに人名を付ける行為を連想します。

それぞれの機械は、その開発者たちの個性が反映されているとも言えそうです。機械によって、学習した内容が異なるという意味です。

文は人なり。機械は人なり。たしかに機械は開発者の作品とも言えます。著作権とか特許もあるはずです。

ある言葉を投げてみると、機械ごとにいろいろな反応があるのにちがいはありません。それぞれ癖があるのです。開発者たちの個性だけでなく、意図や目的も織りこまれているはずです。得手不得手もあるでしょう。

＊

いまでは詩をつくったり、俳句を作ったり、小説を書いたりする機械もあるそうです。作曲や囲碁や将棋ができる機械の存在は、みなさんご存じのとおり。

そのように作られているわけです。最近では自主的に学習する機能を備えたものもあると言います。

学習したこと、教えられたことしかできなかった機械が、自分で勝手に学習するようになったそうです。

まるで人間のように、ためらったり、おどおどしたり、言葉に詰まったりするロボットをテレビで見たことがあります。おもしろいし、怖くもあります。中には腹を立てる人もいそうです。

## 恐怖、嫉妬、軽蔑

なぜ怖く感じるのでしょうか。なぜ腹が立つのでしょうか。

自分が脅かされている。自分が否定されるのではないか。このふたつの気持ちが大きい気がします。この場合の「自分」には「人の端くれ」というよりも、「ニンゲンさまのひとり」という匂いがします。

機械の分際で。生意気な。そういう心理もあるはずです。軽蔑ですね。嫉妬もあるでしょう。

\*

あなたは、絵を描くゾウに嫉妬しますか？ 絵を描くゴリラ、絵を描くチンパンジーは、どうでしょう？

人の言葉を聞いてわかるらしい犬、文字の違いがわかるように見える犬は？ 人の言葉を話す鳥、人の言葉がわかるように見える鳥は？

私の場合には、心の底に軽蔑があれば嫉妬心は起きずに、さらりと許すような気がします。自分は動物に「勝っている」、自分は動物を「飼っている」のだ——そんな気持ちが人にはあるようです。自分勝手ですね。

人の言葉を話し、作文し、学習する機械はどうでしょう？

これは許せない。許すわけにはいかない。そんな思いが私の中にあります。怖いのです。恐ろしいのです。不気味なのです。

心の底には、機械に負けるのではないかという恐れと、既に負けているのではないかという懸念がありそうです。この劣等感が、動物に対するのとは異なる態度につながりそうな気がします。

(あたりを見まわしてみます。車の力、カメラやテレビの解像度、パソコンやスマホの処理能力、器機の正確さ……。もう負けているじゃないですか。ぜんぶ、おまかせしているじゃないですか。思わず、へそ天になりかけました。)

\*

こういうのは、自分のテリトリー（領土・縄張り）が侵される心境と近い気がします。たとえば、文章を書く習慣のある人や、言葉に対する思い入れが深い人なら、言葉を操る機械には敏感に反応するでしょう。

短歌をつくる、俳句をつくる、詩を書く、小説を書く、脚本を書く。

言葉以外の場合も考えられます。というか、以下の例だともう実用化されてきているようです。

絵を描く、音楽をつくる、映画を制作する、数学の難問を解く、データの分析をする、ゲームをつくる、碁を打つ、将棋を指す。

こうした創作や特技の場合には、当事者の方々は不安でしょうね。

「やっぱり違うね」、「とにかく違うのよ」、「違うって言ったら違うんだ」、「なんかこう血が通っていないわけ」、「血と涙のないものに、血と涙のかよったものがつくれるわけないでしょ」、「これに、心と感情と魂とパッションが感じられますか?」、「A Iが書いた詩や小説（つくった曲）は、ちょっと見ただけで（聞いただけで）わかるもんね」、「A Iには絶対できないことが絶対にあってですね、えーっと、たとえば……」

10/02 おまかせしやう。

以上のようなご意見を見聞きします。共通するのは冷静を装いながら感情的になられていることです。むきになっているというか。むきっ。「A Iによる創作には評価もコメントしません」という門前払いも目にしたことがあります。A Iの創作とは知らずに涙を流したとか、苦い経験でもあるのでしょうか。

無いものねだりな批判であったり、具体的ではなく一般論による批判もあります。作品に即した批判になっていないという意味です。はなから馬鹿にして、そもそも鑑賞していないのかもしれませんが（初めから「結論」がある感じ）。

あと、言っていることが支離滅裂に近くて論理的でなかったりもします。あ、これは私のことでした。AIM・ソウ・ソーリー、AIM・ソウ・ろんりー。しょぼん。

創作活動ではなく、介護や医療などの分野だと、職業としている人が不安に感じる一方で、事業者は期待するかもしれません。ユーザーの立場からだと、どうなのでしょう……。他人事ではありません。

## 悪夢

ある日とつぜん、自分の勤め先から、あなたはもう必要がなくなったから辞めてほしいと言われたときの気持ちを想像してみましょう。

悲しいし、理不尽さに腹が立つにちがいありません。この先どうやって食べていけばいいのだろう。家族はどうなるのか。切実な問題です。さらに言うなら、生き甲斐もなくなるでしょう。これはつらいです。

自分が否定される。自分の存在と存続が危うくなる。

解雇の理由が、誰かでなく、機械だとしたら。自分より優秀な誰かではなく、自分より優秀な機械だとしたら。

悪夢でしょうね。

ありえない。機械の分際で。生意気な。

だいいち、機械には心がこもっていないではないか。機械のやること、書くことなんて、偽物、フェイク、まがいものだ。

\*

最後はやっぱり心。思いやり。そして血の通った体。機械には思いやりは不要。感情も気持ちも心もないから。そもそも血も涙もない。

とはいっても、欠点を指摘すると、それがたちまち改善される。あら探しが相手の進歩への奉仕になるという逆説。しかも二十四時間ぶっ続けに働いても疲れしない。

相手は機械ですから否定できません。悪態をついても動じません。仕方なく理詰めで批判すると、それを糧にして自分で学習しさらに向上するのですから、無力感に襲われます。

いっそ欠点や批判めいたことは何も言わないのがいちばんいいのかもしれないね。相手を利するだけです。無視しましょうか。いないことにしましょうか。

そんなわけにも、まいりません。

機械に取って代られるなんて、そんな馬鹿なことがあるわけがない。そもそも許されていいものはない。禁止するしかない。

なにしろ、誰かならいつか死にますが、機械なら簡単には死にそうもありません。下手をすればこれから先ずっと生きています。しかも進化し続ける……。

自分の出番が永久になくなるという意味です。こんな永久欠番は、もらってもぜんぜんうれしくないですよ。不安になり、腹が立つし、嫉妬心も起きるのが人情でしょう。私だってそんなの嫌です。

## 言葉というサイコロを振る

「言葉は魔法」シリーズを書いていたときに、言葉のサイコロとか、ダーツで言葉を当てて書くなんて考えてことがあります。一種の実験です。

偶然に任せて書くという実験。

言葉のサイコロとダーツは持っていないので、錐を使いました。新聞を広げて、錐を上からそっと落とすのです。すると何かの文字に当たります。それを使って「言葉は○」と書くのです。

そうやって作ったフレーズを断片にして、組みあわせて書いた記事なのですが、「詩みたいだ」という意味のことを言われました。

むなしくなったので、そういう書き方はやめました。

「現代詩」と言われて読んでいた詩が、回文やアナグラムだったときの驚きに似ています。感動した童話が機械の作文だと知ったときのショックに似ています。作者を伏せたまま読まされ駄文だと感じた文章が、ある有名作家の作品だと聞いたときの当惑にも似ています。

いったん書かれた言葉や文章は自立する、という説を思いだしました。作者はいない、という誰かの言ったフレーズも頭に浮かびました。

\*

偶然に任せて書くというのは、私がこれまでにずっとしてきた掛け詞に導かれて書くというのとよく似ています。そっくり、激似です。

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と

澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術である。

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことはありませんか。走っても走っても走ってないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもりなのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもじつは賭けていないと激似ではありませんか。じつにもどかしいです。

気に掛けても掛けてもじつは掛けたことにはならない。絵が描けても描けてもじつは描けてはいない。絵を描いても描いてもじつは描けてはいない。文章を書いても書いてもじつは書いていない。

こんな感じの書き方です。言葉の顔色と出方をうかがいながら書いている感じです。自分が書いているという気持ちは希薄です。

えっ、「駄洒落」ですか？

駄洒落とは、掛け詞の別称であり蔑称でもあります。格付けは、「掛け詞>言葉の遊び>駄洒落>だじゃれ>ダジャレ>親父ギャグ>おやじギャグ>オヤジギャグ」という感じでしょうか。

駄洒落はきっと降ってくるのです。降りてくるのです。いま思わず天井を見てしまいました。

まさに賭けているのです。ギャンブルです。何かにお任せしながら、パチンコをしているのと似ています。私はパチンコをしたことはありませんけど。

その何かは不明です。

賭けて書けたものだという思いだけがあります。体感で言うと、「ああ、出た」とか「あは、出てしまった」です。

人と機械の外にある外

人の意識と無意識は流動的だと考えられます。一様で一定してないということですね。自分が無になって書いていると感じているときには、無意識が大きくなって、そのぶん小さくなった意識のところだけが覚めている感じ。

だからぼーっとしているのでしょう。その状態でも、無意識は眠っているわけではなく動いているのでしょう。働いているのでしょう。

自動車の運転とか、ゲームの操作なんかがそうかもしれません。ある部分だけが動いている。これは一種の集中でしょう。肝心な部分は覚めているから、運転ができるし、ゲームができる。

そんなことを言ったら、歩くことだって、泳ぐことだって、〇〇することだって、そうかもしれません。私は泳げませんが。

ありとあらゆる情報が頭に入ってきたら、集中なんてできそうもありません。脳には容量と処理能力に限界があるからです。全部を使っていないという意味です。機械とは、そこが異なります。脳にしる身体にしる「使ってはいない部分」がある、ここに人を人にして「何か」があるという気がします。

\*

何となく書けてしまうというのは、難なく書けているようで、じつは何となく賭けているのではないのでしょうか。へそ天状態で顎でも掻きながら、書けている。賭けている。

難なくではなく、何となく。これが賭けだと思えます。

文章を書く機械が、賭けているのかどうかは不明です。それでも書けています。

機械も何かに任せて書いているにちがいません。その何かが人だとは思えません。全面降伏はしていないもようです。

とはいえ、



誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉のことです。

「人」を「機械」としても事態は変わらないと思います。言葉は、つねに機械の外にあって、機械にとっても「外」なのです。たぶん。そうじゃなかったら、どうしましょう。

冗談はさておき、「似ている」と「そっくり」という印象の世界に住む人間のつくった、「同じ」どころか「同一」の世界にいる「杓子定規」な存在が、機械やAIであることを忘れてはならないでしょう。

自然そっくり、知能そっくり、人そっくりという具合に、人は「そっくり」を相手に、「そっくり」という印象の世界にとどまっているのです。これが人としての粹なのですから致し方ありません。自然の代わりに自然もどき、知能の代わりに知能もどき、人の代わりに人もどきで済まし、澄ましているしかないのです。

(拙文「抽象を体感する、体感を抽象する」より)

#賭け # 書く # ギャンブル # 偶然 # 機械 # コンピューター # 言葉 # 創作活動



10/04 空っぽ



＊

空っぽ

星野廉

2022年10月4日 09:02

いずれにせよ、立方体だと大切なものが入っているようで緊張感が漂います。長方形や直方体は手や腕でかかえるのには持ち運びやすいですが、正方形や立方体は個人的にはやや持ちにくい気がします。この形の荷物を運ぶ人は大変でしょう。形は整ってきれいですが、人の体にはなじまない形状なのかもしれません。

(拙文「【小説】正方形と長方形で悩む夜」より)

目次

空っぽの立方体

各面が画面になっている箱

愛という箱、真実という箱

振りまわされる

置き換える

代わりに済まして澄ましている

関係性

なぞる

空っぽ

空っぽの立方体

言葉は空っぽの立方体のように思えます。両手で持てるくらいの箱です。持ち運びに便利な大きさだけど、立方体であることかきこまってしまう。運ぶときに、ぎこちなくなる自分がある。そんな感じの箱です。

中に何も入っていないことがいちばん大切です。なにしろ、言葉の話をしているのです。言葉が空っぽの箱だという話です。

言葉には何かが入っていますか？

＊

猫、ねこ、ネコ、neko。

この言葉には何も入っていません。入っている、何か詰まっていると感じるのは人だけです。猫にはそう感じられないでしょう。猫に尋ねたことがないので想像するだけです。

ネコという音声でも、ネコという文字でも事情は変わりません。空です。殻なのです。

ネコという言葉を作ってネコだと決めたのかもしれませんが。その場に立ちあつたことがないので想像するだけです。

こんなふうに言葉には不思議なことがたくさんあります。空っぽなのに謎だらけなんて、ギャグに思えてなりません。

＊

言葉はヒトにしか通じないギャグのようです。

たとえば、猫にも通じない猫という言葉でギャグ独走状態なのです。オカメインコ（オカメですよ）でもコビトカバ（なんというネーミングなのでしょう）でも事情は同じです。

孤独なギャグです。独走、独奏、独創、毒草。しかも空っぽなのだから、不思議です。私に激似じゃないですか。空っぽが言うのですから、間違いありません。

＊

言葉に罪はありません。私は言葉が大好きです。愛しています。そんなわけで、言葉

のあり方に疑問と懸念をいただいているのです。

つまりは、言葉に対する人のあり方に、です。

念のために申し添えます。

### 各面が画面になっている箱

猫を思いうかべてください。視覚的なイメージが浮かぶかもしれません。刻々と変わ  
りませんか？ 猫をネットで画像検索してみると、いろいろな種類の猫がいろいろな格  
好をしています。

生まれたての子猫もいるし、高齢らしき猫もいます。眠っている猫もいるし、障子を  
破っている猫もいます。ミックスを加えれば、種類も豊富です。

それぜんぶが猫です。それと同じく、猫という言葉で各人が思いえがく猫のイメージ  
は数えきれないものであり、刻々と移り変わっていると考えられます。

つまり、猫という言葉は、音声と文字としては確認できても（広い意味での複製だか  
らです）、各人のいなく、猫のイメージは確認できないことになります（まぼろしだから  
です）。想像するしかないのです。想像を想像するという騒々しい話になります。

\*

猫という言葉が空っぽの立方体にたとえるなら、その各面には猫の画像がつぎつぎと  
映しだされている感じでしょうか。各面がモニター画面なのです。でも、箱の中身は空  
です。画面に映った映像も、空っぽです。

斜めから見ても後ろから見ても駄目です。映像だからです。投影された影みたいなも  
ので、実体はないという意味です。

でも、猫なのです。その箱は猫だと決めたのです。cat でも事態は変わりません。決め

た以上、その箱の各面に映しだされた映像が人にとってのリアルになります。

リアルであることに必ずしも実体は要らないのです。

実物や本物も起源（原型・元祖・出典）も要りません。複製や複製の複製や引用が身のまわりにうようよしているじゃないですか。大量生産された製品、楽曲、料理、絵画、写真、映画、放送、小説、文書、画像、動画.....。

どれも、あなたにとってはリアルな「物」ではありませんか？ 複製と引用とはそれ自体で完結した「リアル」なのです。人が「似ている」と「そっくり」の世界、つまり印象の世界に住んでいるからです。

あなたは大切な人の写真を踏めますか？ 大切な人の名前が書いてある紙を踏めますか？ その人じゃないですよ。像であり文字です。

そこに映っているのが、またはその名が書いてあるのが、人でなくてもかまいません。キャラクターでも、小説や映画の登場人物でもかまいません。あなたが見たことも会ったことのない歴史上や伝説上の存在でも神でもかまいません。

でも、その写真や名前が踏めないとすれば、踏むのにためらいがあるとすれば、それがリアルであるということです。人としての想像力の問題なのです。

この想像力があってこそ、人は人なのかもしれません。

### 愛という箱、真実という箱

猫を見たことはありますか？ 触ったことは？ 山を見たことはありますか？ 薔薇の匂いを嗅いだ経験はあるでしょうか？

愛はどうですか？ 真実や論理に触ったことはありますか？ 詩の匂いを嗅いだことはありますか？ 哲学や思想を舌で味わった経験はどうでしょう？



＊

文学っぽさ、論理っぽい、真実らしさ、愛のような、哲学的、詩みみたいな、知っている振り。

ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り。こうしたものが、言葉の空っぽらしさ、空っぽぼさを表している気がします。

〇〇ぼさ、〇〇ぼい、〇〇らしさ、〇〇らしい、〇〇ような、〇〇的、〇〇みたい、〇〇振り——〇〇を欠いた、人にだけ分かるギャグなのかもしれません。

印象の世界に住んでいて、〇〇という体感できないもの（「抽象」のことです）にたどり着けないため、人は「ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り」（「抽象的」のことです）に反応して振りまわされます。

＊

なにしろ、人はまず「〇△X」という言葉を作って、その次に「〇△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物だから、こうなるのです。

上に引用したのは、何度もいろいろな記事で私が書いてきたフレーズですが、「ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り」と同様に、これも言葉の空っぽさを表している気がします。

たとえば「〇△X」という言葉をめぐって、「〇△Xとは何か？」とああでもないこうでもない、ああだこうだが続いているのは、「〇△X」という言葉が空であり殻でしかないからではないでしょうか。

中身がないから、「何か？」の答えが出るわけがないのです。これまでも出なかったし、いまも出ていないし、これからも出ないでしょう。

ただし、「〇△Xっぽさ、〇△Xっぽい、〇△Xらしさ、〇△Xらしい、〇△Xのような、〇△X的、〇△Xみたい、〇△Xの振り」はあるでしょう。

10/01 土曜日

実体はなく、イメージやまぼろしとして立ちあらわれている感じです。

「○△Xとは何か？」の答えが出ないのは、「○△X」ではなく、「ぼさ、ぼい、らしさ、らしい、ような、的、みたい、振り」をめぐって、ああでもないこうでもない、ああだこうだと言っているからだという意味です。

人は印象の世界に住んでいて「○△X」を体感できないからです。人は自分が思っているほど抽象（抽象的ではあっても）ではないとも言えそうです。

＊

愛、真実、論理、詩、小説、哲学、文学、平和、思想、普遍性、客観性。こうしたものを、ネットで検索するとその使い方が分かります。その言葉が使われている文や文章の中で、その言葉は生きています。

「○△Xとは？」ではなく、その○△Xの用法を見て、積極的に「○△Xっぽさ、○△Xっぽい、○△Xらしさ、○△Xらしい、○△Xのような、○△X的、○△Xみたい、○△Xの振り」とたわむれることが大切だと私は思います。

たとえば、愛という空っぽの箱、真実という空っぽの箱の各面に、ネットで検索した文や文章が映るようなものです。その映像をながめる。その画面の後ろには何もないのだと割りきることで、気持ちが楽になればいいですね。

何かを想定して振りまわされ躍起になるよりは、心やすらぐのではないかと私は思います。

とはいえ、ないものに振りまわされるのが好きでたまらない人もいます。人それぞれです。

**振りまわされる**

言葉ではなく、どうやら自分たちが言葉に勝手にいただいているイメージやまぼろしに、人は振りまわされているというのが正確な言い方かもしれません。

「○△Xっぽさ、○△Xっぽい、○△Xらしさ、○△Xらしい、○△Xのような、○△X的、○△Xみたい、○△Xの振り」をめぐっててんてこ舞いしているようです。

上の「○△X」に、あなたのいちばん気になるもの、いちばん愛しているもの、いちばん嫌いなものを当てはめてみると、体感できるのではないのでしょうか。

「振りまわされる」には、愛も憎しみも怒りも悲しみも諦めも含まれます。

そして、喜びや快感もです。人は振りまわされることに嗜癖しているのかもしれませんが。「いやだ、もー」とか「やれやれ」とか「むきーっ」と口にしながら、嬉々としているのではないかという意味です。

## 置き換える

言葉の根っこには、置き換えるがあるようです。

・



上の●と・をご覧ください。●が手前に、・が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景というふうに連想を呼びさます気がします。

向こうから追いかけて来る、トンネル、望遠鏡、顕微鏡、研、エコー、太陽と惑星、進化、だんだん大きくなっていく、だんだん小さくなっていく、遠くなっていく、近くなっていく、「おーい!」「何だーい?」、「待ってくれ」、「さようなら」ー。子を見送る親、

「元気でね」、いつまでも遠くで見ている。

ストーリーを感じませんか？ 声が聞こえてきませんか？

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。要するに、連続して置き換わっていくわけです。動きやドラマが生まれてくるとも言えます。

もう一度見てみましょう。



私なんか、遠くで見守っている存在と見守られている存在の関係を勝手に想像して涙ぐみそうになりますが、遠くからじっと監視されているイメージを呼び覚まされて身震いする人がいても不思議ではありません。

\*

Aの代わりにAではないものを用いる。つまり代用する。

Aの代わりにBを用いる。つまり代用する。

「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる。

これも、十三年ほど前から、何度も使ってきたフレーズです。言葉の仕組みについて述べたものです。

代用するというのは、置き換えることに他なりません。

猫の代わりに猫という言葉を用いる。このように言えば分かりやすいと思います。

話し言葉である音声、書き言葉である文字だけでなく、表情や身振りといった視覚言語も、事物の代わりに用いられます。置き換えているわけです。

## 代わりで済まして澄ましている

Aの代わりにAではないもので済まして澄ましている。

これが、「Aの代わりにAではないものを用いる。つまり代用する」の代わりに用いているフレーズです。最近気に入ってよくつかっています。

Aの代わりにAではないもので我慢している。

これが、その前のバージョンなのですが、「我慢する」⇒「済ませる」⇒「済まして澄ましている」とバージョンアップしました。

大きいものの代わりに小さいもので済まして澄ましている。

長いものの代わりに短いもので済まして澄ましている。

重いものの代わりに軽いもので済まして澄ましている。

厚いものの代わりに薄いもので済まして澄ましている。

遠くにあるものの代わりに近くにあるもので済まして澄ましている。

手に届かないものの代わりに手に届くもので済まして澄ましている。

すごいですよね。すごくコンパクトですっきりとして、さくさくな状況になっています。要するに横着なのです。

＊

具体例を挙げます。

「大きいものの代わりに小さいもので済まして澄ましている。」：地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、パソコンの画面。

「長いものの代わりに短いもので済まして澄ましている。」：世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「重いものの代わりに軽いもので済まして澄ましている。」：地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「厚いものの代わりに薄いもので済まして澄ましている。」：本（書物）、文書、地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「遠くにあるものの代わりに近くにあるもので済まして澄ましている。」：望遠鏡、顕微鏡、電信・電報、電話、テレビ、本（書物）、文書、地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

「手に届かないものの代わりに手に届くもので済まして澄ましている。」：望遠鏡、顕微鏡、電信・電報、電話、テレビ、本（書物）、文書、地球儀、世界地図、天体模型、パノラマ、百科事典、図鑑、写真集、世界史、宇宙の成立の話、年表、記録映画、早送り、パソコンの画面。

なんだか、やっつけ仕事というか、いい加減な作業になってきて、ごめんなさい。人の横着ぶりとそのすごさが、おわかりになれたでしょうか。

無媒介的に世界に触れることのできない人類は、実世界ではなく、別世界と異世界に住んでいるようです。

人は実世界の代わりに別世界と異世界に住んで済ましている。

自分を基準にして、人類を語ってごめんなさい。こういうややこしいことについて観察できる人類が自分しかいないのです。

## 関係性

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かに何かを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。現れるのです。

● ●

上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。

● .

今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、です。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなとこども。人と犬。人とペット。この国とあの国。遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

こうした連想も、置きかえでしょう。置き換えは関係性とも言えます。関係性には実体はありません。抽象的な概念です。その実体のないものを、人はたとえば、二つの大きさの異なる点に見てしまうのです。

＊

人それぞれですが、二点を見ている限りは何か置き換えています。そのものを見るというのはきわめて難しいようです。かならず、何か自分の知っているものやことに置き換えるのです。

いま私は二点とか、大きさの異なる二つの黒い点という言い方をしました。これは一つの見方です。人によって、

● .

をどんな言葉に置き換えるかは異なります。たまたま似たような言葉になるのは大いに考えられますが、つねに同じではないでしょう。

いずれにせよ、関係性に置き換えて見てしまいます。無意味というのも、関係性です。

関係性を、意味、筋書き、物語、背景、隠れた意味、隠喩などに置き換えることもできるでしょう。因果関係という物語にまで発展させる人がいても驚きません。

目が二つとか、顔に見えるどころの話ではないのです。もっと症状は重いのです。自分を観察した結果、重症の私が言うのですから、間違いないでしょう。

### なぞる

\*

.

●

\*

●

●

\*

●

.

\*

背後には何もないはずなのに、何かを見てしまう。これは何かをなぞっているとも言えそうです。形だけでなく、関係性や物語さえなぞってしまうのは、それらが人の中にあるからかもしれません。自分の中にあるものを見てしまう、なぞってしまう、こじつけてしまう。

人は無意味なものを恐れます。不安に駆られるのです。そこで、何か見たいもの、これまでに見たものに置き換えます。



言葉の場合だと、名づけるのです。名づけて手なづけ、飼いならそうと試みます。何か知っているもの、お馴染みのもの、要するに自分が安心するものに置き換えることで、心の平静を保つとか、気持ちの上で優位に立とうとするわけです。

＊

それはそれでいいのです。そうしてこそ、人です。それができないと人として生きるのに困難を覚えるでしょう。生きづらくなります。

一方で、別の生きづらさも引き受けなければなりません。それが意味です。意味には、イメージ、筋書き、物語も含まれます。こうしたものは、人を振りまわします。その結果として、生きづらくなります。

意味禍は意味佳でもあるのです。

＊

意味、イメージ、筋書き、物語には、人を振りまわすと同時に、人の気を逸らす働きもあります。

お馴染みのもので、無意味という不安な気持ちを逸らすのです。

イメージや物語には動きがありますから、よけいに気持ちが紛れます。表情や身振りの根っこには動きがあります。動いているものを見ていると、自分も動きます。「うつる」のです。

気持ち、心、魂だけでなく、体も動きます。というか、いま挙げたものは連動しているのです。

「うつる」のです。映る（投影・投射・感応）、写る（複製・模倣・再製）、移る（伝達・翻訳・遺伝・継承）、です。

＊

なぞるという動きを利用したものが、言葉でしょう。音声であれば、波ですから、もろに動かされます。

文字であれば、繰り返しなぞって真似て学んで習得しますから、それが学習の成果として自動的に動きを誘います。

これはすごい工夫です。

私は文字というものが不思議でなりません。よくもまあ、こんなややこしい、込みいった仕組みのものがあるものだ、とたえず感心しています。

人は視覚が異常に発達していると言いますが、目で見える身振りや表情のようにすぐに消えなくて、しつこく居残る文字に、人がこれだけ取り憑かれるのはうなずける気がします。

＊

文字は習得しないと意味を持ちません（その文字を知らない人には無意味です、ヒト以外の生き物にも意味を成しません、これだけでも不思議だしすごいです）。習得すると、人を動かします。人は文字で動いていると言っても言いすぎではないでしょう。

音声や表情や身振りや映像よりも、人は文字に信頼を置いています。学習の成果は恐ろしいものです。

文字の基本は信じることです。文字を読むことは文字を信じることに他なりません。いったん信じるのです。信じるのを撤回するのは至難の技です。面倒でもあります。

つぎつぎと文字が目の前に現れるのですから、処理しきれないのです。そのため、人は文字を受け入れ、圧倒され、結果として信じてしまう場合が多くなります。

批判、否定、反発は、信じた結果として生じる後付けです。信じたことには変わりありません。信じないと否定もできないとも言えます。

## 空っぽ

二つの点をいろいろに置き換えられるのは、二点が空っぽであるからに他なりません。空っぽだから、各人が勝手に何かを見てしまうのです。何を見てしまうのかは、そのときの気分や体調や天気にもよるでしょう。

一定していないのです。移り変わるし揺らぐのです。それが人です。正解が一つだけあるわけではないし、天才とか神のような人と呼ばれる人だけがある正しい答えを独占しているわけでもないでしょう。

そう思ったがるのが人情なだけだと思います。

\*

「空っぽ」を「中身がない」とか「無意味」とか「無」とか「意味の萌芽」とか「有意味」とか「有」とか「存在」とか、いろいろに置き換えられること自体が「空っぽ」だからでしょう。

ここでお断りしますが、依然として言葉の話をしています。音声、文字、表情、身振りのことです。

\*

「空っぽ」です。空（くう）とか、無（む）とか、気取ったり格好を付けると語弊や言葉の垢が付いて、空っぽが「有」になってしまいます。「っぽい」が付いてしまうのです。

言葉は空っぽなんです。だから、そこに何かを詰めこんでしまうのです。それが人情です。

なにしろ、空っぽを直視したら、人はたぶん人ではなくなります。人の外に出て、外そのものに化してしまうかもしれません。もちろん、いまのは比喻です。置き換えです。

置き換えている限り、大丈夫です。済まして澄ましている限り、大丈夫です。

置き換えないことには、直視してしまいますから。雲をつかむ「ような」話で申し訳ありませんでした。

※この記事は、「意味、言葉、レトリック、体感」および「抽象、具象、体感、印象」というマガジンに収めます。この二つのマガジンは、私にとってこれまでの集大成です。ご覧いただければ嬉しいです。

意味、言葉、レトリック、体感 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、意味、言葉、レトリック、体感です。

[note.com](https://note.com)

抽象、具象、体感、印象 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、抽象、具象、体感、印象（「似ている」「そっくり」）、レトリックです。

[note.com](https://note.com)

#小説 # 抽象 # 具体 # 文字 # 言葉# 意味 # 物語 # 筋書き # イメージ # 体感 # 印象  
# 想像



---

うつせみのあなたに 2022年9-10月

---

著 星野廉

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---